1987—1998

高知県産業デザイン振興協議会は10年前の発足以来、デザイン振興を目的として活動してきました。活動に際しては多くの方々からご支援やご協力を賜り御礼申し上げます。
10年前といえば、通商産業省によるデザイン・イヤー運動が開始され、さらに国際デザイン会議が名古屋で開催された頃であります。時代はまさにデザインの風が吹いていました。
そういう中、当会が実践したテーマ事業は、高知という文化的土壌を重点に、会員自らが“事業主（デザイン依頼者）”となって、デザインが果たす事業的可能性のシミュレーションを行い、あらゆるデザインの可能性をアピールしようとするものでした。
この取り組みは県域を超えたそれなりの評価を得ましたが、県下のデザイン振興という点において多少なりとも貢献できたとするならば会員共通の喜びです。
当会は10年を機に、より時代に合った組織を再編すべく解散いたします。
新しい会はデザイン振興という点に軸足を残しつつ、デザイン関係者のみならず、デザインを重要と考える人々の集まりにしたいと考えております。
10年間の成果が次の時代の踏み台となることを願いつつ、ここに記録としてまとめをさせていただきました。

Kochi Industrial Design Promotion Council

高知県産業デザイン振興協議会

このアクロバットの使い方

目次の●をクリックすると
イベントや交流会にリンクします。

目次の写真をクリックすると、
その内容がわかります。

リンク先から「目次」に戻るには
●をクリックします。

▲を押すと関連する先頭に戻ります。

次のページからです。

キーボードの矢印キーで、前後します。

目次-01　10年の活動　1997−1998

1987 12・22

●高知県産業デザイン振興協議会設立
あらゆるデザイン活動を通して、高知県の産業の発展と文化の向上に寄与するとともに、よりよい自然と産業と人の関係を創りだすことを目的として県内デザイナー18名により設立。
以後、毎月第2火曜日を定例会とする

1988 8・24

●第1回企画事業 89デザインイヤーに向けて
デザインシンポジウムと交流展示会
基調講演「'89デザインイヤーと世界デザイン博覧会」
手銭正道 東海大学教養学部部長。
国内の主要デザイン7団体の活動紹介展示。

9・13

●鰹プロジェクト企画取り組み案の決定
協織会メンバー全員参加による「鰹」をモチーフとした業態デザイン開発に着手。

11・28

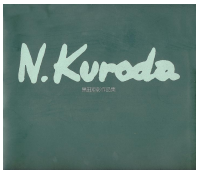
●通商産業省選定グツドデザイン商品Gマーク
家具インテリア部門・部門別大賞受賞記念発表会
土佐和紙照明器具「カルタシリーズ」
イメージラボテクスト／加藤俊男 記念講演と作品の展示発表

1989 1・10

●第2回特別セミナー鰹の特性について
高知県工業試験場／主任研究員野村明 鰹の種類、生態、特性、分布等の実態把握

3・15〜21

●黒田矩彰回顧展
当協議会初代会長・黒田矩彰先生の一周忌展覧会を開催。
その後「黒田矩彰作品集」を出版。



5・25

●第4回船上鰹セミナー　体験／船上鰹料理の知識
大助丸観光株式会社／社長 伊藤大助
協議会メンバーほか県外デザイナーを交え、土佐湾沖にて、鰹の刺身・藁焼きタタキ・鰹めし・鰹汁等の調理法体験。

5・26

●第5回市場鰹セミナー　視察／入札及び高知卸売市場の知識
高知市中央卸売市場／主幹　井上武夫　　弘化台視察と漁獲高・消費者動向の研修会。

●体験／土佐鰹料理の知識
福屋観光高知店／料理長 橋爪楠明
茅焼きタタキの実演と高知県下の特徴的味付けの違いを各種賞味。

●世界テザイン会議キヤラバンコングレス・イン高知
地域のアイデンティティ形成
共催：世界デザイン会議運営会
佐野邦雄（ジョイントデザインシステム）
榎本了壱（アタマトテインターナショナル）
成田佳隆（世界デザイン会議運営会）
10月に開催予定の世界デザイン会議（ICSID　89NAGOYA）と土佐・鰹プロジェクトの企画発表。

目次-02　10年の活動　1997−1998

1989

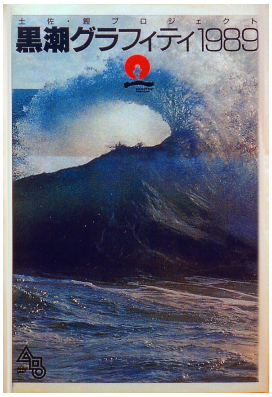
8・26
●第1回デザインジョイントトーク
テーマ:これからのデザインマネジメント
益田文和(インダストリアルデザイナー)／林　利和(商品価値開発プランナー)
加藤俊男(インダストリアルデザイナー)

9・16
●第2回デザインジョイントトーク
テーマ:地域産業とソフト開発
長澤忠徳(デザインコンサルタント)／大藤恭一(広島県　デザイン研究員)

黒潮グラフィティ1989

10・9
●デザインシンポジウム
鰹プロジェクトの研究成果をもとに開発された作品、デザイン事例を総合的に発表。
「デザイン」をとおして高知県の生活・産業・文化のあり方について話し合いました。
日高一樹(通商産業省検査デザイン室)
佐久田浩(日本産業デザイン振興会)
田内一成(高知県工業試験場)
奥村昭夫(パッケージングクリエイト)

10・10
●イベント交流会
高知市桂浜において、高知県内外のゲストを招き、土佐の風景(太平洋)、風味(下り鰹)を楽しみながら、イベント開発事例のプレゼンテーションとして開催。150名参加。



10・11〜14
●デザイン発表展示会とパッケーション土佐'89
「土佐を包む」
鰹プロジェクトによる総合デザイン開発作品をパネルワークやVTR等により展示。同時に、有名デザイナーの代表作品を招聘するとともに、パッケージデザイン開発事例と合わせて発表展示。

10・14
●第3回デザインジョイントトーク
テーマ:デザインで語る土佐のアイデンティティ
楠瀬浩二(クリエイティブディレクター)
泉　順一(ゼネラルコンサルタント)
永野恭二(ビジュアルプロデューサー)

1990

2・15
●'89デザイン記念シンポジウム　「デザインワークショップ」事例発表
東京において、全国15カ所で開催された地域別デザイン研究会の一つとして発表。

3・20
●高知県地場産業賞受賞「デザイン振興グループ活動」

8・14
●産業・文化インターフェイス構想の作成
「デザイン推進センターDAIN構想」
デザイン推進センターを核として、地場産業と文化事業の共有領域(interface)を拡大させつつ、新業態開発の創出により国際環境の変化に対応しうる企業集積の促進を提案。

10・9
●黒潮グラフィティ1991企画取り組み決定

目次-03　10年の活動　1997−1998

1991

1・24〜30
●ハワイ・ホエールウォッチング　研修ツアー
元吉勝美（アドランド）
守谷孝男（デザインスタジオ301）

6・30
●大方・ホエールウォッチング調査・研修
第5海昇丸／船長　松田澄男
協議会メンバーによる調査ウォッチングを行い、
ニタリクジラと遭遇。クジラの個体識別法について研修。

黒潮グラフィティ1991

8・4
●イベント交流会
黒潮体感イベントとして、大型クルージング船を借上げ
土佐湾沖において80人規模のホエールウォッチングを
開催しました。当日は残念ながらクジラに遭遇できません
でしたが黒潮の雄大さと脱日常の空気を満喫しました。
高知における県外参加者（客人）向けイベント開発事例として、一過性に留まらない事業化の
方向を探る参加者全員の意見交換の場となりました。

9・26
●デザインシンポジウム
オーシャン・エコロジーの視点から、地域振興を果たすグランドデザインへの取り組み
と今後の可能性や問題点について、基調講演をもとに意見交換を行いました。
また、山梨県、徳島県、高知県の地域デザイン開発事例を発表、"デザインの
王道とはどうあるべきか"等、地域産業の関わりにおいて厳しい意見が続出しました。
●基調講演／日高一樹　パネラー／小林春生　黒河昭一　楠瀬浩二
●コーディネーター／坂本昌三郎　●司会／仲村　譲

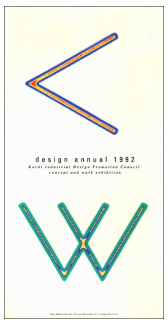
9・26〜29
●デザイン発表展示会
コンセプトに添ったパーソナルデザイン作品の展示を県外
デザイナーを含めて行いました。産業、文化、生活にまたが
る地球環境や地域環境を自然生態系からとらえたビジュア
ルメッセージや音響メッセージとして発信しました。

1992

2・14
●地域デザイン会議　92北海道
「デザインワークショップ」事例発表
旭川市において、全国5地域で開催された地域別デザイン研究会の一つとして発表。

7・28〜
11・17
●CG高度利用技術セミナー
加藤俊男（テクニカルコーディネーター）
西出順吉、松土光司（インデクス）
高野　薫（カテナデザイン研究所）
コンピューター・デザインの先端技術研修を目的として、Macintoshを利用した
延べ10日間の実習を行いました。2次元CADから3次元CG、アニメーションまで
幅広い内容で、デザイン業界へのコンピューター導入を加速しました。

11・26
●design annual 1992
デザイン特別セミナー
奥村昭夫（パッケージングクリエイト）
デザイン事務所へのMacintosh導入事例として、事業内容や作業効率の変化、
将来への予測を講演。貴重な情報交換の場となりました。



11・27〜
12・1
●コンセプト&ワーク展
協議会メンバーと特別招待者による、この1年間の代表的デザイン開発事例や提案
作品の発表を行い、デザインの存在理由やその価値をあらためて問いなおしました。

目次-04　10年の活動　1997−1998

1993

黒潮グラフィティ1993（もてなしプロジェクト）

10・1（デザインの日）

●デザインシンポジウム

デザインパラダイムの変換期と言われる今、日本とイタリア他、外国とのデザイン認識の違いを明らかにしつつ、「90年代における地域デザイン」のあり方について、全国のデザイン開発事例の現状について解説いただき、意見交換を行いました。

●クロストーク
　日高一樹(株式会社ディー・エヌ・エー代表取締役)
　佐藤康三(コーゾー・デザインスタジオ代表取締役)
●デザイン活動事例発表
　高知県：西岡鶴夫（株式会社ノーマンド代表取締役）
　熊本県：出田貴康（熊本県商工政策課主幹）
●ディスカッション
　日高一樹、佐藤康三、出田貴康
　長澤　昭（株式会社高知県商品計画機構代表取締役）

10・2〜5　**●デザインエキシビション**

参加デザイナーがコンセプトに添った分野別のデザイン開発案を作成し、発表展示を行いました。

10・1　**●デザイン交流会（特別企画）**　「新土佐流もてなしのデザイン」の事例発表。

●DTP編集出版事業1994〜1998
（デザイン情報誌　黒潮グラフィティ発行事業）　●1号　●2号　●3号　●4号　●5号

1994

土佐HyperMeeting（第1回〜7回）

06/10 第1回　●上田堯世　ピカっと、キチっと、ドシっと
07/12 第2回　●加藤俊男　新作カルタの開発と発表
08/09 第3回　●長澤　昭　高知ブランドの全国発信
09/13 第4回　●元吉勝美　クジラとの新しい関係
10/11 第5回　●木村重来　高知市のコミュニティ計画
11/08 第6回　●田中幹男　編集のデジタル化
12/2 0第7回　谷本　信　シンクタンクの活動と高知県

1995

土佐HyperMeeting（第8回〜11回）

01/10 第8回　楠瀬浩二　自分の世界で遊ぶ仕事
03/14 第9回　大塩伸一郎　デザインは提案産業
05/09第10回　田内一成　高知県の科学技術振興
06/13第11回　片岡考元　印刷会社のDTP

インターネット研究会

02/14 第1回　仲村　譲　インターネットの世界1
08/22 第2回　仲村　譲　インターネットの世界2
12/12 第3回　仲村　譲　インターネットHP作成法

1996

土佐HyperMeeting（第12回〜15回）

02/20第12回　藤田厚人　平成14年高知国体に向けて
08/13第13回　森下幸彦　高知国体に向けて課題と展望
09/10第14回　片岡考元　印刷会社のDTPとPDF
09/18第15回　日高一樹　知的財産権特別セミナー

1997

土佐HyperMeeting（第16回〜20回）

06/10第16回　●窪田光章　写真技術と現状と対応
07/25第17回　山本康雄　消失模型鋳造法
07/25第17回　佐藤真治　FOODと風土とHMR
08/19第18回　●守谷孝男　デザイナーのためのスポーツ医学
09/09第19回　●吉田穂積　環境デザインとパブリックアート
誌上 第20回　●片岡考元　PDFの概要と使用例

●土佐のモノ・コト・ココロ商品デザイン開発事業

06/26　企業探訪1　溝渕林産興業株式会社　テーマ：木材の丸棒加工と防腐処理技術
07/25　企業探訪2　川竹合金鋳造所　テーマ：消失模型鋳造法
09/25　企業探訪3　ブルーライン工業株式会社　テーマ：工作機械製造技術
11/12　高知工科大学見学会

1998

土佐HyperMeeting

03/24第21回　益田文和　地場産業におけるデザインの導入

1987

高知県産業デザイン振興協議会とは？

あらゆるデザイン活動を通して、高知県の産業の発展と文化の向上に寄与するとともに、よりよい自然と産業と人の関係を創りだすことを目的とする。

私達の運動は高知から出発します。高知を愛し、高知に生き、高知で活動する私達にとって、高知がもっとも大切な郷土であると、誇りにできるようにしようと考えます。そして、この運動が、四国、日本、地球規模へと拡がって行くと同時に、あらゆる地域から注目される高知でありたいと考えます。それは、高知でしかできないことではなく、あらゆる地域に普遍性のあることでありながら、先ず高知から始まるのです。

高知県産業デザイン振興協議会設立の経緯

高知県におけるデザイングループの活動は、かつて昭和30年代、高知県出身のデザイン系学生及び卒業生によるデザイングループ「D」が組織され、高知大丸においてグループ展が開催されたとの記録があります。しかし、そのメンバーの多くは、今や県外在住のデザイナーとなり、県外企業の発展に寄与していると聞いています。
また、毎年開催される「高知県美術展覧会」のグラフィックデザイン部は、文化振興に大きな影響を及ぼしていると思われます。
しかし、新しい時代の流れの中に、デザイン運動が求められているのも事実です。
たまたま6人のデザイナーがめぐりあい、高知県の発展の為に、クリエーターという立場から何が必要であり、何を為すべきかを考え、実践していく組織を作ろうということになりました。
それは、デザイナー個人の仕事の限界を補いあって、より大きな視点をもち、高知の未来に何を残すのかを考えると言ったような漠然としたものでもありました。日々の仕事に満足できない、デザイン本来の力を取り戻そうとする動きでもありました。
何度か話し合いが持たれた後、ある一定期間、組織の運動方針が明確になるまで各自が、2名を推薦し、18名で活動を開始しようということになりました。
こうして1987年12月22日、高知県産業デザイン振興協議会が発足しました。
デザイン関係者の単なる親睦団体で終らず、実質的に産業と関わりを持ちながら、地域を理解し、意識を深め、「デザイン」による、より良い郷土づくりを目指すことがこの会の目的です。

高知県産業デザイン振興協議会K・I・D・P・Cの概要

地域運動は、何ものにも縛られない自主性が必要だと考えます。
デザイン活動も例外ではなく、行政・企業からの依頼で動くのではなく、あらゆる課題に柔軟に対応できるようにしようと考えました。デザイナーとしての利害を越えデザイナー1人1人の活動を通して、高知県の発展に貢献したいと考えます。また、さまざまな組織と交流・協力しあい、地域産業、地域文化をデザインの視点から発展させることが、とりもなおさずデザイン産業の活性化にも繋り、私達の望む高知に一歩でも近付くことだと考えます。私達は、素晴らしい「地域（ローカル）」を、希求します。

1987

活動の内容

「楽しい高知」を創るために、あらゆるデザイン活動を行いますが、基本的には、四つの事業を企画実行しながら、展開していきます。

1.デザインに関する各種情報の収集と交換、デザイン業界振興に関する事業

全会員参加による定例会を、毎月1回、高知県地場産業振興センターにおいて開催し、デザイナー間の情報交換を行うとともに、事業計画について話し合い、個々に必要とされるデザイン活動の方針を決定します。また、例会記録及びデザイン関連資料は、会報として後日配付されます。

2.デザイン啓蒙に関する事業

県内企業、行政関係者に対して、本来のデザインの姿、力を理解していただけるようデザイン懇談会やデザインセミナー、デザインシンポジウムを開催します。自分たちにとっても、もう一度足元を見つめなおすチャンスだと考えます。

3.県内産業・文化事業のデザインに関する事業

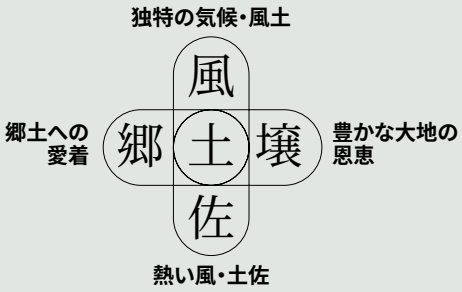
異業種交流会やデザインセミナーを通して知り合った企業、団体に対してデザイン開発の協力を行います。協議会が窓口になるとともに、個々のデザイナーで対応が出来ない場合は、協議会参加デザイナーでプロジェクトを組むことも考えられます。

4.各種団体とのデザイン交流に関する事業

県外各種デザイン団体とのデザイン会議、交流展示会を開催します。高知県の独自性を主張するとともに、新しい文化の流れに触れ、刺激しあい、お互いに発展して行く道を探ります。

Design Concept

高知県の風土を象徴する＜太陽＞と、土佐の、＜土＞をシンボライズしたマークです。
同時に「高知県産業デザイン振興協議会」の活動を意味する。プラスワンを表現しています。

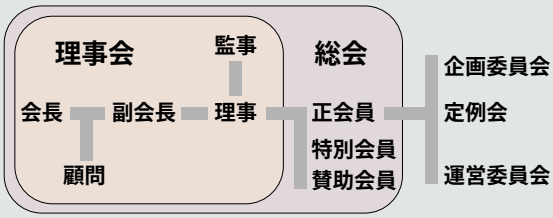


1987

活動組織と会員構成

協議会概要

代　表　者　楠瀬浩二（アイランドAC代表）
顧　　問　坂本昌三郎
　　（高知県地場産業振興センター専務理事）
運営形態　会費制、デザイン振興事業を
　　主目的とする任意団体
会　員　数　26名（1988.08.01現在）
会員構成　高知県在住デザイナー、
　　デザイン関連業務に従事するものなど
会　　費　正会員／15,000円
事　業　費　必要経費を会員負担、及び協力金による
設立年月日　1997年12月22日
設立発起人　黒田矩彰／泉順一／楠瀬浩二
　　加藤俊男／狩野信児／田中幹男



※高知県デザイン業界の草分けともいえる黒田矩彰氏が初代会長でありましたが、協議会結成まもない3月26日、急病によりご逝去されましたため、現在5名の理事体制で運営されています。また、活動内容がより具体化されつつありますので、新会員の参加を認める方向にあります。

	氏名	企業名	TEL	FAX
会長	楠瀬浩二	（株）アイランドエーシー	0888-24-0081	0888-73-0293
理事	泉　順一	泉事務所	0888-73-1515	0888-73-1562
理事	狩野信児	Karino Design offiice	0888-45-2404	0888-46-2346
理事	田中幹男	サムタック	0888-45-7103	0888-45-7122
監事	加藤俊男	（有）イメージラボ　テクスト	0888-24-8011	0888-24-8017
	IB　CLAUSEN		0888-62-1758	
	浦川俊明	（株）ポリセント	0888-22-2666	0888-24-2687
	岡村　總	スタッフ・デザイン事務所	0888-75-4303	0888-75-4303
	織田道生	織田道生デザイン事務所	0888-22-3352	0888-22-3352
	川崎清隆	（有）ヘッズ	0888-33-9025	0888-33-9026
	川添　寛	（有）フォーマス	0888-66-4440	0888-66-6143
	窪田光章	窪田写真事務所	0888-43-8069	0888-40-2865
	高橋鴻二	高橋デザイン事務所	0888-72-1779	
	武内正文	（有）デザインオフィスびるぼ	0888-83-0055	0888-83-0045
	谷渕彰男	あどこうち	0888-23-5760	0888-73-1360
	中島　悟	アド・ゴーデザイン事務所	0888-25-2329	0888-24-4190
	永野恭二	（株）ニュートラル	0888-75-2200	0888-72-0581
	中山陽一	オフィスエアー	0888-24-7810	0888-24-7810
	西岡鶴夫	ノーマンド	0888-72-5133	0888-72-5133
	西岡　望	西岡設計事務所	0888-82-9173	0888-82-7859
	浜口勝洋	（株）アークデザイン研究所	0888-82-5330	0888-82-5341
	松井大洲	（株）ハート	0888-82-0196	0888-82-7834
	元吉勝美	アドランド（株）	0888-82-1223	0888-82-1240
	守谷孝男	デザインスタジオ301	0888-24-9164	0888-24-9164
	森山雄司	（株）プラザデザイン事務所	0888-24-6133	0888-24-8653
	山崎彰吾	（有）パンセ	0888-32-2998	0888-33-4712
顧問	坂本昌三郎	（財）地場産業振興センター	0888-46-0175	0888-45-8946
事務	仲村　譲	高知県工業試験場デザイン科	0888-33-0568	0888-31-8547

1988

デザインシンポジウムと交流会

期間：昭和63年8月24日（木）～27日（土）

第1部
シンボルマーク発表会
地場産業振興センター（研修室）
高知市布師田3992　TEL46ー0175
開会：13：00
1.シンボルマーク発表及び提案
2.関係者挨拶

第2部　デザインシンポジウム

［趣旨］89デザインイヤーについて理解を深めると共に、高知のデザインの現状を見つめ、企業経営者、行政関係者、学識経験者、デザイナーの立場から新しいデザインの活動のあり方について模索しようと思います。ありきたりのデザイン論ではなく、何をすべきか？そのための、自分の立場でできることは何か？どのように協力することができるか？

13：40　基調講演　●手銭正道　東海大学教養学部長
『’89デザインイヤーと世界デザイン博覧会』

15：00　パネルディスカッション
『地域産業へのデザインの導入』

●デザイン関係　手銭正道（上記及びJIDA広報部長）
楠瀬浩二（アイランドAC代表）
泉　順一（泉事務所代表）

●行政関係　坂本昌三郎（地場産業振興センター専務理事）
キャスター●学識経験者　加藤　寛（高知大学教育学部特設美術助教授）

16：30　デザインイヤーフォーラム事務局紹介

（財）日本産業デザイン振興会関係者

16：50　挨拶及び提案　泉　順一副会長

17：00　閉会

第3部　交流展示会前夜祭……ギャラリーパン

第4部　交流展示会……同上

●内容　会員プロフィールパネル
会員ワーク紹介パネル
国内デザイン団体紹介／パネル及びポスター

1988

昭和63年度

通商産業選定グッドデザイン商品

家具インテリア部門大賞
土佐和紙の照明器具

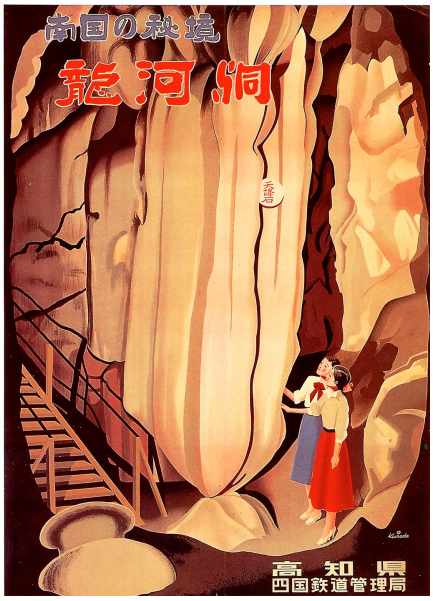
CARTAシリーズ受賞記念発表会

イメージラボテクスト・加藤俊男氏のデザインした、
土佐和紙の照明器具「カルタシリーズ」が、グットデザイン
＜Gマーク＞商品（申請商品数3.718点）うち家具・インテリア部門271点（75社）申請の
中から、部門別大賞を受賞しました。　昭和63年11月14日

「カルタシリーズ発表会」

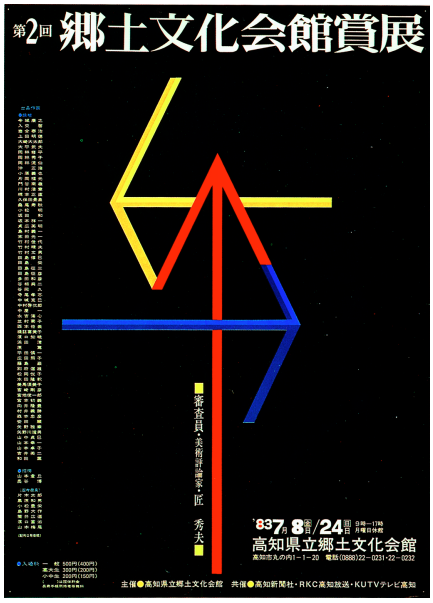
日時　11月28日（月）午後2時より
場所　ホテルサンルート高知
内容　●土佐和紙の照明器具カルタシリーズ／11種類のバリエーションを展示発表……午後1時
●受賞記念講演会
＜テーマ＞　土佐和紙のあかり／カルタシリーズ・開発コンセプト
＜講師＞　加藤俊男　イメージラボテクスト代表／日本インダストリアルデザイナー協会会員／
日本デザイン学会会員
●パネルディスカッション……午後3時より
＜テーマ＞　地域における商品開発の未来
＜コーディネーター＞　坂本昌三郎氏　ぢばさんセンター理事長／高知県産業デザイン振興協議会顧問
＜パネラー＞　加藤俊男氏　上記
益田文和氏　インデックス代表／日本インダストリアルデザイナー協会会員／
「インダストリアルデザイン」誌編集委員長／東京造形大学講師
青木　章氏　（株）山田照明／マーケッティング室長

1989 黒田矩彰作品集より抜粋



高知県観光ポスター／龍河洞

南国博覧会協賛／春のおどりポスター　1958（昭和33年）



高知県立郷土文化会館賞展ポスター　1983（昭和58年）

国鉄中村線開通10周年記念／祝賀祭ポスター　1980（昭和55年）

部落差別をなくする運動ポスター　1987（昭和52年）

高知県観光ポスター／よさこい祭り　1985（昭和60年）

1989

第4回　船上セミナー

第5回　市場鰹セミナー

体験／土佐鰹料理の知識

1989

高知県産業デザイン振興協議会

世界デザイン会議
キャラバンコングレス·イン高知

地域のアイデンティティの形成

開催日：平成元年5月26日（金）
会　場：地場産業振興センター
主　催：高知県産業デザイン振興協議会
後　援：高知県・高知新聞社・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・NHK高知放送局

2：00　開会あいさつ
2：10　1　「鰹プロジェクト」について
　　高知県産業デザイン振興協議会　　会長　楠瀬浩二
2：30　2　地域のアイデンティティ形成
　　ー失敗しない企業戦略としてのデザイン導入ー
　　（有）ジョイントデザインシステム　代表取締役　佐野邦雄
3：40　3　世界デザイン会議インフォメーション
　　世界デザイン会議運営会　事務局　成田佳隆
4：00　4　地域のアイデンティティ形成
　　ーニューカルチャーウェーブへの企業の取り組み方ー
　　アタマトテ・インターナショナル　代表　榎本了壱
5：00　閉会のあいさつ

1989

第1回　デザインジョイントトーク

第2回　デザインジョイントトーク

第3回　デザインジョイントトーク

黒潮グラフィティ1989

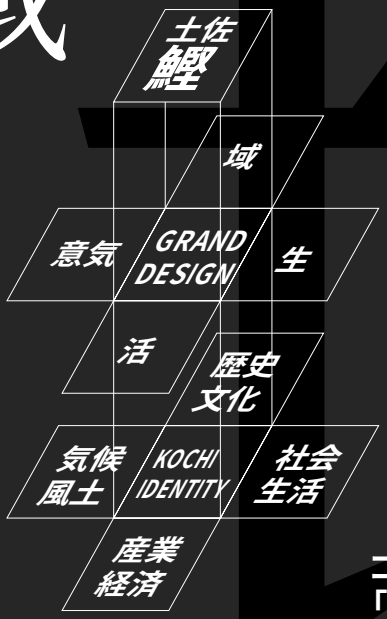
「土佐・鰹」―土州アイディンティティの形成

TOSA KATSUO PROJECT
CONCEPT-1

「土佐の鰹」
土州アイディンティティ
の形成

KEYWORD:IKI

域



コンセプト
「いき」のデザイン

ごあいさつ

高知県民にとって最も身近な存在であり、高知県のイメージ資産とも言うべき「鰹」をとおして、高知県のアイデンティティを探ろうという試み…「鰹プロジェクト」は高知県産業デザイン振興協議会の1989年度の活動テーマとして企画されました。時あたかも、1989年を〈デザインイヤー〉と位置づけ、全国各地であらゆる分野において「デザイン」をとおして生活と産業と文化のあり方を問い直そうとする運動が展開されています。その一事業として全国15地区で開催される「デザインワークショップ」があります。この事業は地域づくりにかかわるさまざまな分野へデザインを導入していきながら、個性あふれる地域を生みだしていこうとするもので、高知県では「土佐・鰹プロジェクト」も、これに参画することなりました。地元の異分野のデザイナーたち、そして産業、経済、地域住民が、ひとつひとつのテーマに取り組む初めての試みです。幸い、多くの皆さんの協力と意気の合ったチームワークで調査、研究も順調に終り、このたびその成果をデザイン、視覚化し（黒潮グラフィティ1989）として皆さんにご覧、或いは体験していただくことになりました。地域においてのデザインの可能性、地場産業を含めて、これからの高知県の可能性をかいまみることができれば成功だと思います。

高知にはまだまだ豊かな自然が残されており、よそにはない美味しい食べ物がある。黒潮打ち寄せる広大な太平洋がある。私たちにはこうした郷土高知の魅力をより多く人々に知らせたい思いがある。そして、「時代」への認識がある。地方から文化を発信する時代、デザインが新しい時代を切り拓く時代、私達が大いに活動すべき時代であることを切実に感じている。もちろん、クリエイター本来の欲求、何かオモシロイコトをしたい……時代に向かって、魅力的なメッセージを送りたい……もある。私達は郷土高知の風土を代表する魚……『鰹』をモチーフに選んだ。私達にとっては最もありふれた魚でありながら、高知のイメージ資産を今も有した「もの」であり、地域アイデンティティを再確認することにより「もの」を通して「心」を伝えようとする手段として、デザイン開発のあらゆる分野から取り組むことができ、新しい何かを創造できると考えたからである。グローバリゼーション（地球一体化）の時代は、逆に言えばそれぞれの地城のアイデンティティが問われる時代でもある。鰹プロジェクトは、鰹を通して高知のアイデンティティの再構築を試みるものであり、同時に産業おこしの道を探る試みでもある。しかし、単に産業おこしと考えるだけではなく、高知の持つ可能性の高い素材を活用し、グレードの高いデザインを提供することが課題である。

域のデザイン
高知独特の地域性の中から、高知でなければ生まれない独自の歴史や文化を創りあげてきた。土地の域（さかい）が薄れてゆく今、あらためてその地域性を資産として考える。

生のデザイン
生命、すなわち受け継がれた生（いのち）であり、地域に根ざした毎日の社会生活、あるいは現代の生き方ある。

活のデザイン
地域に生まれ、その生活文化によってもたらされた産業経済活動である。産業のソフト化傾向の中、恵まれた自然を有効活用することにより高知県全域を活性化させる起爆材が必要である。

意気のデザイン
風土気候によって形成された「心意気」である。高知県人には自由民権運動発祥の地としての自負がある。内（国内）の政治経済問題にあるときは傍観的に、またあるときは積極的に向かう内心力の意気と、眼下に広がる太平洋、すなわち外（世界）に向かう遠心力の意気がある。

黒潮グラフィティ1989

「土佐・鰹プロジェクト」—活動の概要

TOSA KATSUO PROJECT
CONCEPT-2

KEYWORD:IKI

生

主催:
高知県産業デザイン振興協議会
89デザインイヤーフォーラム
事務局・(財)日本産業デザイン振興会
共催:
パッケーション土佐 '89実行委員会
後援:
通商産業省、建設省、運輸省、外務省、
文化庁、高知県、高知市
高知商工会議所
高知・まちと人の100年101人委員会

活動の名称

デザインワークショップ—地域別デザイン研究会

土佐・鰹プロジェクト

期間:1988年9月～1989年10月

1988

9・13　鰹プロジェクト企画取り組み案の決定
10・11　既存鰹加工品検討会
10・17　第1回　特別セミナー
●意匠・商標登録の知識
田中国際特許事務所　弁理士　田中幹人

1989

1・10　第2回　特別セミナー
●鰹の特性について　高知県工業試験場　主任研究員　野村　明
1・31　第3回　特別セミナー
●デザイナーのための土佐料理の知識　高知女子大学　教授　松崎淳子
2・14　推進会議
3・14　推進会議
4・11　高知県産業デザイン振興協議会総会
5・11　推進会議
5・25　第4回　船上鰹セミナー
●体験　船上鰹料理の知識
大助丸観光株式会社　社長　伊藤大助
5・26　第5回　市場鰹セミナー
●視察　人礼及び高知市場の知識　高知市中央卸売市場　主幹　井上武夫
●体験　土佐鰹料理の知識　福屋観光高知店　料理長　橋爪楠明
5・26　キャラバンコングレス・イン高知
●テーマ:地域のアイデンティティ形成
協力:佐野邦雄(ジョイントデザインシステム)
榎本了壱(アタマトテインターナショナル)
成田佳隆(世界デザイン会議運営会)
6・13　推進会議
6・19　臨時総会
7・11　推進会議
8・8　推進会議
8・26　第1回デザインジョイントトーク
●これからのデザインマネジメント
益田文和(インダストリアルデザイナー)
林　利昭(商品価値開発プランナー)
9・6　座談会
●高知県の産業とデザイン
9・12　推進会議
9・16　第2回デザインジョイントトーク
10・3　推進会議
10・14　第3回デザインジョイントトーク

展開計画

VISUAL　DESIGN
研究成果のビジュアルデザイン

鰹の特性や市場の特性などの研究成果をパネルワークにより、デザイン提案にまとめる。

PROMOTION　DESIGN
プロモーションテザインの開発

地域アイデンティティを見直すひとつの実践的試みとして、各種広報活動を展開する。

PACKEGE　DESIGN
パッケージデザインの開発

鰹既存商品や、新製品を想定したパッケージについて、デザイン試作やパネルワークにより表現する。

SHOP　DESIGN
ショップデザインの開発

アンテナショップを目指したトータルデザインをパネルワークとシミュレーションモデル等により提案する。

EVENT　DESIGN
イベントテザインの開発

鰹が下る(初夏北上し、秋三陸沖から南下)おいしい時期に高知県内外の経済人、文化人、クリエイターを招待して交流会を企画演出する。

VIDEO　GRAPHICS
VTRの開発

黒潮グラフィティ1989のイメージビデオを企画制作し、関連活動内容についても記録する。また、高知県のプロモーションビデオとして活用する。

EDITORIAL　DESIGN
エディトリアルデザインの開発

調査、研究課程と開発成果をもとにコンセプトブック

黒潮グラフィティの概要

TOSA KATSUO PROJECT
CONCEPT-3

KEYWORD:IKI

活

土佐・鰹プロジェクト

黒潮グラフィティ1989

開催期間：1989年10月9日（月）～14日（土）

■デザインシンポジウム

鰹プロジェクトの研究成果をもとに開発されたデザインの発表を総合的に行ない「デザイン」をとおして高知県の生活・産業・文化の在り方について考えます。また、高知県外デザイナーや学識経験者を交え意見交換します。

■イベント交流会

高知県内外のゲストを招き、土佐の風景＜太平洋＞風味＜鰹＞を楽しみながら、土佐人の意気や風土の体感できるイベント開発事例のプレゼンテーションとして開催します。

■デザイン発表展示会

制作された実施計画案及びデザイン作品をパネルワークやVTR等により展示公開します。

■パッケーション土佐 '89［土佐を包む］

高知県の豊富なイメージ資産をテーマとした土佐の「もの」「こころ」を包む新しいパッケージデザイン開発を行います。あわせて、有名パッケージデザイナーの代表的作品を招聘し発表展示します。

主催：
パッケーション土佐 '89実行委員会
協賛：
高知県産業デザイン振興協議会
後援：
高知県・高知市・
（財）高知県中央地域地場産業振興センター

黒潮グラフィティ1989

「黒潮グラフィティ」発表会スケジュール

TOSA KATSUO PROJECT
CONCEPT-4

黒潮グラフィティ
1989発表会
スケジュール

KEYWORD:IKI

意気

1989年10月

9日（月）MONDAY
10日（火）TUESDAY
11日（水）WEDNESDAY
12日
13日
14日（土）SATURDAY

デザインシンポジウム

■会場
高知ぢばさんセンター
高知市布師田3992
TEL（0888）46ー0175

■時間
AM10：00～PM4：00

■参加費
無料

［第1セッション］
●土佐の鰹ビジュアルデザイン開発
●PRプロモーションデザイン開発

［第2セッション］
●プロモーションビデオ開発
●アンテナショップデザイン開発

［第3セッション］
●合評デザインシンポジウム

イベント交流会

■会場
高知市桂浜
（野外特設会場）

■時間
PM6：00～8：30

■参加費
10.000円

■参加人数
150人

■対象者
●デザイナー
●アーチスト
●文化人
●協賛企業関者
●協賛行政関係者
●協賛報道関係者
●一般参加者

（人数限定）

デザイン発表展示会

■会場
ギャラリー・パン
高知市追手筋1丁目6ー9
TEL（0888）24ー5171

■時間
AM10：00～PM6：00

■参加費
無料

■同時開催
「パッケーション土佐 ’89」展示会

●土佐の鰹商品をテーマとしたもの
●土佐の地場産品をテーマとしたもの
●土佐の自然素材をテーマにしたもの

1989

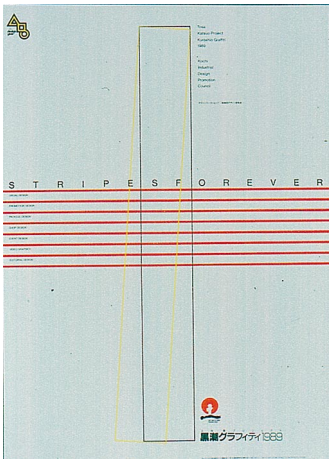
黒潮グラフィティ1989
デザインシンポジウム

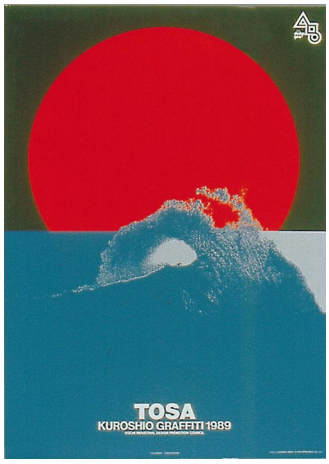
黒潮グラフィティ1989

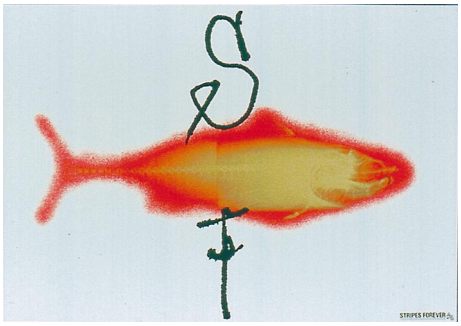
黒潮グラフィティ1989
イベント交流会

黒潮グラフィティ1989

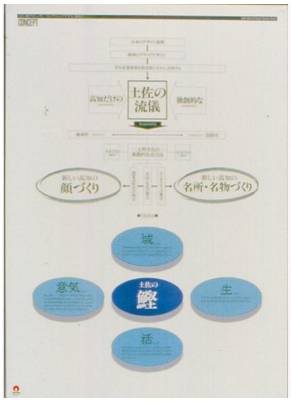
公式ポスター

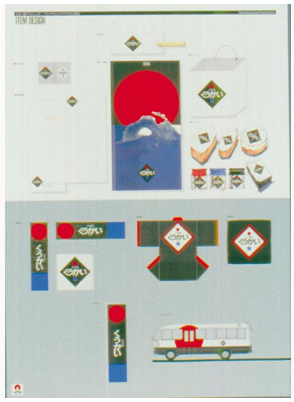






テーマポスター





アンテナショップデザイン

黒潮グラフィティ1989

デザイン発表会とパッケーション土佐 '89

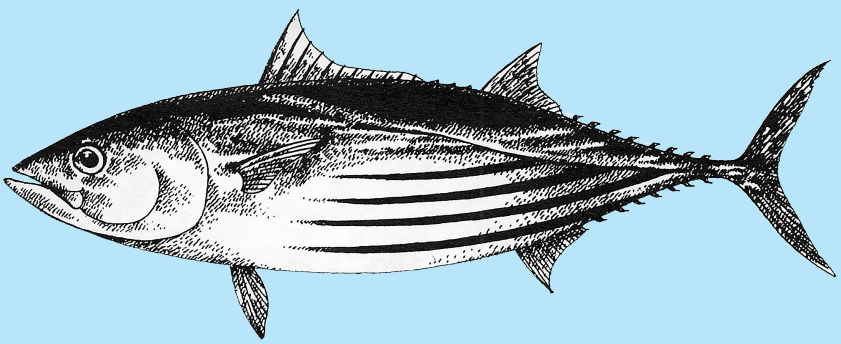
1989

Katsuology-1
鰹一家の系譜

「カツオ」―随一の美形。長旅を好む。「ハガツオ」―あだ名、キツネ、「ヒラソウダ」―ファッションセンス、まる。
「マルソウダ」―小柄なわりにグラマー。熱～温帯の海を母とする名門一族。

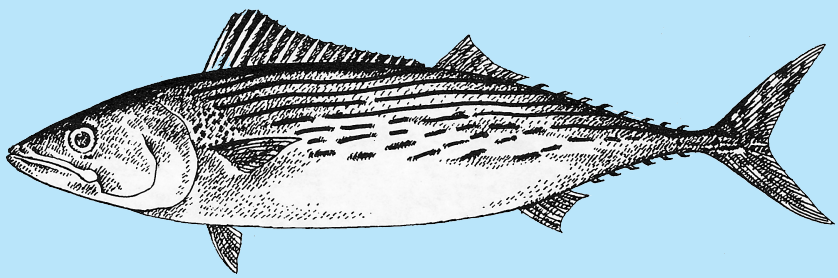
カツオ
[カツオ属] さば科
Katsuonus pelamis (Linnaeus)
(英) Skipjack tuna

日本海を除く日本近海、世界中の温・熱帯域に分布。体は紡すい形。体色は背面が暗青紫色。腹面は銀白色を帯びるが死ぬと7～10条の黒色縦帯が現れる。全長1.1m。透明度の高い黒潮流域に生息。イワシ類などの小魚を食べる。春になると大群をなして北方へ回遊をはじめる。



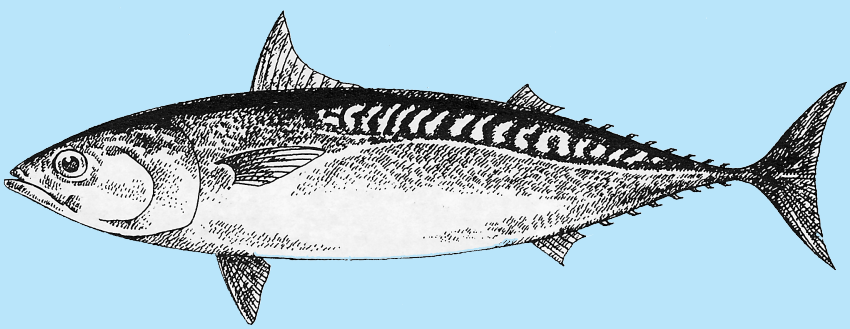
ハガツオ
[ハガツオ属] さば科
Sarda orientalis(Temminck et Schlegel)
(英) Striped bonito

南日本、太平洋、インド洋の暖海域に分布。体は紡すい形で側扁。全身を小さなうろこでおおわれる。体色は背面が青色で顕著な黒色縦帯がある。腹面は銀色。体長1m。沿岸表層に生息、時に大群を形成する。秋冬にはさしみとして美味。



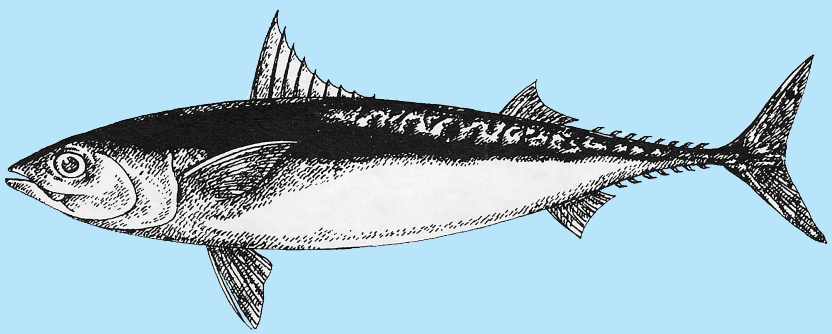
ヒラソウダ（スマ）
[ソウダガツオ属] さば科
Auxis thazard(Lacepede)
(英) Frigate mackerel

南日本、世界中の温・熱帯域に分布。体は紡すい形で太いが、多少扁側。尾柄の各側に隆起線がある。側線はさざ波状。体の背側は青緑色、下半分は銀白色。体長60cm。沿岸を大群をなして回遊する。夏に成熟、秋・冬に美味。



マルソウダ（メジカ）
[ソウダガツオ属] さば科
Auxis rochei (Risso)
(英) Round frigate mackerel

北海道以南の南日本、世界の温・熱帯域に分布する。体は長紡すい形で、ほとんど側扁しない。ヒラソウダに似るが、体の断面がほぼ円形。体色の斑紋はヒラソウダに似る。体長55cm。沿岸の表層を大群で回遊する。血合肉が多く、生食は中毒の恐れが強い。鰹節の代用品。



KATSUO ROAD

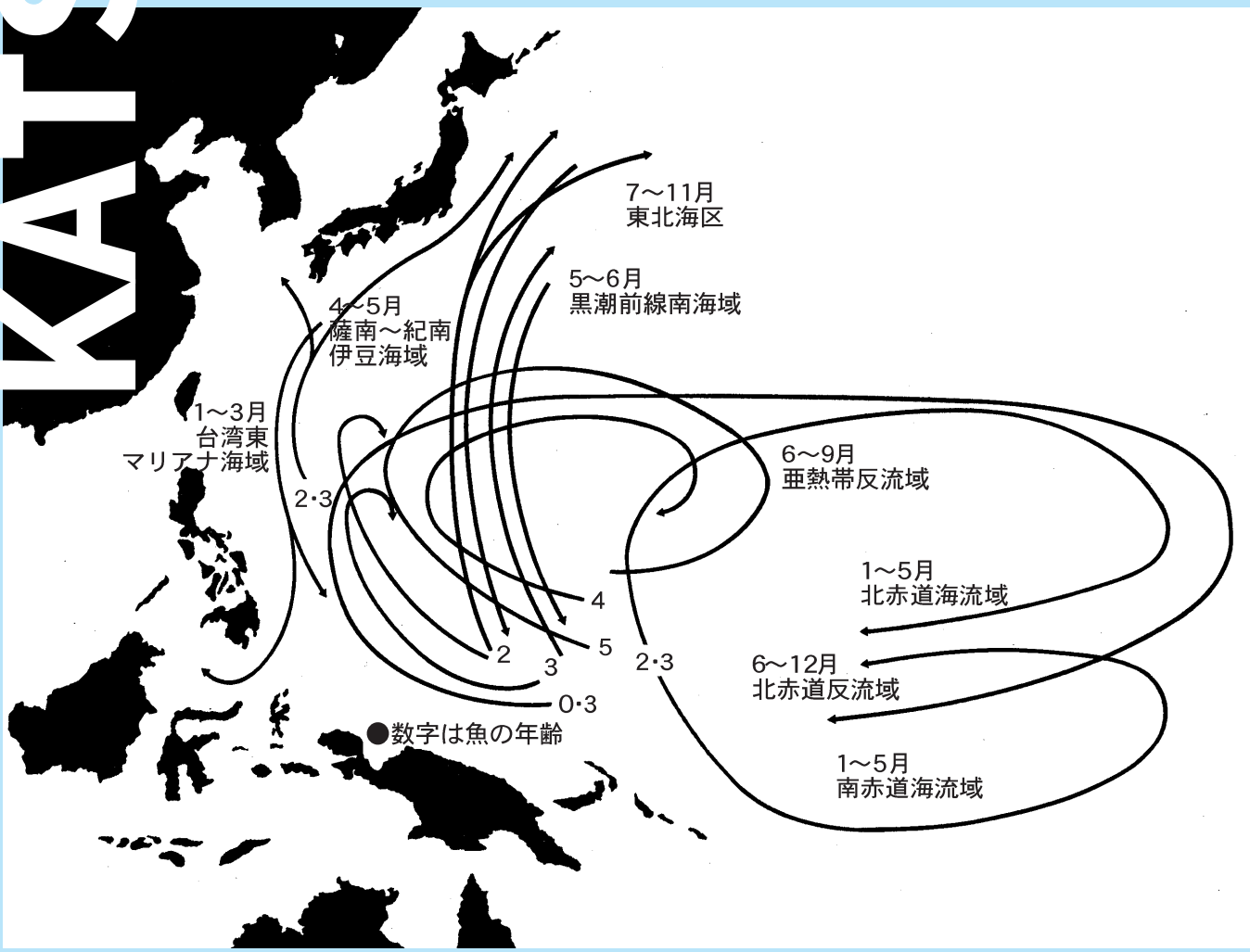
1989

Katsuology-2

鰹ロード

鰹が走る。北の海へ。、南の海へ。
ひたすら走る。
眠らずに走る。眠りながら走る。
地球が鼓動している。

早春1月頃、鰹はフィリッピン周辺の海から北に向かって旅立つ。そして2月下旬九州南方の海に姿を現わす。
一部は対島暖流に乗って九州西方へ行くが、主力は黒潮に乗り、日本の太平洋沿岸を北上する。3月下旬に四国、5～6月には伊豆や房総沖に到達する。
さらに三陸沖まで移動、10月頃南下し始める。これは「下りがつお」と呼ばれる。鰹はよく海流の表層を群をつくって泳ぐが、そのとき他の生物や、漂流物といっしょに泳ぐことがあり、それぞれ特別な名称がつけられている。例えばジンベイザメにつく群を「サメ付き群」、クジラにつくものを「クジラ付き群」、漂流材につくものを「木付き群」、鳥の群れについているものを「鳥付き群」と呼ぶ。



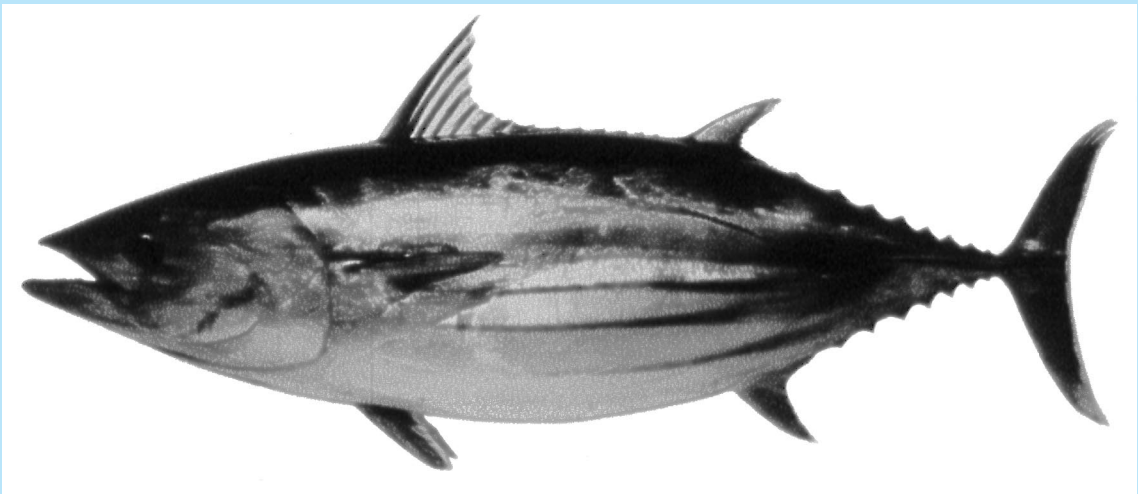
1989

Katsuology-3

泳ぐための高性能

ミケロッティーデザインのスポーツカーをしのぐ最新流線型。ブルーとメタリックシルバーの、
しゃれたツートンカラー。最高時速100キロを生み出す、
ハイパワーエンジンを標準装備。

Beautiful&Sporty



もしも、うおリンピックがあったとしたら、ゴールドメタリストは確実だろう。鰹は時速100キロという魚類中最高の遊泳力をもっている。ちなみに最新鋭の漁船をもってしても、鰹が全速で泳げばとてもかなうものではない。また、鰹は驚異的なロングヴォイジャーでもある。この優れた遊泳力を生みだす秘密は何か、そのメカニズムを解明してみよう。

鰹の背骨の周辺には、細かい血管が密集している、いわゆる血合肉が発達し、物質代謝を活発にしている。物質代謝で生成された熱は、血合部に平行に分布する細かな多数の動脈と静脈から成る、奇網と呼ばれる部分によって、水中に放出されることなく体内に保存される。このため、普通の魚と異って周囲の海水よりかなり高い体温(約30～35度位)を保持することになり、もろもろの物質代謝が早く行われ、活発な生命活動を営むことができる…というしかけになっている。そのメカニズムはかなり人間に近いと言えるだろう。もちろん流体力学の極致ともいうべき天然のスタイリングも、ものをいっている。それに疲れない筋肉構造、筋肉の使い方なども合理的である。

まさに泳ぐために生まれてきた魚といえるだろう。だが、このメカニズムゆえに鰹は生涯泳ぎ続けなければならないという運命にある。もちろん眠っている間も泳いでいる。鰹が止まったとき…それは死んだときである。

鰹は視覚・聴覚も優れている。餌の良し悪しを見分けたり、魚群探知機の水中発信音をきき分けたり、流木に当る波の水中伝播音を20キロ位離れていてもキャッチすることができるという。

かくして鰹は、全行程およそ一万キロにも及ぶ長い旅に出かけるのである。

1989

Katsuology-4

固くてごめん、堅魚節

土佐の鰹節が、日本人の味覚を磨き上げた。

黒潮の幸を蓄える鰹節。繊細優美な和の味付けを支え、味わいに奥行を広げる、日本の食卓の陰の立役者である。鰹節との出会いがなかったら、日本人の味覚はこれほどまでに磨きあげられなかったかもしれない。

黒潮に乗って回遊する鰹は、古くから日本の大平洋沿岸の各地で食されていた。高知県では四千年前に鰹が食用されていたことが、宿毛貝塚によりあきらかにされている。

しかし鰹は腐りやすく、腐敗とともに血液が凝固し、肉質が石のように堅くなる。それゆえ、一名『堅魚』。それをいかに保存して賞味するか、先人たちはどんなにか知恵をしぼったことだろう。そのため古くから保存食として鰹節が作られていた。しかし、その製法はきわめて素朴なもので、江戸末期まではどの地域においても、節に切った鰹を煮て乾かした粗節程度のものだったようだ。

当然、現在のものと比べると、鰹節独特の香りや風味も希薄で、形が崩れやすく、保存期間も短かった。

土佐は日本列島のどの陸地よりも黒潮に近いといわれている。それだけ鰹との縁も深く鰹節づくりも盛んであった。土佐産の鰹節が初めて歴史に登場するのは、九百一年に記された延喜式。これによると『鰹魚』『煮鰹魚』『堅魚煎汁』の貢献地として駿河、伊豆、紀伊などとともに土佐の名が上っている。

以来、営々と土佐では鰹節づくりが行なわれている。一八二二年に刊行された『諸国鰹節番付表』によると、紀州節、薩摩節と並んで土佐節は賞賛され、全国百二十二銘柄中、上位20銘柄を土佐節が占めた。この頃はまだ、土佐独特の技術や製法を持っていたわけではない。が、幕末の頃の土佐改良節の発明によって、土佐節は名実ともに不動のものとなった。

それは宇佐浦(現土佐市宇佐町)の播磨屋亀蔵が、紀州の漁夫から鰹節のかび付けを学んだことに始まった。かねてより、紀州と土佐の漁民は黒潮を漁場とし、鰹漁や捕鯨を行なう関係から交流があった。亀蔵は独自の工夫を加え、その子、佐之助とともに研究を重ね、遂に改良土佐節を完成させたのである。

現在作られている鰹節は大きく分けて、本節、新節、生節の三種類。

土佐改良節の本領を発揮する本節は、二ケ月余りを要して作られる。焙乾と乾燥を繰り返し特有の香りと風味を育まれた節は、形を整え、天日乾燥し、カビを付けて仕上げる。食品にとっては大敵のカビであるが、鰹の脂肪を適度に減少させ、特有の風味を増すなど、鰹節づくりには欠かせない存在なのだ。これによって鰹は、究極の鰹節に変身するのである。

黒潮の狩人たちによって伝播した食の知恵は、見事に磨かれ、花開いたのである。が、土佐人は鰹節づくりには精進したが、なぜか自分たちの食卓の料理には、鰹節が登場する機会が少ない。黒潮の狩人の子孫としての誇りが、『保存』という慨念を嫌っているのかもしれない。

1989

Katsuology-5

輝け、土佐の鰹一本釣

一本の竿己の腕を依りどころに広大な黒潮の流れに乗り出す。
鰹一本釣は、土佐人の気質そのもの。

「鰹」と言えば、殆どの人たちが、土佐、高知と答えるぐらい高知県と鰹は切っても切れないつながりがある。高知県の「看板」・「顔」といってもいいだろう。過去350年にわたって、この看板をつくり上げ、支えてきたのが、鰹一本釣の漁師たちある。帆を張り、櫓を押しながら漁を続けた和船の時代から、焼玉エンジンを積んだ機械船の時代、そしてレーダー、漁群探知器など高度な設備をほどこしたFRP船の時代へ。そして土佐湾沿岸から小笠原、三陸沖、又、遥かフィリッピン近海まで、船も変わり、舞台も大きく拡がってきた。しかし、昔から少しも変わらないものもある。それは、一本釣の漁師たちのスピリットである。土佐人は、もともと荒海に立ち向かっていく気概をもっていた。そのバックボーンとなっているのはもちろん、日々海を生活の場とする漁師たちだろう。この漁師たちの気質にもっとも合っているのが鰹の一本釣漁法である。広大な黒潮の流れに乗り出し、一本の竿、己の腕だけをよりどころに勝負をかける…広く見れば、これは、高知県の県民性を象徴しているようにも思える。

長年、一本釣に従事してきた漁師は言う。船頭のカンが的中し、大きなトロミ群(鰹が表層を密集して泳ぐため、広い海域にわたって波が立たなくなる状態になる…それほど大きな群)に遭遇したとき、そして、船が押し上げられる程に何層にも重なり、海の水が黄金色に輝くのを見たときのゾクゾクするほどの感動。その群に最初のいわしを投入し、鰹が食うか、食わないか、かたずを飲む…そのスリルに満ちた瞬間。大きな鰹を次から次へ無我夢中で釣り上げる気分。そして1回の漁で積み切れない程の鰹を釣ったあとの満足感。これらは、一度味わうと、めったなことでは忘れられないと…。

正に一本釣の漁師のみが味わい知ることができる豪快さ…であろう。

土佐では、祖父から父へ、父から息子へと代々一本釣を家業として受け継いできた家が多い。もちろん鰹を釣るためのあらゆる技術も代が替るたびに、磨かれ、受け継がれてきた。チームワークにしろ、誰よりも早く、鰹の群を見つけ、多くの鰹を釣る技術にしろ、高知県の一本釣は、今では決して他県に負けないという。

現在、鰹の一本釣の船が出ているのは、東から架領郷、宇佐、土佐久礼、土佐佐賀、土佐清水などであるが出漁する船の数は、第一次オイルショック以来激減し、全盛時の約半分、しかもなお減る傾向にある。一本釣漁全体が大きな岐路に立たされていると言っていいだろう。理由は生産コストの高騰(燃料費、餌代、設備費等)巻網漁などの影響による漁師の圧迫、それに後継者不足などが上げられる。こうした状況の中で他県では、鰹一本釣から、より安定し高収入が期待できる鮪はえなわ漁に乗り換えたり、巻網漁に転換したりするケースが多いという。だが、高知県の場合、それは希で、陸に上がるとあっさり他の職に転業してしまうと聞く。一本釣を生甲斐にしてきた漁師にとって、単調な漁はあきたらないのかも知れない。恐らく、それよりも何よりも、土佐の一本釣の漁師の誇りが、そのことを良しとしないのだろう。

昨今、幸いにして保存技術の進歩により、日本各地で土佐の鰹のたたきを賞味できるようになり、たたきのファンも増えつつある。土佐の鰹一本釣が、これから、高知県の顔としていっそう輝くことを祈りたい。

1989

Katsuology-6

狸の足に食らいつく鰹の話

視力バツグンの鰹を、いかに騙して釣り上げるか
あの手この手、秘術をつくしてカブラづくり。

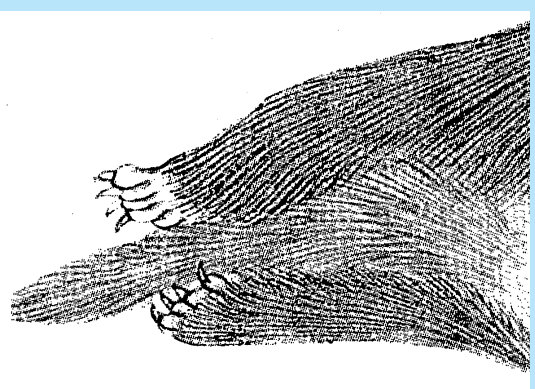
鰹を釣るのには、餌にいわしをつけて釣る餌釣と、カブラで釣る方法がある。カブラとは擬餌鉤のことで、鰹の群に出合ったとき、最初は餌釣で釣るが、餌つきがよくなってきたら、カブラ釣りに切り替える。いちいち餌をつける必要がないので、はるかに効果が高くなる。

鰹は目のいい魚である。餌釣の場合、生きた餌でないと、決して食わない。カブラの場合もいいカブラと、できの悪いカブラでは、月とスッポンの差があるという。

一本釣は、短時間の間にどれだけ沢山釣るかが勝負である。同じ船に乗っている船員の間でも、一本でも他人より多く釣ってやろうという競争心がわく。また、沢山釣る者は釣上手といわれ、早く出世するので、釣り手は争っていいカブラを作ろうとした。カブラは、主に胴と呼ばれる部分、鉤、鉤を巻く皮、鶏の毛でつくられる。中でもだいじなのは胴と皮。胴の材料として適している…とされるのは鹿、牛の角、まっこう鯨の歯、象牙、それに鶏、猫、狸の足の骨である。あわび、真珠貝など光沢のある貝殻も使われる。この中で特に優れ、生き餌よりも食いがいいというのは、猫と狸の足の骨。「猫に鰹節」と言うが、鰹が猫の足に食いつくのは、日頃の恨みだろうか。これはまだ解るとして、狸の足の方は、可笑しいというしかない。もっとも鰹は匂いで食らいつくわけでなく、海水の中につかったカブラの微妙な色を見て食らいつくのである。カブラの皮もだいじな要素になる。うまづらはげ、しいら、ぼら、さば、なまず、猫の皮などを使う。しいらとぼらの皮がベストとされる。

忙しい釣の合間に試行錯誤を重ね、つくられたカブラは、釣り手たちにとって何よりもだいじな財産である。自分が苦心して作ったカブラで、誰よりも多く鰹を釣った時の喜びはさぞ大きかったに違いない。

今では市販のカブラで優れたものが出廻り、こうした手作りのものは殆ど使われないという。

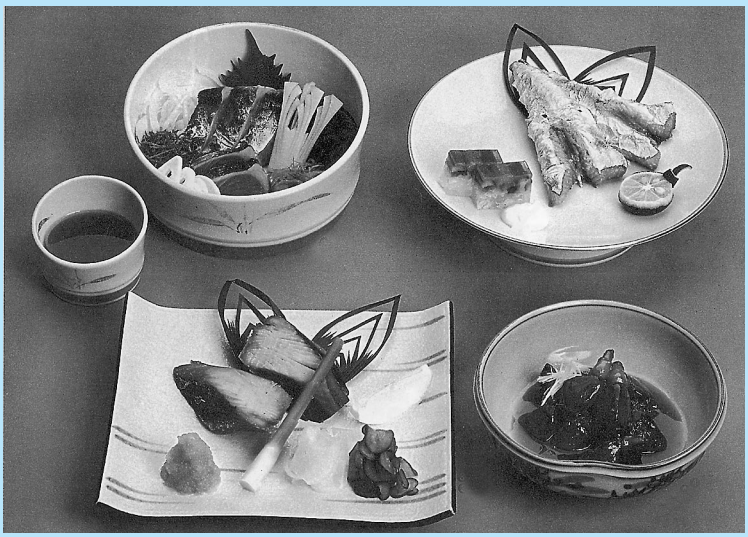


1989

Katsuology-7

鰹を食うことは、海を食うことだ

にんにく玉に噛りつき、たたきを口いっぱいに
頬張り、酒を飲み干す。
大言壮語、傍若無人、…土佐のヴィタミンは鰹です。



かっての日本の太平洋岸では、鰹はごくありふれた魚だった。ところが、この魚。鮮度が落ちるのが非常に速い。そのため、保存の知恵としての節づくりが発達し、現在に伝わる料理のほとんども船上料理をルーツとするようだ。鰹船には、カシキと呼ばれる飯炊きが乗りこむ。いわば、漁師見習いというところ。米を研いで飯を炊き、船板を裏返してまないたに見立て、釣った魚で汁をつくる。海の男たちが漁の合間に口にするだけあって、きわめて豪快、きわめて単純。

たとえば、塩だたき。鰹のたたきの原形ともいわれている料理である。

薪で燻した鰹の身をさしみ状に切り、塩を振ってたたく。醤油も塩も付けず食べるが、活きがいいので生臭みはない。鰹独特の甘みとトロリとした歯応えの絶妙さは、食べた者のみぞ知る美味なのだという。まさに、漁師冥利に尽きる至福の一瞬であろう。

沖煮もまた、料理と呼べない単純さである。頭を落とした鮮魚をぶつ切りにして、塩味で煮るだけ。鮮度が料理を無用にした。

どうして鰹がこんなに旨いのか。実は鰹には2大旨味成分のグルタミン酸とイノシシ酸が含まれており、しかもイノシシ酸においては、あらゆる食品中最大の含有量を持つ。これは高知県の気候、特に高温であることと無関係ではないだろう。高知県では、かって米作は二期作であった。必然的に重労働を強いられたことも多かったと思われる。酢や、葱、にんにくを多く食べることによって、必要なビタミン類を補い、精力を蓄える：日々の健康を保つためにうまれた生活の知恵と言える。

いずれにせよ、これは高知県の食文化の大きな特徴となっている。

土佐人の鰹食いは、徹底している。お馴染みの刺身やたたき、節をはじめ炊込飯、雑煮、マリネなどの他、骨は味噌汁や塩焼き、ちちこ(心臓)はいりつけ、わたは酒盗に、鯖のトロにあたる内臓肉は塩焼きや酢ものにして、一尾まるごと賞味する。船上料理が発達したそれは、野趣溢れるものばかり。それ故、技より鮮度で勝負する。土佐人は海の野生をひたすら食するのである。

1989

1 座談会

土佐鰹プロジェクト
黒潮グラフィティ1989開催を前に

高知県中央地域地場産業振興センター
坂本昌三郎氏

入交産業
入交太二郎氏

明神水産株式会社
明神宏幸氏

高知女子大学
松崎淳子氏

通商産業省貿易局デザイン行政室
日高一樹氏

㈱アイランドエーシー
楠瀬浩二氏

楠瀬　今日は皆さんお忙しいところ、貴重なお時間をいただきまして有難うございます。私たち、昨年の9月から、産業デザイン振興協議会の活動として、会員で「鰹プロジェクト」を提案しました。丁度デザインイヤーに向けて何かモチーフを発見したかったもので、身近でわかりやすいということで、「鰹」という、非常にストレートに発想をしたんですが。いざ、やろうとすると知らないことが沢山ありまして、逆に解らないからやった…ということもあります。

それで1年かけて色々研究し、大体アウトラインがつかめました。で、10月に発表するわけですが、それに先立って地元の各界の皆さんに、日頃お感じになっていることを、デザインを引っくるめてお話いただきたいと…又、私たちの方も、構想、活動の今後の展開についてお話したいと思い、今回お集まりいただいたわけです。どうかよろしくお願いいたします。

坂本　まず日高さんの方からデザインイヤーの主旨、狙い、それから全国の動きを見られて、高知の活動について、ワークショップ事業も含めてお話し願えますか。

日高　通常、デザインと言うのは主に産業振興、貿易振興のためのデザインという事で、代表的な例で言えば「Gマーク」…グッドデザインがありますが…。ですから今迄、工業製品のデザインを美しく…ということでみんなやってきた。ところがデザインイヤーで言っているデザインはすこし異ってきている。今迄は工場を誘致するとか、産業を興していく事が、地域を豊かにすることだと。それが原理原則で皆んな一生けんめいやってきた。ところがそれで本当に日本という国が豊かになったか…人が暮らしていて誇りを持てる郷土になってきたか…。確かに経済的には豊かになったけど、それで人の心までが豊かになったとは言えない、ゆとりをもてるようになったとは言えないだろう、でここでもう一度そういう問題について考え直してみよう…ということが基本にあります。まず、デザインイヤーの大きな目的としては、国民生活の質的な向上を計る、地域の活性化を計る、産業の高度化を計る、デザインについては国際交流の促進…ということですが、これはデザイナーというスペシャリストだけが、やっていくんじゃなくてですね、国民全体にこういう事を普及させようというのが、デザインイヤーの又、大きな、今迄とちがう方向です。その中で特に言っているのが、デザインマインドを普及しようと…。デザインを基本的に考えてみると、色いろな経済的な条件だとか、地域の条件だとか、或る時は技術的な条件とか、そこに住む人のくらしの条件があるわけで、そういうものをトータルに調整して行きながら、最後にはそれをそこにくらす人たちが、どうやって快適でよどみのない生活を送れるようになるか、そしてそれが美しくまとまっていくか…。一般の人びとの頭の中に、こういう考え方、ストーリーを、いかにしてビルトインしてもらうか…というところが、大きなポイントだと思います。

例えば建物ひとつ建てるときも、高知のまちの全体の中のひとつの建物であるということを考えて欲しい。高知に来た人がその建物を見たとき、ああ、やっぱり 高知に来たんだな…と思うような、そういう建物であって欲しいと。こういうふうな思考性が、皆さんの頭に入っていくような考え方を広めていくことが、デザインイヤーの主旨です。

デザインワークショップというのは、あくまでも地域の問題で、地域の人が自主的にテーマを設定して考える…それをひとつのプロトタイプとして、こちらから提案して各地域の中で実行していただこう…これがワークショップです。全国15カ所でやることになっていますが、高知では「鰹」という取組みで、一歩リードしていますね。

坂本　ありがとうございました。よく解りました。高知のワークショップのモチーフが、鰹ということで、非常によかったと思います。鰹は県の魚として選定されたばかりで、期せずして一致したわけです。そちらの方へ話を進めていきたいと思います。

楠瀬　あの、前に松崎先生のお話を伺ったとき、葱と鰹の出会いというのがありましたね、実に意外性があって面白かったと思います。単に、昔からの習慣として認識している事が多いので、そこに高知の風土とのかかわりが見えてくると、話として面白くなる…。私たちは今回、そういうところをなんとか目に見えるようにしたいと思っています。

坂本　松崎さん、鰹を含めて高知の料理というか食習慣ということで…。

松崎　高知の場合、生で食べるのが基本で、何でも生で勝負しますね。だから素材があって料理がない。特色といえば高知の人は自分ではそう感じていないけれど、統計をとってみると、酢を非常に沢山とっています。酢を使った料理…酢あえ、酢味噌あえ、それからすしが好きですね。宴会といえばすしをどっさりつくる。例えば鯖ずし、鯖が何本要るかで宴会の規模が決まってくるような。だから酢密相を大事にする。特に柚子ですね、東京でわさびが利いている…と言うのと同じで、柚子が利いていると言うと、ほめ言葉になります。それと葱を沢山食べますね。よそから来た人がびっくりする位。それににんにく。三つとも鰹が一役買っている感じですが、大体は風土とか…生理的なものとくっついています。

高知の自慢料理といえば魚がメインになっていますが、やっぱり中心は鰹ですね。鰹一本あったら余すことなく利用する。新しいですからね。頭からしっぽ迄、その部位でなければ…の味わいがあって、それをすごく珍重する。それが高知の人ですね。

たたきのルーツは何か…という話になりますが、漁師さんの沖料理、船上料理ですね。今釣れたばかり…というのを、食べ易い、香りが出るという事で焼いといて、塩をふって庖丁でたたく。それを指でつまんで口へ放り込む。私はこれがたたきのルーツなんだと思いました。おかに上ると、そんな鮮度がありませんから、醤油や酢をかけて食べる…つまり料理になるわけです。

鰹というのは、姿とか、習性とか、高知の大きな気性にぴったりで、これはやっぱり土佐の魚ですね。

坂本　明神さんは鰹に特に思い入れがあると思いますが。

明神　やはり、夢とか、希望とか、闘争のような感情を持っています。小さい時から一本釣の漁にたずさわる親の姿をずーっと見て来ましたし、私自身も20年間、現場にかかわってきました。私を含めて皆んな鰹に対する執念というか…大きなものがあると思います。高知県の漁業という点から見ると、鮪（まぐろ）はえなわ漁の方が3倍以上のスケールがあるのですが、イメージで土佐と結びつくのは、やはり鰹ですね。漁が土佐湾とか、まのあたりで見られますし、漁法が、気質に合っているみたいですね。鮪の場合、持続する意志が必要ですが、鰹は一発勝負というか…。

坂本　経済的に見れば鮪の方が大きい意味を持っているけども、親しさ、生活感情で言えば、だんぜん鰹に軍配があがるということですね。

1989

2

座談会

土佐鰹プロジェクト
黒潮グラフィティ1989開催を前に

入交　明神さんが受け継いでこられた…これも土佐の心意気だと思うんですが、今、全国へ鰹のたたきを送っておられて、とても人気がありますね。最終的には鰹の旨さだと思いますが、例えば注文を受けたときにお客さんが食べる日に合わせて送りますというやり方、どのようにしておいしく食べてもらうか、という工夫というか気配りがあって、お客さんはおいしい鰹と同時に心意気を受けとる…これはやはりひとつのデザインだと思います。皆さんに高知へ来て下さいと言う時、地元のデザインをどうするか。「国民体暇県高知」がありますね。中味が何だか非常に解りにくいんですが、私はこの鰹の話でひとつ何かを得たように思います。

日高　よその話ですが、こういう事をやる時になかなか話が進まない処があるんですよ。住んでいるその土地の事がそんなに好きじゃないというんですね。今日お話を伺ってみると、鰹という事なら皆んな、俺に言わせりゃ一言あるぞ…（笑）という、皆んな高知という処が好きで、びんびん心意気が伝わって来ます。こういう処は皆んなの意識がパッと集まるんですね。依りどころが有るわけですから何かイベントをやる時、力が出て来ます。

入交　今年は高知市が市制100周年ということで、色いろな記念のイベントが行われているんですが、これは最終的には浦戸湾をきれいにしたい、そして素晴しいまちを次の時代に残そうということなんですが、色いろいろな方法でキャンペーンをやっても、今ひとつ浸透しないという感じがしています。
何故そうしなくてはいけないかという点で理解されていないというか、今そのところを反省しているんですが、何かまちが自分たちの財産だという意識が薄れているんですね。皆んなの街であるという自覚をもっと持たないといけないし、仮に心の中でそう思っても行動となって現れないと、何にもならないと思います。そういう意味で、デザインで街並をどうしようということでなくて、これからその中で生活する皆んながデザイナーでなくてはいけないという気がします。

日高　まち全体というか、市民全員がデザイナーだと。職能としてのデザイナーと、住んでいる人の心持ちがデザイナーである…と今はこの両方が必要な時代だと思います。

楠瀬　デザインは全体が見えてこないと難しいんですね。高知らしさとか、心意気というのは言葉で解りますが、デザインは実体を伴わないと浮んでこない。じゃあ実体を伴っているのは何か、という時に鰹が出て来た。鰹は逸法に至る迄の夢とか、ロマンとか、実感として解り易い。だからモチーフとして選んだわけです。

入交　解り易いというのは大変大事だと思います。高知へお客さんが来られたときに、地場のこういうものがおいしいよ…という情報がなかなか得難いという実情があります。そんな時に情報が引っぱり出し易いということは大事だと…これも地場産業を伸ばすひとつの方法だと思うんですが、例えば空港のような所に情報センターみたいなものを置き、お客さんが見たら一目瞭然というような、システムが欲しいと思います。

楠瀬　今度発表するアンテナショップの構想の部分で、ちょっと概略をご説明しておきたいと思います。今回鰹をモチーフにしたのは、こちら側が比較的やり易いということがありまして、物語りがあって共感が得られる、一本釣という現実の産業というものが在るから具現化し易い。それに鰹を選んだ発端というのは単純なんです。高知へお客さんが来ると、まず食べる事がありますね。それじゃあたたきを…とご案内しようと思っても、あてが無い。家庭料理の技術も無いし、料亭料理のたたきはありますが、話に聞く鰹、名高い鰹、うんちくを傾けられるような処というのが見当らない。食べられる場所が残らなければ、有名なだけで伝説になってしまいます。
たたきだけじゃなくって、入交さんの言われた地場産品を集めた所というのも作りたいと思います。全部をカバーするというのではありませんが、酒盗とか、鰹節、それから、いわゆる土佐のGマーク的なものが大体ここで買えるような…。

坂本　質が高くて面白いお話を聞かせていただきました。この辺でまとめをひと言づつお願いしたいんですが。

入交　高知には、まだまだよそには無い物、価値の高い物、新鮮な、色いろな物がありますね。いなかだとか、生産性が低いとか、そう事を気にしないで、地元のすべての人が、それぞれそういう物を見出し、考えていく機会にできたら嬉しいな、と思います。

松崎　お話を伺っていて、これは価値の見直しをしなくては、と思います。価値はどこに有るかというと、人間らしさだと思うんですね。いつも原点を問い直すということも…。そうすると、高知には又、色んな価値が出てくると思います、それを創って行かなければ…と思います。

明神　私のところは、おいしい鰹を年中安定供給できる体制をつくってます。国民休暇県高知と言いますが、遠くからわざわざお客さんが来られても、フォローできる体制ができてないと…いくら心だけ込めても、食物の怨みは恐しいですからね（笑）

日高　高知には本当に大きな資産があると思います。イメージというのは、ものすごく莫大な費用をかけても、なかなか拡がらないのが実情です。高知の鰹、今、これを起爆剤にして、どれだけ展開できるかにかかっていると思います。デザインというのは継続していく事が重要です。継続は力である…だからこれをきっかけにして、どんどん大きく展開していって欲しい。もうひとつは、これは観光客のものであってはいけないと思います。地元の人、住んでいる人が、いちばんやって良かった、気持が良くなったなあ…と感じることがキーポイントで、そんな評価が得られた時に、外から来た人が、いいまちだなあと思う。だから観光客のための開発は、やめていただきたい。そうしないと方向性を見あやまってしまいます。それが今迄の、こういうもののやり方と根本的に違うところです。

坂本　もっと沢山の人に聞いてもらいたかった内容だと思います。私たちも協議会の活動の成果に期待しているわけで、高知の中へ大きな一石を投じることになれば、素晴らしいと思います。
皆さんどうも有難うございました。

1989

KAMA KURA

REPORTAGE IN

横山流たたきパーティー

飲む、しゃべる、笑う、たたきをほうばる…
よさこい節の大合唱が始まる……
今はもう珍しい土佐の「お客」が、ここに生きていた。

鰹を焙る横山隆一さん

JR鎌倉駅から程近いところにある横山邸。広い庭に大小様々な樹が枝を拡げている。そのせいか、塀ひとつへだてた道路を、ひんぱんに通り過ぎる車の音も殆んど聞えてこない。柔らかな秋の日ざしが木洩れ陽になって、地面で揺れている。今日は、鎌倉市が行うイベントがあって、隆一先生をはじめ、それに参加される東京からの漫画家たち、先生のご友人、市役所のスタッフの方々が、打ちあげを兼ねてここでタタキパーティーを…ということらしくすでに数名の方々がビールや水割りのコップを片手に思い思いの席に陣取っている。人数がほぼ出揃った頃に、家紋入りのはっぴに酒屋の口ゴ入りの前掛といういでたちの隆一先生が登場。長年使い込まれ、鰹の油と灰で黒くなった…という感じのフォークに、おろしたばかりの鰹を乗せる。

アシスト役はご子息の隆二さん。これ又年代もののドラム缶にわらをくべ、火を点けると、たちまち赤い炎が立ち上る。すかさず隆一先生が鰹を火にかざす。鰹を見つめる先生の表情に、ふと、漫画のフクチャンのイメージがだぶる。

1989

満場かたず？をのんでいるうちに焼き上り、大拍手。あとは、われこそは名人…とばかり、入れ変り立ち変り焼き手が登場する。そのたびに野次、拍手、笑い声のタタキ・オン・ステージ。ここで今や日本中に鳴り響く「横山さんちのタタキパーティー」のなれそめなどについてふれておこう。

横山隆一先生の名は先刻ご承知、漫画「フクチャン」で全国に知れ亘っている。自ら「オトギプロ」を主宰し、日本漫画界の重鎮であり、「漫画集団」の大将である。それに画家としても大活躍、各地で油絵などの個展を開かれている。というわけで、先生の交友地図はとても広い。フクチャン時代のファンから始まって、各界多士済々。だからここ鎌倉のご自宅にも、年中沢山のお客様が訪れる。

もとより隆一先生は高知県のご出身、子供の頃に、鏡川で魚とりに夢中になったことを、今でも思い出すそう。タタキがパーティーのメイン料理になったのは、先生のご母堂が隆一夫人に土佐流のつくり方を伝授されたのと、「鎌倉に引っ越してきて、幸い庭が広いし、皆さんには珍らしがられるし、なによりも多数のお客様のおもてなしにも手間がいらないし、家庭料理だから行儀作法なんていらないから」（夫人談）だそう。こうして始まったタタキパーティーは、もう30年も続いているという。

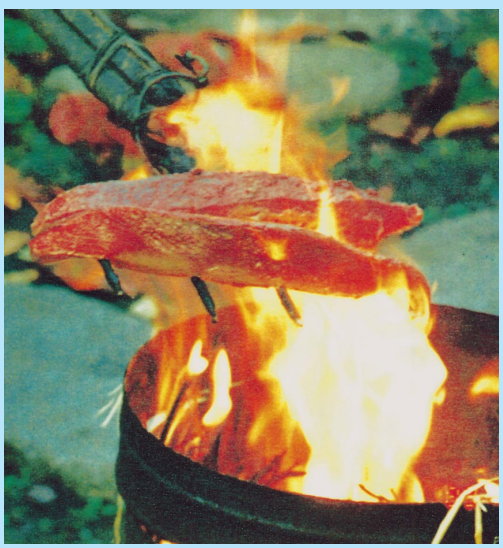
毎年恒例になっている「漫画集団」の総会が100人ぐらい、そしてこれも年中行事の「ベレーの会」、これは銀座にある先生の行きつけのバーのママさんが主催するもので、多いときは120人ぐらい集まる。それに澄夫人の友人たちの会、このほか今日のような小規模なものをあわせると、年間かなりの回数になるそう。

さて先程焼き上ったタタキに話を戻そう。今日の料理長は澄夫人が務める。（多人数のときは高知の名人＝しんせきの方が助っ人にかけつける）

夫人に横山家のタタキのレシピについて伺う。

まずタタキを焼くとき、根っ子から引き抜いて乾燥させたしそを、わらと一緒に燃やす。こうすると生臭さが消え、しその香りがしみる。焼き上ったタタキは冷まさずに俎の上にのせ、多めの塩をたたき込む。たべやすい厚さに切り、葱、胡瓜、しその葉を刻んだものと一緒に大皿に盛る。その上から柚の酢と

横山流たたきの出来上がり



脂の乗った下り鰹を焙る

1989

横山隆一さんのお得意のたたき談議

食酢をまぜ合わせたのをたっぷりかけてなじませる。あとはにんにくを添えるだけ。季節によって庭にあるもの…みょうがや、あさつきを使うこともある。

「特に変ったつくり方ではないけれど、色々やってみて、8年位前からやっと今のやり方に落ち着いたんです」。「毎年々、回数が多いでしょ。もう作るのも飽きちゃうんですよ。でもネ。皆さんに横山さんとこのタタキを食べるのが毎年楽しみだって言われるもんだから、やめられないのよネ」と、タタキパーティーを支える陰の仕事人。簡単だと言っても、ご苦労もさぞ多いことだろうと思う。

四角い皿鉢に盛られたタタキは、幾皿出してもたちまち売り切れる。

横山邸のまんが集団春の例会に150人分のたたきが用意される。

1989

「僕はホスト役で忙しいから、たべられない。翌日になって、残ったのをたべられればいい方で、近頃はお客さんも残してくれないんだ」。

「昔、五台山に宣教師がおってね、肉が無いもんだから鰹をステーキのかわりにして、焼いてくったんだ。そのステーキの名前がね、タータルっていうんだけれど、それがタタキのはじまりという説もあるよ」。

「銀座にね、タタキを出す料理屋があって、或る日、海軍の偉い手の長野閣下という人がタタキをくいにきたんだ。主人が慌ててね、塩と間違えて砂糖でタタキを作った。でも閣下は、今日のタタキは格別にうまかった…と言って帰ったんだって。それからその店では、砂糖をかくし味に使うようになったらしいよ」。

「昭和天皇の待従長のね、入江さんもうちへタタキをたべに来たよ…」

アルコールの入ったフクチャン先生の顔が、にこにこと一層丸くなる。

そういえば夕方、アトリエのむこうに登りかけていた月が、もう中天にかかっている。パーティーは、今たけなわ。

それにしても、こんな素晴しいパーティーがもう30年も続けられているとは…。確かにタタキは、今迄食べたどこのタタキよりもおいしい…でも…。横山流タタキパーティーの極意について、思いを巡らせる。思い到るのはやっぱり、フクチャン先生の「にこにこ」と、澄夫人をはじめ、ご家族の優しい心遣いと、そして、それを心から大事に受け取っているたくさんの人たちが居る…ということなのである。

澄夫人

1990

デザイン推進センター　　産業・文化インターフェイス構想

●デザイン推進センター産業・文化インターフェイス構想の背景

1-1　はじめに

県郡中央地域は、県内の人口・産業が集中していることから、ある意味では全国の縮図版的構造状態であるともいえる。

1-2　今日におけるデザインの概念とグランドデザイン

時代は常に変化している。1989年を来たるべき90年代への考察の時ととらえ、通商産業産省が提唱した
「 '89デザインイヤー」のキャッチフレーズは「時代をデザインする時代へ」であった。

1-3　人材交流拠点の整備と人材問題

昭和61年3月の三菱総合研究所による「ハイテク産業拠点開発構想」など、これまでの産業振興構想においては、
高知空港周辺への臨空港型物流拠点の整備による軽薄短小のハイテク企業誘致型に比重が置かれていた。

1-4　県都中央地域におけるデザイン関連産業の集積の可能性と意義

1987年12月に結成された県内異業種デザイナーの任意団体である「高知県産業デザイン振興協議会」は、結成2年に
して「デザインシンポジウム」や「鰹プロジェクト」において地域の独自性の発揮と県外デザイナーとのネットワーク、広報
活動の卓越性において、また個人デザイナーの力量等の本来まとまりにくいとされる総合デザイン力の浸透性において脚光を浴びるところとなった。

●デザイン推進センターDAIN計画の理念

2-1　グランドデザインの概念

「デザインにはベストはありえず、ベターの連続に過ぎない」という言葉には、デザインに対する相対的価値基準の変化とその宿命が端的に表現されている。

2-2　デザイン推進センターDAINの概念

地域振興プロジェクトにおいては、どのような地域を形成していくのかと言う明確な目標がなければグランドデザインは成り立たない。

●デザイン推進センターDAIN組織構成

3-0　デザイン推進機能に対応する組織構成

ヴィジョンを持ったグランドデザインの視点から総合的地域振興策を推し進めていくためには、「デザイン推進センターDAIN」
として、以下の総合的産業機能を発揮しうる組織構成が必要と考える。
1）デザイン・シンクタンク
2）デザイン・コミュニティ
3）デザイン・ヴィレッジ
4）デザイン・ファクトリー
5）デザイン・ネットワーク

3-1　デザイン・シンクタンク

デザイン推進センターDAINの中枢機関として、デザイン・ビジネスの調査・研究・情報拠点であるとともに、関係事業・機関の
調査機能を有し、全体の運営・管理機能を集約しなければならない。そのために、リサーチ・コアとワークショップ・コアの2部門より構成する。

3-2　デザイン・コミュニティ

プライベート・オフィスの集合によりデザイン企業団地を組織する。

3-3　デザイン・ヴィレッジ

デザイン・クラフトマンやアーチストなど、個人的なデザイナーの集まりにより構成される。

3-4　デザイン・ファクトリー

デザインのフィニッシュワークに必要な協力企業（法人）により組織され、デザイン関連企業団地を組織する。

3-5デザイン・ネットワーク

パブリック・オフィスの性格を持ち、通常は名称のみの存在である。

黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

ごあいさつ

高知県に住む私達にとって、めぐまれた風土や、毎日の生活を見直し、新しい経済価値や地域に根差した文化を創り出すために、あらためて高知のアイデンティティを探ろうとする試み…の第2回として『黒潮グラフィティ1991』を高知県産業デザイン振興協議会の活動テーマとして企画しました。

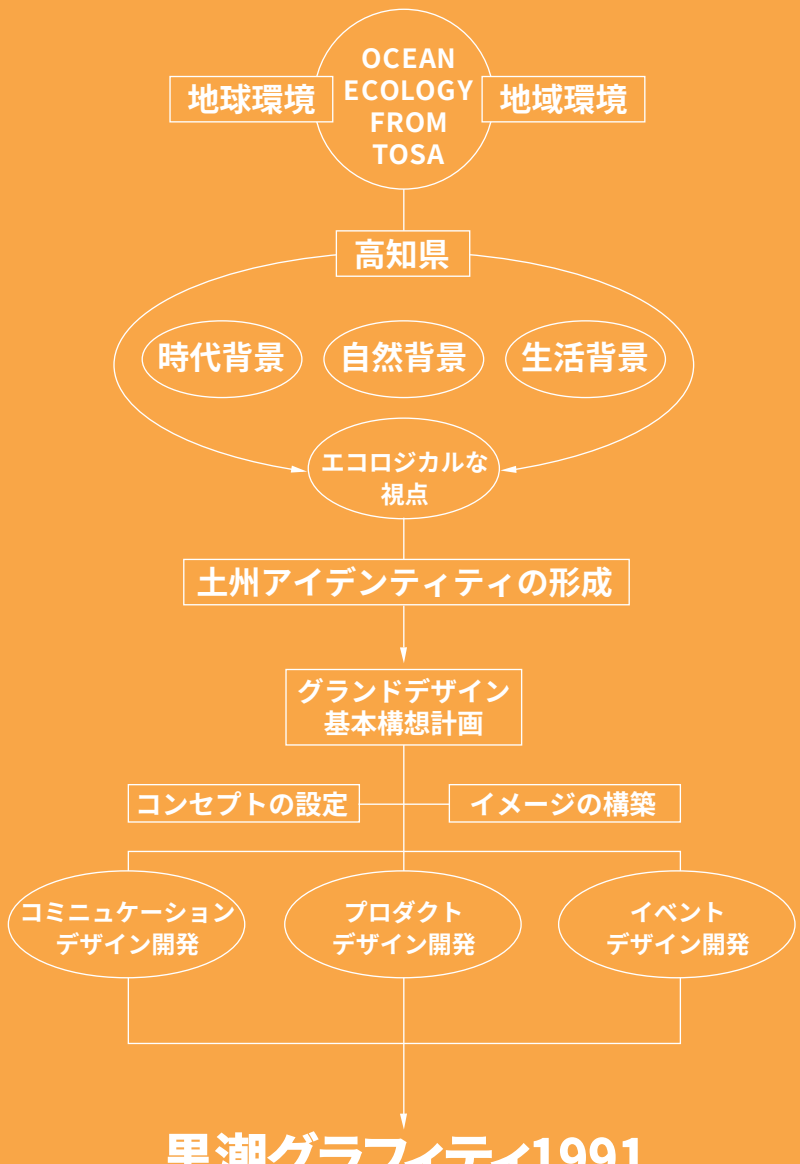
1989年のデザインイヤーにおいては、『黒潮グラフィティ1989（土佐・鰹プロジェクト）』を実施し、異分野のデザイナーによる地域イメージ資産の活用による総合デザイン開発の試みとして高く評価されました。
そこで、昨年9月より新活動テーマの準備をすすめ、高知からエコロジカルな視点にたって地域環境や地球環境を考えてみようとするデザイン関発を『黒潮グラフィティ1991』として発表提案しようと考えました。
さらに本年4月より、この活動は21世紀に向けて創造性豊かな地域づくりをデザインを通して研究していこうとする’91デザインコミュニティ事業（日本産業デザイン振興会主催）の一つとしても正式に位置付けられ、全国4地域と連携をとりながら研究開発内容を深めていきます。
私達が驚き、楽しむための生活とはどんなものなのか。また、それをささえる産業や文化や自然はどうあるべきなのか。今できること、やらなければならないことを高知のデザイナーと共に考え、体験し、多くの人達にメッセージとして伝えられれば幸いです。新しいデザインの役割を求める皆さんのご理解ご批判と、より一層のご支援ご協力を希望します。

基本テーマ

「高知県」と呼ばず「土佐」と呼ぶ表現に愛着を持っている人達が全国的にも多いのではないでしょうか。すでに地図上の表記から消えているにもかかわらず、芒洋とした海や自由奔放な土佐人のイメージがしっかりと残っているらしい。また、古くから四国山脈によって中央と遮られた辺境性が幸いしてか、土佐人は中央指向ではなく独立独歩、外洋性指向であるとも思われているようである。
私たちにはこうした形なき心象的な郷土高知の魅力をより多くの人々に知らせたい思いがある。また、高知に住んでいなければ解らないような大きな時代の流れや、豊かと思われがちな自然のささやかな真実の声を伝えなければならないと思う。知識として理解するだけでなく、感覚として体感したことを、クリエーター本来の欲求として…私達の表現手段でメッセージを送りたい…こころある人達とともに共感したい…と切実に望んでいる。
『黒潮グラフィティ1989』においては、高知のイメージ資産とも言うべき鰹という「もの」を通して地域アイデンティティを再確認し、「もの」を通して土佐の「こころ」を伝えようとする手段としてデザイン開発に取り組んだ。
しかし、今や「もの」で満たされなくなった人々は夢や感動といった無形の精神的価値を求め始めている。『黒潮グラフィティ1991』においては、高知県の形なき「イメージ」の資源を探求するとともに、その無形の価値創造をデザインというフィルターを通して有形の価値に変換し、高知のアイデンティティの再構築を試みるものである。

黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

土州アイデンティティの形成



黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

●主催　高知県産業デザイン振興協議会・［ホエルコ］高知県ホエールウォッチングネットワーク協講会
●後援（財）日本産業デザイン振興会・高知県・高知市・高知新聞社・RKC高知放送
KUTVテレビ高知・NHK高知放送局

土州アイデンティティの形成
発表会のスケジュール

イベント交流会
黒潮体感イベントとして、土佐湾沖において90人規模のホエールウォッチングを開催します。一般参加者を交えて、太平洋とそこに棲息する鯨を通して感動を共有し、自然生態系を視察する機会にしたいと思います。
また、高知における県外参加者（客人）向けイベント開発の一事例として、一過性に留まらない事業化の方向を探る参加者全員の意見交換の場とします。

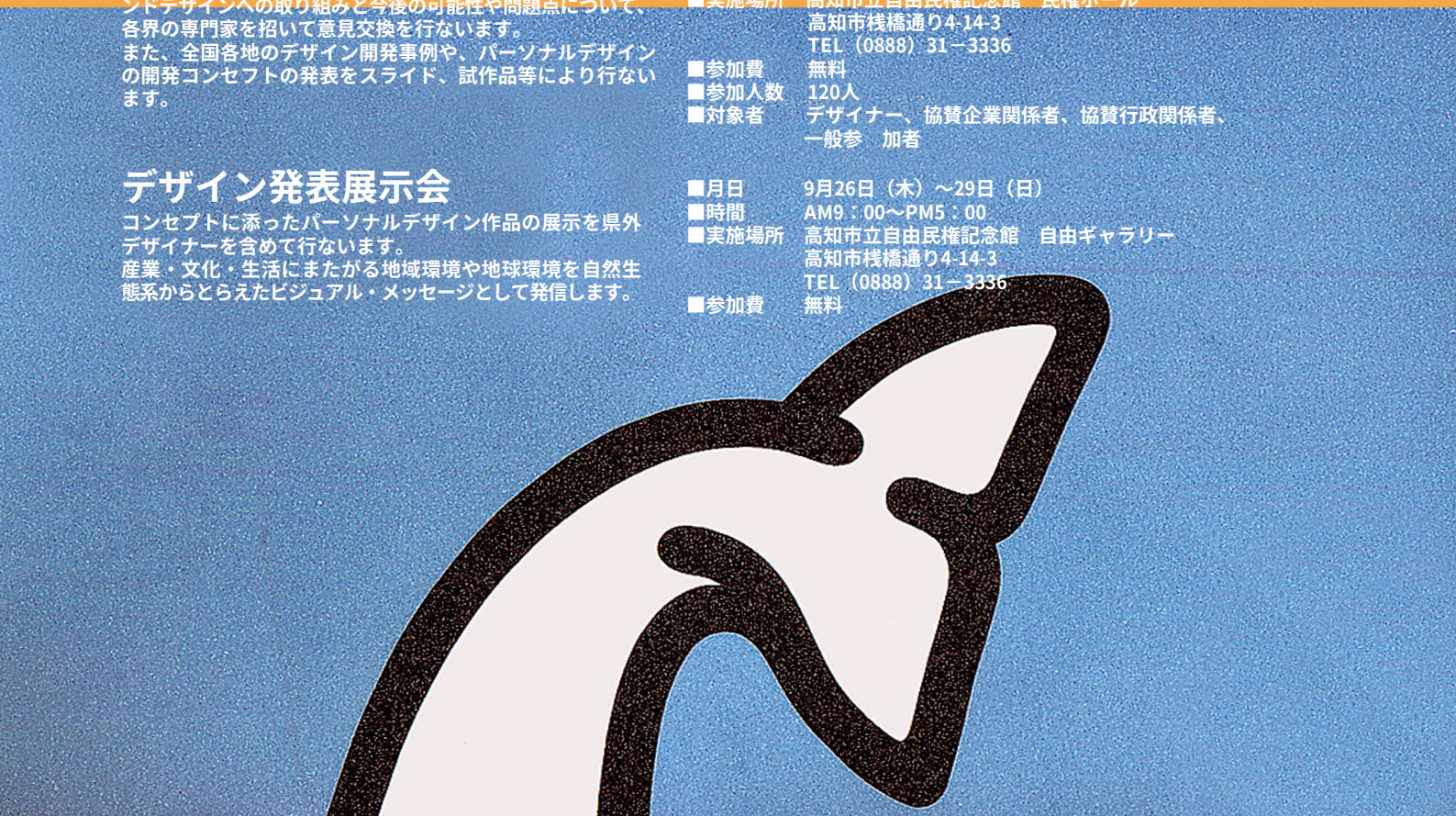
■内容　室戸・ホエールウォツチング
■月日　8月4日（日）
■時間　AM7：00〜PM5：00
（出港AM9：00）
■実施場所　室戸市沖合
■参加費　10，000円
■参加人数　90人（報道関係者含む）
■対象者　デザイナー、アーチスト、文化人、協賛行政関係者、ホエルコ会員、捕鯨OB、一般参加者、協賛報道関係者

デザインシンポジウム
オーシャン・エコロジーの視点から、地域振興を果たすグランドデザインへの取り組みと今後の可能性や問題点について、各界の専門家を招いて意見交換を行ないます。
また、全国各地のデザイン開発事例や、パーソナルデザインの開発コンセプトの発表をスライド、試作品等により行ないます。

■月日　9月26日（木）
■時間　PM1：30〜4：30
■実施場所　高知市立自由民権記念館　民権ホール
高知市桟橋通り4-14-3
TEL（0888）31−3336
■参加費　無料
■参加人数　120人
■対象者　デザイナー、協賛企業関係者、協賛行政関係者、一般参　加者

デザイン発表展示会
コンセプトに添ったパーソナルデザイン作品の展示を県外デザイナーを含めて行ないます。
産業・文化・生活にまたがる地域環境や地球環境を自然生態系からとらえたビジュアル・メッセージとして発信します。

■月日　9月26日（木）〜29日（日）
■時間　AM9：00〜PM5：00
■実施場所　高知市立自由民権記念館　自由ギャラリー
高知市桟橋通り4-14-3
TEL（0888）31−3336
■参加費　無料



黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

Puzzle Whales

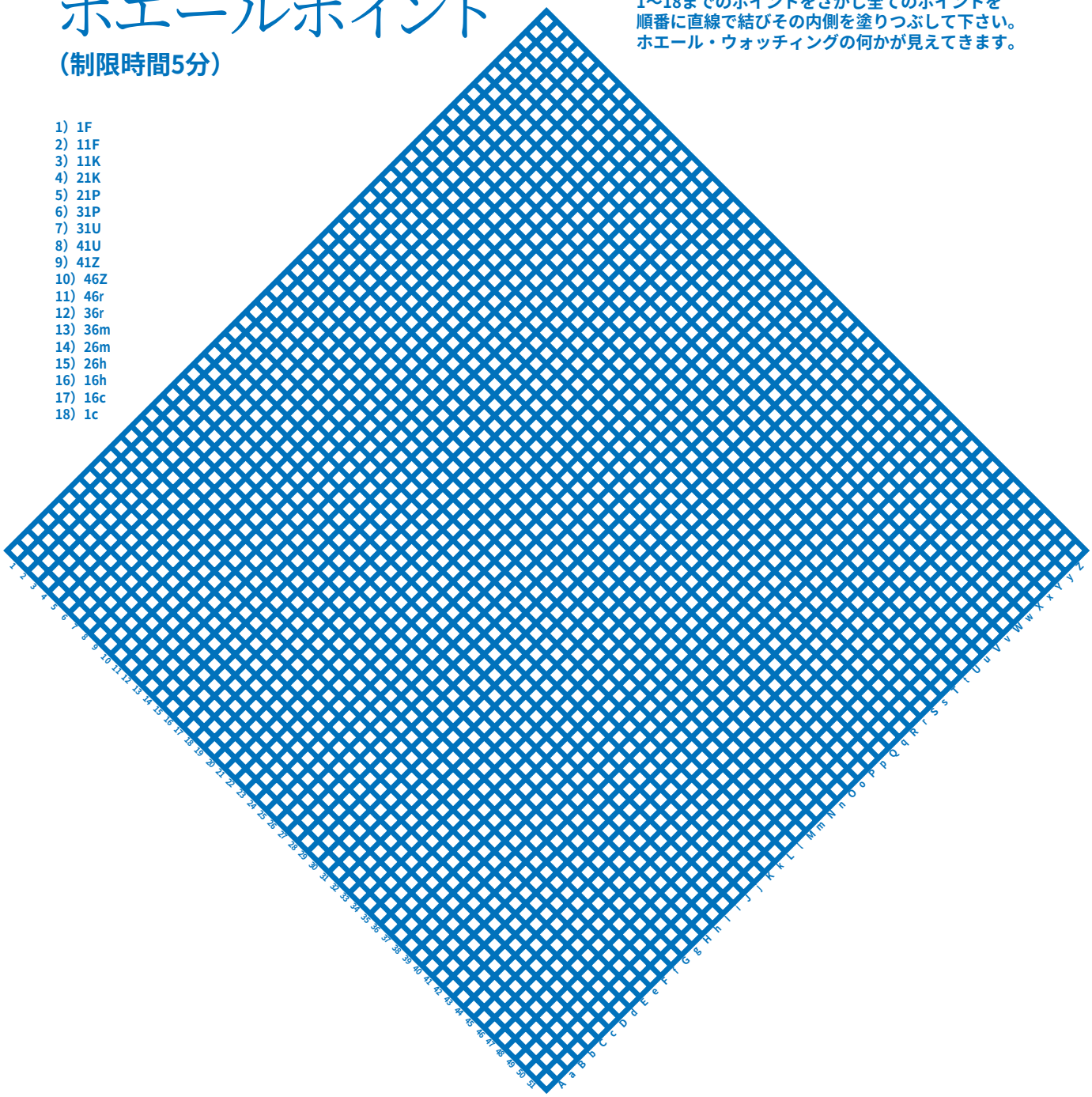
環境へのビジュアルメッセージ

ホエールポイント

（制限時間5分）

1〜18までのポイントをさがし全てのポイントを
順番に直線で結びその内側を塗りつぶして下さい。
ホエール・ウォッチィングの何かが見えてきます。

1）1F
2）11F
3）11K
4）21K
5）21P
6）31P
7）31U
8）41U
9）41Z
10）46Z
11）46r
12）36r
13）36m
14）26m
15）26h
16）16h
17）16c
18）1c



＜解答＞ WHALCO ご存知ホエルコのマークです。最後まで、根気よく作業したあなたは、ホエール・ウォッチャーとして優れた性格の持ち主です。

黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

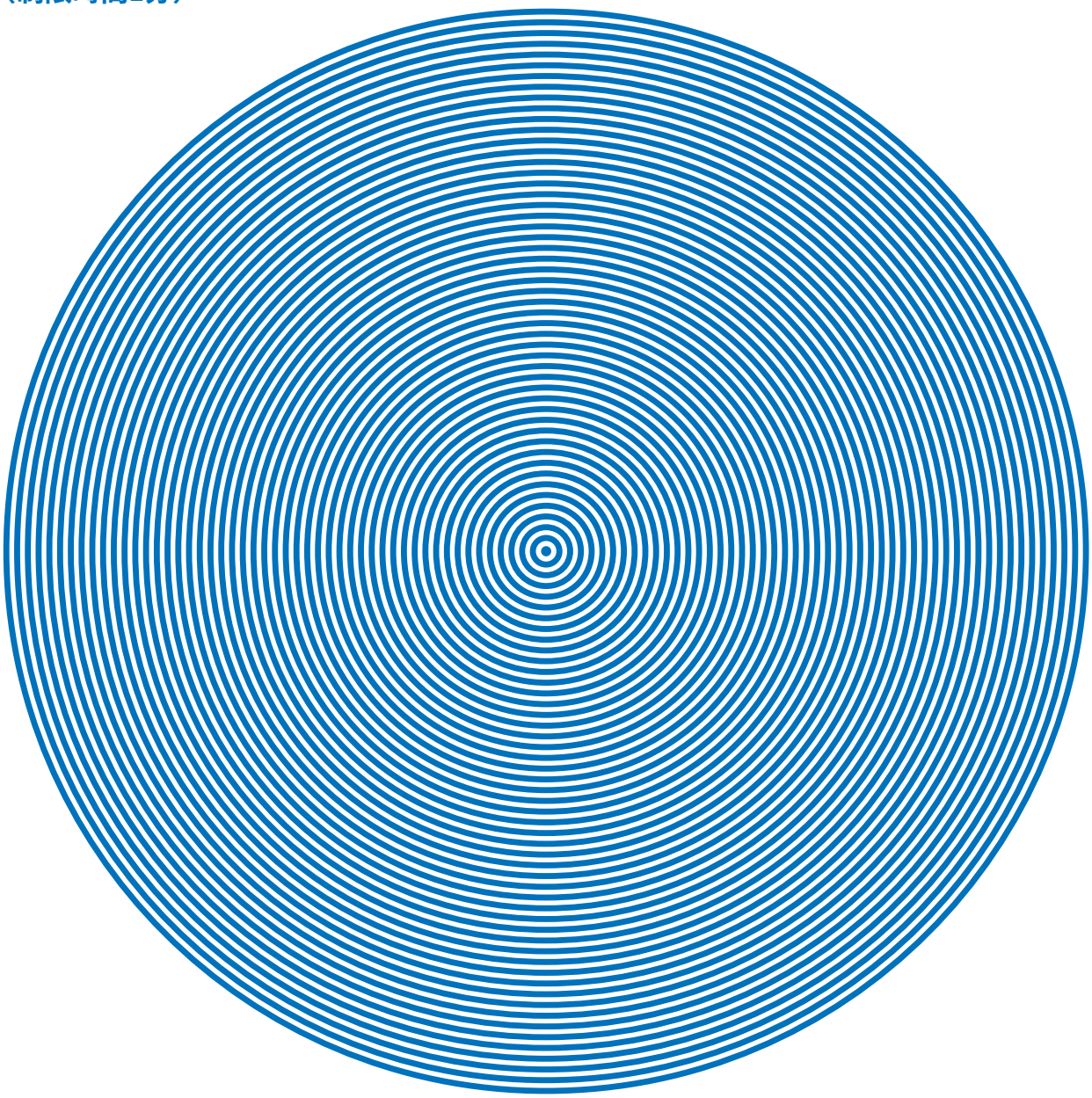
Puzzle Whales

環境へのビジュアルメッセージ

迷宮リング

（制限時間1分）

リングの数は何本でしょう？ただし中心の点は数えません。
早く数え終わった人は、目を左右にゆらして見て下さい。
船酔い克服のトレーニングになるかもしれません。



＜解答＞　100本です。50本と答えたあなたの努力は認めますが、白いリングを数えなかったのは、波間に吹き上げる白いブローを見逃したのと同じことです。

黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

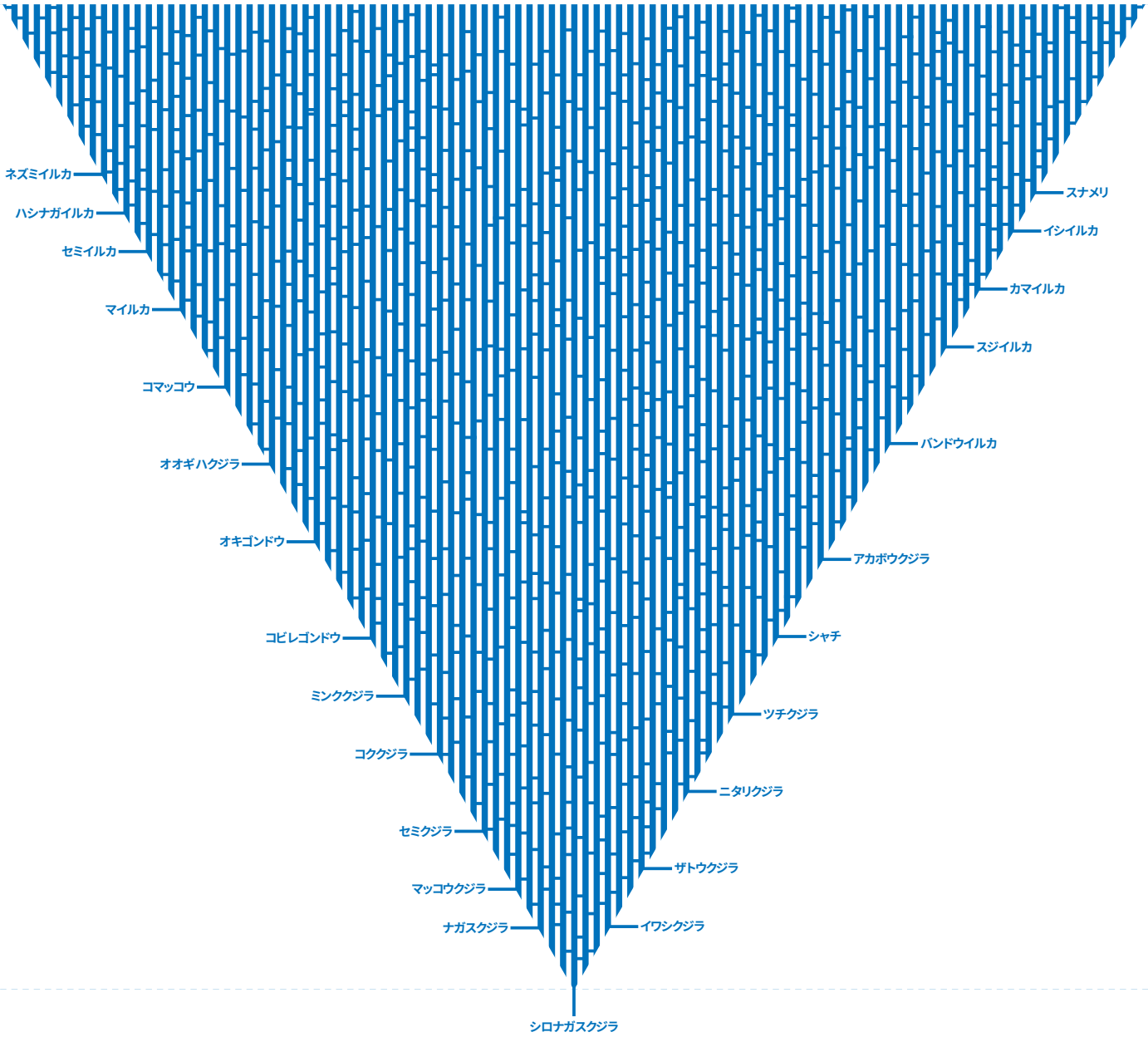
Puzzle Whales

環境へのビジュアルメッセージ

あみだくじら（制限時間5分）

シロナガスクジラにたどり着くまで挑戦してみて下さい。

あなたがクジラに出会えるチャンスを占う
「あみだくじら」です。
さて、今日出会うのは？



＜解答＞　ちなみに、大方町のホエール・ウォチングは平成2年8月の確率が83%でした。

1991

黒潮グラフィティ1991

Ocean Ecology from Tosa

イベント交流会

黒潮体感イベントとして、大型クルージング船を借上げ土佐湾沖において80人規模のホエールウォッチングを開催しました。当日は残念ながらクジラに遭遇できませんでしたが、黒潮の雄大さと脱日常の空気を満喫しました。高知における県外参加者（客人）向けイベント開発の一事例として、一過性に留まらない事業化の方向を探る参加者全員の意見交換の場となりました。

■月日　8月4日
■場所　室戸市沖合
■参加者　80人
■対象者　デザイナー、アーチト、文化人、協賛行政関係者
ホエルコ会員、補鯨OB、
一般参加者、報道関係者

1991

黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

黒潮グラフィティ1891
食文化がら感動文化へ

「見えないデザインを見せる」を合言葉に、地域開発のあらゆる分野に関係するデザインの切口を「土佐の鯨」へのかかわり方を通して高知県産業デザイン振興協議会のメンバー（グラフィック、インダストリアル、パッケージ各デザイナー、写真家、その他）が、「黒潮グラフィティ1991」として発表しました。
これは、全国5地域で行なわれた「デザインワークショップ」と呼ばれる地域デザイン関発事業のひとつで、高知県では1989年の「土佐・鰹プロジェクト」の第2段として実施されたものです。
高知に住む私たちにとって近年クローズアップされつつある「クジラ」を、今後どのように産業や文化、生活に影響させようとするのか、メンバーのパーソナル作品やシンポジウムの内容等をここに報告かたがた紹介いたします。ご参加、ご協力いただいた皆様、有難うございました。

デザインシンポジウム

オーシャン・エコロジーの視点から、地域振興を果たすグランドデザインへの取り組みと今後の可能性や問題点について、基調講演をもとに意見交換を行ないました。
また、山梨県と徳島県、高知県の地域デザイン関発事例を発表しましたが、“デザインの王道とはどうあるべきか”等、地域産業とのかかわりにおいて厳しい意見か続出しました。

■月日　9月26日
■実施場所　高知市立自由民権記念館ホール
■参加者　100人
■対象者　デザイナー、企業関係者、行政関係者、一般参加者

●パネラー　日高一樹（基調講演）
小林春生
黒河昭一
楠瀬浩二
●コーディネーター　坂本昌三郎
●司会　仲村譲

1991

黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

テザインシンポジウム
懇親会

1991

黒潮グラフィティ1991
Ocean Ecology from Tosa

デザイン発表展示会

コンセフトに添ったパーソナルデザイン作品の展示を県外デザイナーを含めて行ないました。
産業、文化、生活にまたがる地球環境や地域環境を自然生態系からとらえたビジュアルメッセージや音響メッセージとして発信しました。

■月日　　9月26日～29日
■実施場所　高知市立自由民権記念館自由ギャー
■来場者　　400人

1992

CAD高度利用技術セミナーの研修内容について

●CAD　2Dドラフティング、3Dモデリング講座

7月28(火)～29日(水)

内容:VersaCAD
基礎、応用技術

講師：(有)インデクス代表取締役
西出順吉氏

●CG　自由造形モデリング講座と3Dビジュアル講座

8月24(月)～25日(火)

内容:PRESENTER
PROFESSIONAL基礎技術

講師：(株)カテナデザイン研究所

9月28(月)～29日(火)

内容:PRESENTER
PROFESSIONAL応用技術

講師：(株)カテナデザイン研究所

●CG　3Dグラフィックとグラフィック総合講座

10月26(月)～27日(火)

内容:Strata VISION
基礎・応用技術

講師:(有)インデクス取締役　松戸光司氏

11月16(月)～17日(火)

内容:Strata VISION
基礎・応用技術

講師:(有)インデクス取締役　松戸光司氏

1992

●デザイン特別セミナー

県外講師による、デザイン事務所へのコンピュータ・グラフィック導入事例、その後の業務内容や作業効率の変化、将来への予測を講演していただき、情報・意見交換の場にしたいと考えます。

●月日　11月26日（木）
●時間　PM3：00〜5：30
　最終日は、PM4：00にて閉場
●場所　ギャラリー・パン
●テーマ　デザインとMacintosh
●講師　奥村昭夫氏（デザイナー）
●対象者　協議会参加デザイナー、特別聴講者

「design annual 1992」

●趣旨：高度情報社会から創造化社会へと大きく変化するなかで、デザインは経済活動や地域文化の成長発展を急速に推進しています。デザインイヤー以来、全国各地でデザイン推進活動が盛んに行われるようになりましたが、高知県産業デザイン振興協議会メンバーは、この一年間の仕事を振り返り、デザインの存在理由やその価値をあらためて問い直してみたいと思います。また、この機会に、先端化するコンピュータ・デザインの導入事例を研究すると共に、県内外デザイン関係者やデザイン依頼企業・公共団体関係者と交流を深め、デザインによるよりよい地域活性化をはかることを目的とします。

●デザイン交流会

県内外デザイナーと県内デザイン依頼企業・公共団体関係者を対象に、デザイン開発事例パネル紹介や活動デザイン事務所紹介を通して交流を行います。

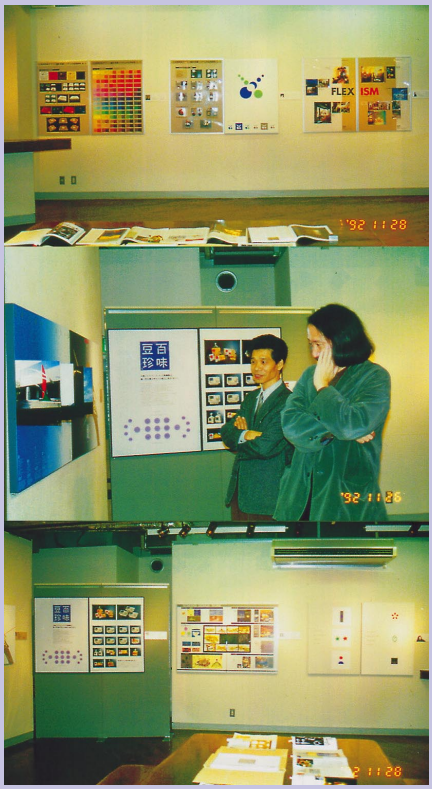
●月日　11月26日（木）
●時間　PM6：30〜8：30
　最終日は、PM4：00にて閉場
●場所　ギャラリー・パン
●対象者　デザイン依頼企業・行政関係者・協議会参加デザイナー・県外デザイナー・報道関係者・特別招待者
●人数　約65名

1992

●コンセプト＆ワーク展

協議会メンバー19人と特別招待者による、この一年間の代表的デザイン開発事例や提案作品の発表展示を行います。産業・文化・生活にまたがるデザイン活動を身近に視覚体験し、今後の地域開発に活かしてもらいたいと考えます。

●月日　11月27日（金）～12月1日（火）
●時間　AM10：00～PM6：00
　　最終日は、PM4：00にて閉場
●場所　ギャラリー・パン
●内容　デザイン発表会（B全パネル40枚）
●対象者　デザイン依頼企業・行政関係者、一般者
●入場料　無料



1993

黒潮グラフィティ1993

基本テーマ
［土佐人基質］土州アイデンティティの形成

ごあいさつ

日本は今バブル経済後の不況期にあり、その景気回復のためにあらゆる状況においてリストラが行われており、デザイン業界もそのさなかにあります。
一方デザインは、産業振興だけでなく、地域環境の整備や地域全体の活性化の視点において活用しようとする機会が増加すると見込まれており、デザイン事業所の経営基盤そのものの変革と同時に、、さまざまに専門化した検討の必要性も高まってきています。

高知県に住む私達18人は、異分野のデザイナーの集まりとして、1989年のデザインイヤー以来、恵まれた風土や毎日の生活を見直し、新しい経済価値や地域に根差した文化を造り出すために、あらためて高知のアイデンティティを探ろうとするデザイン総合開発の試みを繰り返してきました。さらに、昨年4月より、第3回の「黒潮グラフティ1993」を高知県産業デザイン振興協議会の活動テーマとして企画し、10月に発表会を開催致しました。

多くの人達に伝えるための活動は、まず自分の感動であり、経済を活用化する元気は、まず、自分の元気であると考えました。土佐の自然と文化と産業の一端を、このメッセージから感受頂ければ幸いです。時代の変化に対応したデザインの役割を求める皆様のご理解ご批判と、より一層のご支援ご協力を希望します。

高知県産業デザイン振興協議会会長　楠瀬　浩二

デザインシンポジウム

10月1日（デザインの日）
●クロストーク
日高一樹（株式会社ディー・エヌ・エー代表取締役）
佐藤康三（コーゾー・デザインスタジオ代表取締役）
●デザイン活動事例発表
高知県：西岡鶴夫（株式会社ノーマンド代表取締役）
熊本県：出田貴康（熊本県商工政策課主幹）
●ディスカッション
日高一樹、佐藤康三、出田貴康
長澤　昭（株式会社高知県商品計画機構代表取締役）

コンセプト
［もてなし］のデザイン

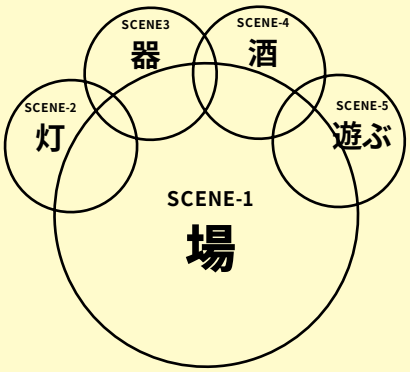
SCENE-1もてなしの「場」
土佐の自然・風土を活かした環境施設のデザイン開発

SCENE-2もてなしの「灯」
土佐の和紙を活かしたあかりの演出や照明のデザイン開発

SCENE-3もてなしの「器」
土佐の料理を盛る酒器や食器のデザイン開発

SCENE-4もてなしの「酒」
土佐の酒をモチーフにした商品のデザイン開発

SCENE-5もてなしの「遊」
土佐の宴での遊びをテーマとしたビジュアルデザイン開発



デザインエキシビション

10月2日〜5日

参加デザイナーがコンセプトに添った分野別のデザイン開発案を作成し、発表展示会を行いました。また、これまで5年間の活動記録を併設し、デザイン活動への理解を得ようと考えました。

デザイン交流会（特別企画）

10月1日

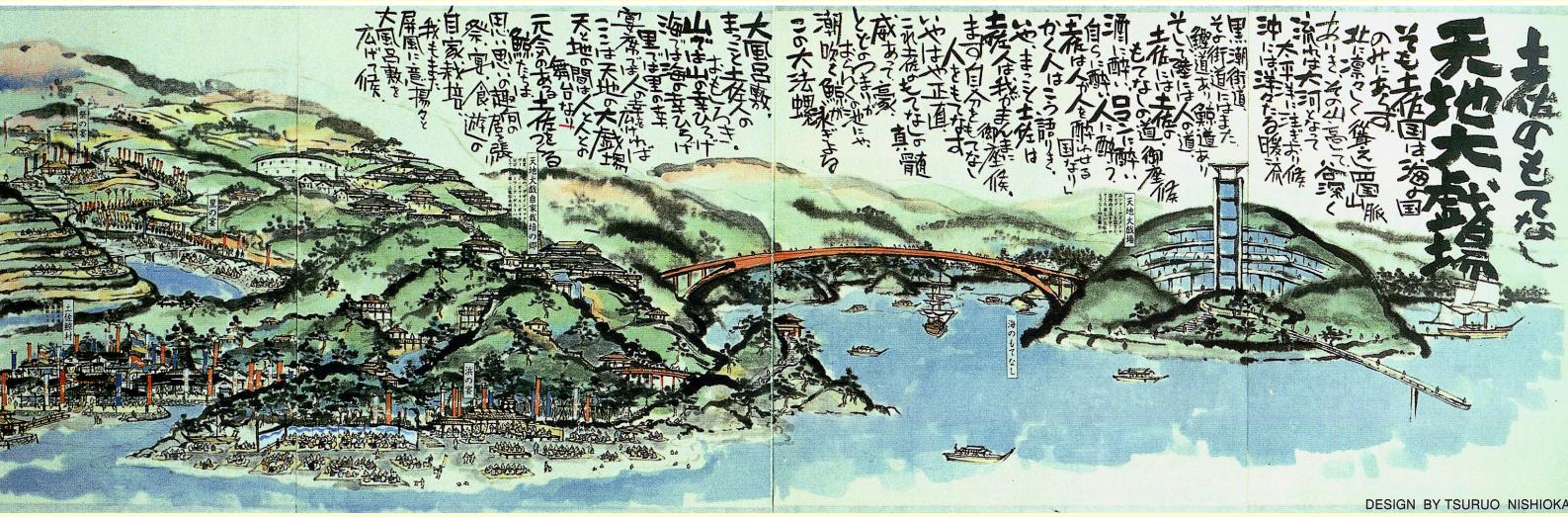
「新土佐流もてなしのデザイン」の事例発表として、この日のために限定生産した土佐酒を酌み交わし、空間、照明、和洋楽等、デザイナーと参加者によるデザイン談義を楽しみました。

実施場所：ギャラリー・パン／高知市追手筋1丁目6ー9

1993

黒潮グラフィティ1993

基本テーマ
［土佐人基質］土州アイデンティティの形成



デザインシンポジウム

10月1日（デザインの日）

デザインパラダイムの変革期と言われる今、日本とイタリア他、外国とのデザイン認識の違いを明らかにしつつ、「90年代における地域デザイン」の在り方について、全国のデザイン開発事例の現況について開設いただき、意見交換を行いました。
また、熊本県のデザイン行政手法や高知県の地域開発提案を発表しました。”地域に対する夢やビジョン、開発、情報、流通に対するマインド ”が不可欠であり、これまで目に見えるシステム開発のコピーで終わっていた等、さまざまな問題点が指摘されました。

●クロストーク
日高一樹（株式会社ディー・エヌ・エー代表取締役）
佐藤康三（コーゾー・デザインスタジオ代表取締役）
●デザイン活動事例発表
高知県：西岡鶴夫（株式会社ノーマンド代表取締役）
熊本県：出田貴康（熊本県商工政策課主幹）
●ディスカッション
日高一樹、佐藤康三、出田貴康
長澤　昭（株式会社高知県商品計画機構代表取締役）

1993

黒潮グラフィティ1993

基本テーマ
[土佐人基質]土州アイデンティティの形成

デザインエキシビション

10月2日～5日
参加デザイナーがコンセプトに添った分野別のデザイン開発案を作成し、発表展示会を行いました。また、これまで5年間の活動記録を併設し、デザイン活動への理解を得ようと考えました。

デザイン交流会(特別企画)

10月1日
「新土佐流もてなしのデザイン」の事例発表として、この日のために限定生産した土佐酒を酌み交わし、空間、照明、和洋楽等、デザイナーと参加者によるデザイン談義を楽しみました。

実施場所:ギャラリー・パン
高知市追手筋1丁目6ー9

高知県産業デザイン振興協議会

黒潮グラフィティ

1994.09.01 No.01

Kochi Industrial Design Promotion Council

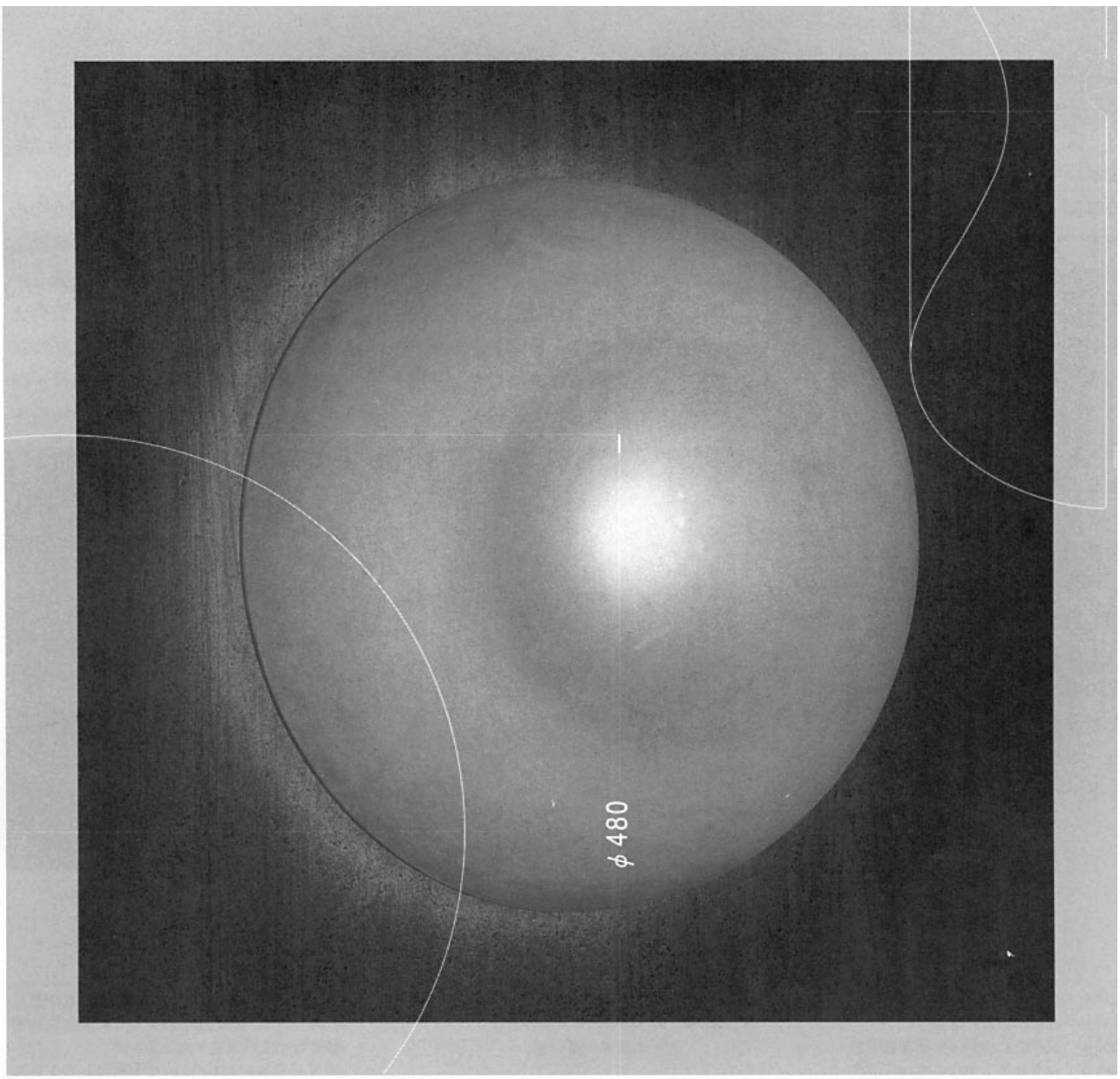
特集　「土佐HyperMeeting」

第1回　講師：上田堯世　ピカッと、キチッと、ドシッと

第2回　講師：加藤俊男　新作カルタ発表

事務局：高知市布師田3992-3 〒781-51
高知県工業技術センター内
TEL0888-46-1111　FAX0888-45-9111

Kochi Industrial Design Promotion Council



GRAPHIC　加藤俊男

講師：上田堯世
（合）上田建築事務所　代表

ピカっと、キチっと、ドシっと

建築には耐久力が必要だと言う。
しかしそのためには、物理的なものだけでなく、
心情的にも良くないと永く持たないと言う。
土佐の気候、風土、時間から恵まれたものを最大限に活用して、
そこに、新たな何かを加算したいと、6月14日、静かに語った！　編集部

私は大工の家の4代目。初代は宮大工の家より町屋大工の上田家への養子であった。先代、つまり私の父（虎介）は、大工というより文部省より近世規矩（きく）術で文化財撰定技術保持者として認定された研究者で、文部省・文化財保存技術協会に席を置き後年は中国・四国地方の重要文化財の修復を手掛けました。古建築の専門家でした。設計者ではありませんが建築事務所を持っていました。二人の兄は機械と電気に進み頭の悪い私が建築を志したというより、成り行きでその事務所を継ぎました。そのような血と経歴を持つ事務所の必然でしょうか良い建築とは絶対条件として耐久力を持たなければならないと考えます。それは、建築自体が物理的に耐久力をもつということだけではなく、心情をもって、意匠的にも機能的にも耐久力を持たねばなりません。
私の事務所では、良い建築をつくるための掟として「ピカッと・キチッと・ドシッと」した建築を造るというキャッチフレーズを掲げています。

ピカッと――文化として持ち合わせねばならぬ静けさを備える建築
キチッと――建築として持ち合わせねばならぬ確かさを備える建築
ドシッと――その地として持ち合わせねばならぬ重たさを備える建築

静けさは美しさでも良いわけです。創造性です。私は緊張感を持った静かな空間が好きです。その静けさです。土佐の日射しの強さを得手として深い庇を持つコントラストの強いモノトーンの建築を求めたり、土佐の恵みで、有機質の土佐漆喰・土佐和紙に工業製品で無機質のステンレススチール、アルミ等の金属・ガラス・コンクリート打放しを対応させる二元対比により緊張感を得ることが出来ないものかと試みています。
確かさは建築のつくられるその地の風土により淘汰され、時間により証明され蓄積された確かな工法・ディテール等の技術です。その確かなものです。土佐の雨は下から降ると言われる程はげしいものです。厳しい自然に対して古くからある土佐の土蔵は、幾重にも重なる水切り瓦の蓄積された技術で対処しています。木造だけでなく鉄筋コンクリート造の

伊野町紙の博物館

あげた　たかよ
1942年　高知県伊野町生まれ
1939年　滋賀県立短期大学建築科卒業
1965年　合資会社上田建築事務所入所
1985年　同代表社員

1986年　SDレビュー入賞
1988年　第一回公共建築賞特別賞
（いの町紙の博物館）

石灰石　高知県は全国第4位の石灰石出荷量を誇っており、不純物が少なく良質のため建築資材や化学用を主体としいる。
中でも建築用消石灰は、「土佐灰」として高く評価されてる。

高知県立青少年体育館

建築でもその水切瓦に教えられ丁寧に納めるよう心がけたり、風雨に対して培われた強い納屋の構法を応用した「土佐の家〈納屋型〉」という構法を試みるとか、大スパン・大規模の木造建築のために伝統的な肘木と差貫の構法を応用した「大きな家〈肘木型〉」という構法を試みたりしています。しかし、それらの伝統的な設計法を自分のものにするには、的確に学びとる能力と蓄積と執念が必要ですからまだまだ先は長いようです。

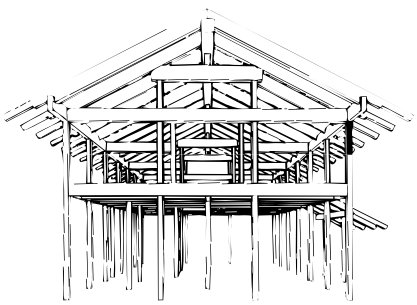
重たさは建築のつくられるその地（環境）に対して安心できる存在感と重量感を持つことです。それはその地の自然により淘汰され、時間により証明された、多量で安価なその地の恵を持ってその他（環境）が求めるルールを侵すことのない建築です。

土佐漆喰　生石灰を作る過程で粒子を大きくするため塩を入れ独自の塩焼生石灰を作り、その後、水と反応させ消石灰とし、強度を持たせるためにスサやワラを混ぜたもの。桂離宮や各地の城郭、日本家屋に使用されてきた。

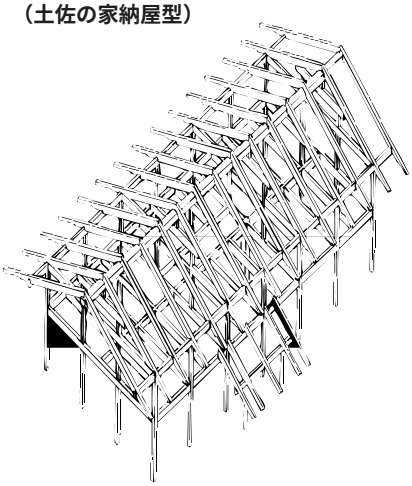
私がよく使用する土佐の恵は石灰石・土佐漆喰・土佐材・土佐和紙等です。恵は、苛酷な自然と時間が証明してくれた性能の良さだけではなく、人々に語りかける表情を持ち合わせています。つまり、「恵と人」「恵と自然」のコミュニケートが存在します。

しかし、いかに良い素材でもそれをただ使用するだけでは、現代の人々の感性に訴えることはできません。これ等の条件（静けさ・確かさ・重たさ）の積み重ね、調合にはまだまだ時間と努力と能力が必要です。良い建築に到着できますことやら。

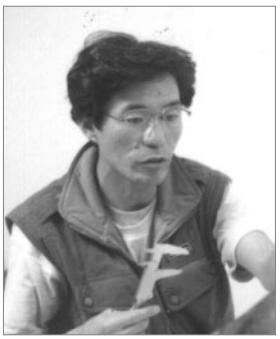
いくつか見ていただきましたとおり私の試している建築はこの地の恵と積み重ねてまいりました知恵つまり風土により淘汰・洗練され時間により証明された恵と技で成り立っています。私の役はそれに対しほんの僅かでしょうがどれだけのものを加算できるかです。その加算により現代人の感性を少しでもゆさぶることが出来れば幸いです。



構造パース
（土佐の家納屋型）



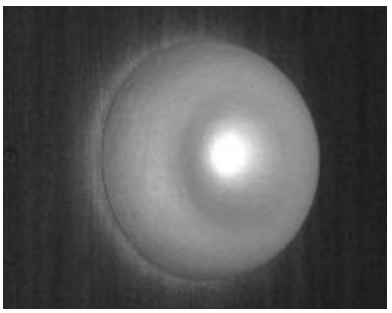
構造アクソノメトリック
（土佐の家納屋型）



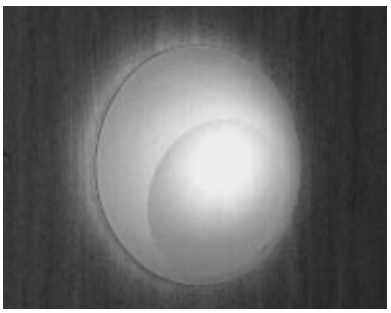
講師：加藤俊男
(有)イメージラボテクスト　代表取締役

高知で開発されたカルタがGマーク家具・インテリア部門別大賞を受賞したのは昭和63年度であった。カルタの受賞は、地場産業に携わる者を勇気づけることであった。開発体制を強化。「よりアコースティックなあかり」「暮らしに変化を与え、やさしさをもたらすあかり」をめざして新製品TECSTCARTAブランドを発表した。　編集部

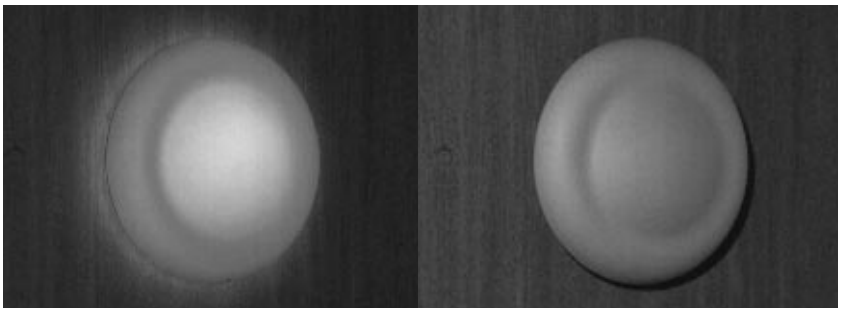
独自の立体抄造技術による照明器具cartaの開発から７年が経つ。そろそろ次のモデルをと、昨年暮れ新製品のデザインに着手し、カタログも刷り上がる段階にまできた。とりあえずブラケットからはじめたが、年内にはフロアースタンド、シーリングとアイテムを増やしていく予定である。また今回は、自社初のオリジナルカタログでもあり、ブランドもTECSTCARTAとして販売する。
その開発内容を以下にご紹介させていただく。



Rivo　94BR-0002



Rivo　94BR-0003



Rivo　94BR-0004

１．job名

new carta project 1993
今回の開発にはレコードマネジメントの手法を導入しjob名を与えた。つまり、この開発に係る全てのworkにはnew carta project 1993とラベルを付しファイリングすることを義務化した。このことは、今後の案件での迅速な意志決定のために欠かせないDataBaseとなるはずである。

２．jobテーマ

自・分・で・売・る・ぞ
このテーマを達成させるためには次の条件を満たす必要があった。

＜商品バリエーションを増やすこと＞と＜直販を含む流通の開発＞

上記のテーマ骨子に基づき下記の行動計画を立て実行した。

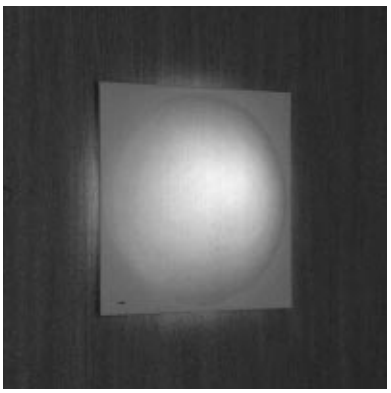
３．行動計画

３－１ 設計の自動化
CadCamパフォーマンスの最大利用
Macintosh と SUNSparc のデータリンケージ。
Cadデータの Draw データ化
これによって、オリジナルイメージのデータがグラフィックパーツとしてハンドリングフリーとなる。

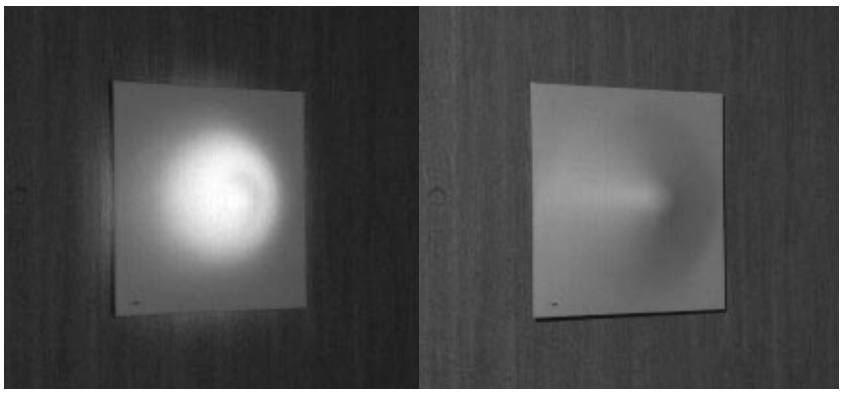
３－２TECSTCARTAをブランド化
従来cartaと統一したイメージの商品化。
アイテムをブラケットに限定しシリーズ化を図りRivo,　Bul,　S-Carveとした。

かとう　としお
1947年　高知市生まれ
1975年　東京造形大学造形学部デザイン学科
　インダストリアルデザイン専攻卒業
　同大学インダストリアルデザイン研究室研生
76～94年（有）デザイン事務所インデクス
1982年　イメージラボ テクスト設立
1988年　「カルタシリーズ」
　通産省Gマーク選定商品
　家具・インテリア部門別大賞

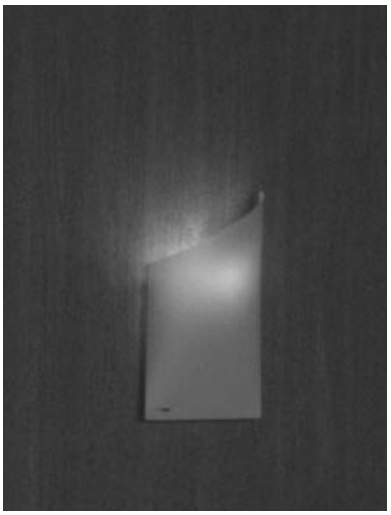
'JIDA'　日本インダストリアルデザイナー協会
'JSSD'　日本デザイン学会
'JASIS'　日本インテリア学会
'JALT'　日本皮革技術協会
'JIA'新　日本建築家協会
　高知県設計管理協会
'KIDPC'　高知県産業デザイン振興協議会　会長



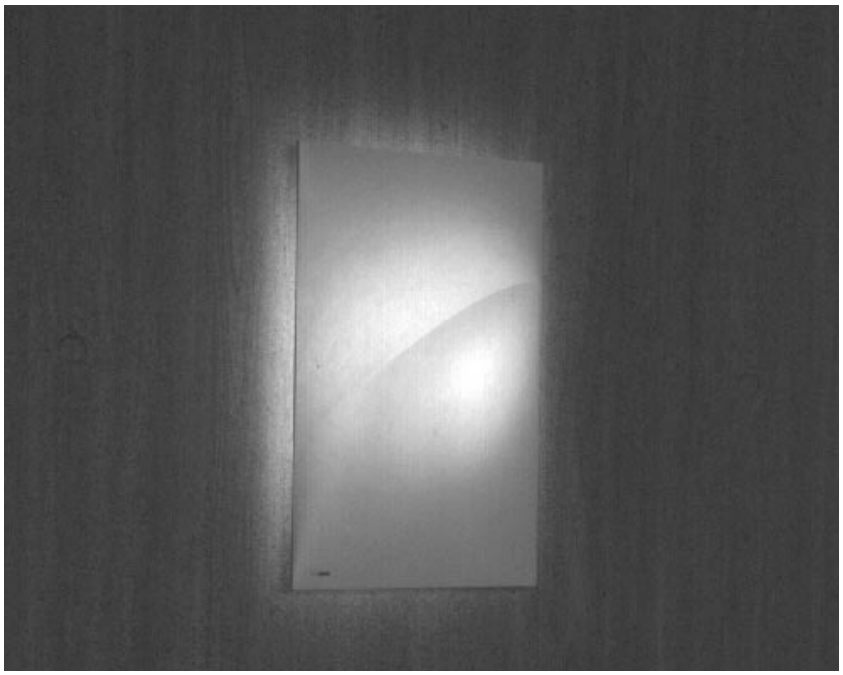
Bul 94BB-0101



Bul 94BB-0104



S-Carve 94BS-0202



S-Carve 94BS-0206

3－3イメージのデザインパーツ化
　トレードマーク
　商標
　製品イメージ姿図
　レターヘッド
　etc.
3－4カタログ他販促ツールの整備
　カタログ（いの紙のあかり TECSTCARTA）
　パッケージ
　商品シール・ラベル
　伝票・帳票
3－5 伝票・帳票他DataBaseの整備

いの紙のあかり　伊野町に問屋坂（といやざか）がある。手漉和紙の生産が盛んであった当時の活況を示す名残である。洋紙が入ってきた明治以降、土佐和紙の伝統を支えてきた伊野紙（いのがみ）にちなみこのキャッチフレーズを選んだ。

4. いの紙のあかり TECSTCARTA

Rivo・シリーズリボ
　回転体
　Revolver
Bul・シリーズバル
　ふくらみ、突び出す
　Bulge
S-Carve・シリーズエス-カーブ

削る造型において得られる形態。工業デザインからは距離感のある、天然の和紙原料を素材とするTECSTCARTAではあるが、CadCamの恩恵というべきか、７年前と比し設計環境が著しく様変りした。当時の青焼き図面と見比べながら、デザインはけっして手法ではないが、手法がデザインを生むこともまた事実であると再認識している。ともかく、試作から本型までの時短が図れ、同時に寸法誤差が最小に押さえられることで、部品の平行発注に不安がなくなったことは、おおいに歓迎するところ。

KIDPC Reports
Kochi Industrial Design Promotion Council

「高知市地区整備計画」計画書、発行

(株) インクスポット
楠瀬浩二

1993年の始め頃より「高知市地区整備計画」計画書づくりの企画に着手し約1年半、やっと先月完成しました。高知市が発行した高知市地区整備計画の作成にあたっては高知市の地域計画室が中心となり（株）インクスポットがデザイン制作を受託したもので、今回作成された地区整備計画とは「今後、市民の主体的な参加によってなされるコミュニティ計画策定作業をより効率的、効果的に進めるため行政の側から捉えたこれからのまちづくりの目標や、現況・課題、整備方針、さらには事業計画等といった内容を地域毎に明らかにしたものです。」（総括版より紹介）

高知市のグランドデザインに基づいて、地域を「中央」「潮江」「長浜」「三里」「五台山・高須」「大津・介良」「布師田・一宮」「秦・初月」「旭」「朝倉」「鴨田」の11地域に区分し、各地域のゾーン毎に計画内容を明確にしています。従って計画書は各地域11冊に分け、総括版とあわせて12冊を同時に企画デザインしました。デザインコンセプトは、そのエリアに住む人たちがまず自分の暮らす「まち」の表情を再発見し、それぞれ地域のアイデンティティを確認したうえで、これからのよりよいコミュニティづくりに活かそうという意図から写真による取材を年間を通じて行ないました。自分自身の顔は鏡に写さないと見ることができないのと同様、日頃見慣れた街の顔も他者の視点で見つめ直し、あらためてその価値を発見するために、カメラマンの高橋宣之氏のカメラアイに全ておまかせしました。これらの写真は「我が町再発見」のタイトルで現在各地域において写真展を開催しております。計画書はこれらの写真と計画内容、検討すべき計画事業の整備計画図および図表によって構成し、美しく、わかりやすい計画書にすることをデザインの基本としました。

デザイン制作の実務作業については、計画図制作にウエイトがかかるため、すべてマッキントッシュで制作し印刷入稿もフロッピー渡しで行ないました。使用ソフトはAdobe Illustratorおよびquark XPress。

当社はまだまだDTPやCADについては研究過程にあり、リスクも大きかったのですが、結果的にはそれまでの技法ではできなかったことが可能となり、あらためてグラフィックの急速な進化を実感した次第です。

この計画書が高知市と地域住民とのコミュニケーションツールとして役立ち、これからの高知市の街づくりに貢献することを期待するとともに、私達デザイナーにとっても、先進的な技術にともなうリスクをおそれず挑戦する先鞭となった高知市の意欲と勇気に称賛をおくりたいものです。

WWの楽しさを広げる テキスト型グッズ

アドランド（株）

元吉勝美

高知の沖合を悠然と泳ぐクジラ。そのクジラに素直な気持ちで出会うことができたら、ほとんどの人は心豊かな気持ちになります。

クジラを観る。

これは、地球46億年、ま、そこまでいかなくてもクジラ５千万年の歴史の中で初めての行為です。

これまでの敵対関係でない、友好的で教育的で経済的で、しかも自然との共存スタンスの、人と海とクジラの新しい関係としてホエールウオッチング（WW）が今注目されています。

素晴らしいことだと思います。

もしかしたら、このWW事業は人類史上まだ始まったばかりなので、夢ばかりでなく未知なる欠陥が含まれているかも知れません。

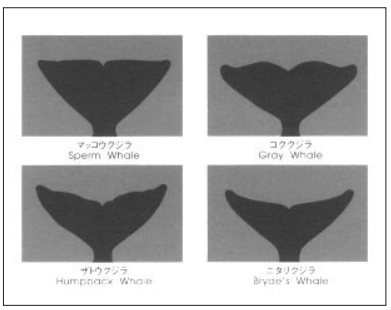
しかし、クジラが人々の心をゆさぶることは確かです。

現在、このクジラをテーマに商品開発に取り組んでいます。

クジラグッズは、どんなふうに生活の中に入っていくことができるだろうか。

ポジショニング、デザイン、価格……結局は、時代背景からライフスタイルまでどんどん考えは発展するのですがそれはおいといて、WWの楽しさを広げるテキスト型のグッズ。

このあたりから取り組んでいます。



椿原町森林生態学習館 ディスプレイ

DESIGN STUDIO 301

守谷孝男

この森林生態学習館は、椿原の森林や自然のこと、森の中のたくさんの鳥類、哺乳類、昆虫、そして山岳ならではの植物などをパネルや模型で紹介し、森林に関わる人々のこと、文化などについて学び、これからの森林を考え、そこに生息する動植物や森林に対する関心を深めていただきたいと願って作られた施設です。

client	椿原町
producer	RKCプロダクション
coordinator	高知西武インテリアハウジング
art director	守谷孝男
designer	守谷孝男
copywriter	松本俊寛
photographer	RKCプロダクション
display soft	LOFT 西森英行
display hard	ライブデザイン事務所

301のMacintosh テクニカルレポート

DESIGN STUDIO 301

守谷孝男

久保田食品

ホームメイドアイスクリームの 3D

使用ソフト

Adobe Dimensions

Adobe Illustrator3.2J

出力

Canon PIXEL JET　400dpi

Canon PS JET

レベル2インターフェースユニット

ビデオ映像の緊急プロデュース

今、ダムは警告する（仮題）

(有) フォーマス

川添　寛

世界各地で発生する自然災害。昨年の日本を襲った冷夏。そして昨今の７月中旬、四国の水瓶早明浦ダムはかってない異常を見せはじめていました。第一回現地取材を終えた7月20日に貯水量は5.8％。そして7月23日に貯水量は2.2％。さらに翌々日の7月25日には発電用を除いて0％が予想されていました。地球規模の大気・気象の異常は高知でも例外ではなかったのです。

テーマは早明浦ダムの渇水と水質汚染。現地取材はスタッフ4人、カラカラ天気の中でM2フォーマットのカメラを抱えての仕事はお手上げ寸前でした。クライアントは高知県大川村。構成、編集は8月いっぱいを予定しています。（VHSノーマル15分）

Design News

「デザインの日」記念事業（登録案内）

10月1日は「デザインの日」。
デザインの持つ意義を国内に広報し、デザインマインドの一層の向上を図る機会として創設され、毎年各種事業が全国的に実施されている。
（財）日本産業デザイン振興会では、地方自治体、企業、デザイン関係団体などが様々な事業を実施・展開することを期待して、記念事業を登録し、刊行物による広報活動などを通してデザイン活動を支援している。
対象＝デザインの普及、発展に寄与することを目的に、原則として9〜11月に実施される事業。
登録申請用紙請求先＝(財)日本産業デザイン振興会（〒105 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル別館4F TEL03-3435-5633）

第７回国際デザイン・コンペティション テーマ＝触（ショク） ―人間性の回復のために―

21世紀をめざして人類の豊かな未来へのビジョンを明確にし、デザインの役割を問うことを目的に、すべてのデザイン分野を対象にした新たに創作した未発表作品を募集している。
今回は、「触」というテーマを手がかりにして、この地球上の生あるものすべてのために、デザインは何ができるか、その可能性を深く考察した提案が期待されている。
応募資料請求先＝(財)国際デザイン交流協会「第７回国際デザイン・コンペティション事務局Ｃ係」（〒530 大阪市北区梅田1-3-1-800 大阪駅前第一ビル8F TEL06-346-2611）
返信用270円切手同封のこと

ＩＦＩ'９５名古屋 世界インテリア会議

来年10月名古屋において世界インテリア会議が開催される。
この会議には、世界各国の代表的なインテリアデザイナーや建築家をはじめ広範な人々の参加が予定されている。現代文明と地域文化の２つの観点から、５つの課題を選び先進的な検討を加え、インテリアデザインの新しい視点として社会に向けて発信する場にしようとしている。
会議 1995年10月4日〜6日
登録参加料 5万円程度
案内状請求先＝世界インテリアデザイン会議運営委員会（〒460 名古屋市中区栄2-9-26 ポーラ名古屋ビル6F TEL052-231-1351）

「手法さまざま デザイン振興策」平成5年度版

通商産業局検査デザイン行政室は、平成5年度に実施された各都道府県におけるデザイン振興策をまとめた資料を作成した。
この資料は、毎年地方自治体から提出された資料を元に作成されており、各県別のデザイン関係振興策の現状が予算額を含めて一覧できる。非売品だが、工業振興課や工業技術センター（TEL0888-46-1111）において閲覧が可能。

この一冊でデザイン界がわかる「デザイン情報源 '94」

デザインの仕事は、あらゆる製品の開発から商品化、販売、サービス、あるいは省資源、地球環境の保護と言った問題解決まで、一つの分野として把握できない多様性を持っている。「デザイン情報源'94」は、にっけいでざいん誌が企画したもので、この一冊でデザイン界を支える人々、組織、情報の所在等を可能な限り明らかにしている。定価12,000円。
発行所=日経ＢＰ社（東京都千代田区平河町2-7-6 TEL03-3689-1611）

目次

巻頭GRAPHIC 加藤俊男 1

特集
第1回「土佐Hyper Meeting」
ピカッと、キチッと、ドシっと
講師：上田暁世 2

第2回 土佐Hyper Meeting
新作カルタ発表
講師：加藤俊男 4

KIDPC Reports
楠瀬浩二／元吉勝美／守谷孝男
／川添 寛 6

デザインニュース 8

編集後記

「黒潮グラフィティ」創刊号が完成しました。
基本的な構成内容は、特集のハイパーミーティングを中心に会員レポート、デザインニュースの３要素からなっています。
ハイパーミーティングは、毎月の定例会に講師をお招きして開いているものであり、講師が長い間、興味関心を持ち続けているテーマです。
本物は、教えられることが多いだけでなく気持ちもいいですね。
今後さらに多くの方々に新たなる影響を与え高まりあえる機関誌へと発展成長するよう編集スタッフ一同頑張っています。
皆さんのご声援とご協力を心からお願い申し上げます。（元吉）

発行 高知県産業デザイン振興協議会
印刷 有限会社片岡印刷所
編集長 元吉勝美
編集委員 楠瀬浩二／田中幹男
片岡孝元／仲村 譲

高知県産業デザイン振興協議会

黒潮グラフィティ

1994.11.01 No.02

Kochi Industrial Design Promotion Council

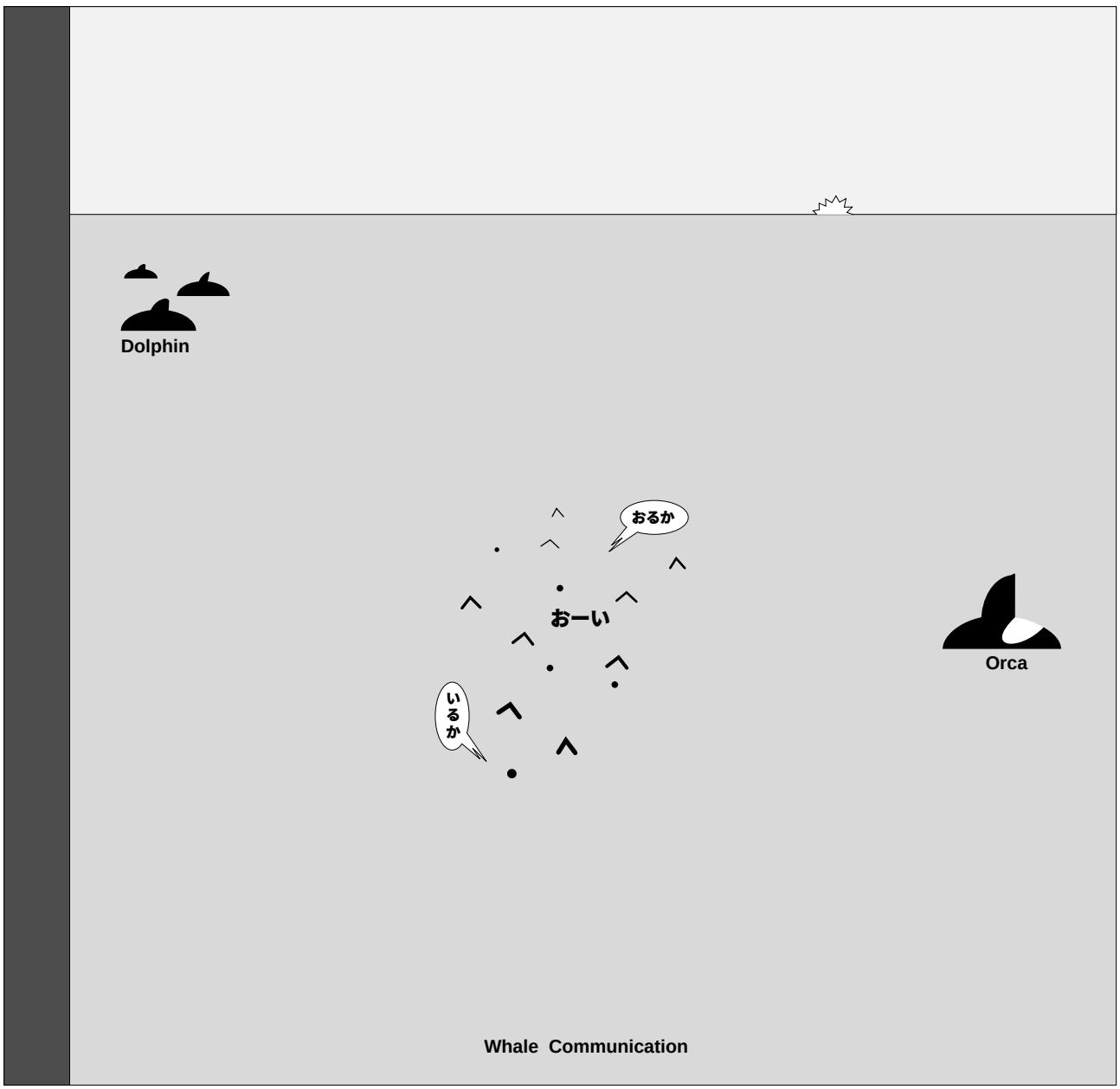
特集　「土佐HyperMeeting」

第3回　講師：長澤　昭　高知ブランドの全国発信

第4回　講師：元吉勝美　クジラとの新しい関係を求めて

事務局：高知市布師田3992-3 〒781-51
高知県工業技術センター内
TEL0888-46-1111　FAX0888-45-9111

Kochi Industrial Design Promotion Council



GRAPHIC　元吉勝美

高知ブランドの全国発信

講師：長澤　昭
(株)高知県商品計画機構　代表取締役社長

橋本知事の三大公約の一つ、商品計画機構が第三セクター方式の株式会社として発足したのが昨年の6月21日。高知県にとっては、全国に通じる県産ブランド商品開発と流通ルート確立は積年の課題。中央流通業界で活躍してきた長澤氏と新機構には県民の期待も大きく、地域活性化貢献と健全経営という重圧の中、東奔西走の毎日が続いている。　　編集部

(株)高知県商品計画機構は、できてちょうど一年ちょっとになります。この会社の目的は高知県の商品、産品を県外へ売っていく、そのことによって高知県の村おこし、町おこしを活発にやっていこう、という主旨の会社です。出資は県が半分と市町村、銀行、NTTなどから受けている半公共的な会社です。

だいたい年間７千万ぐらいの経費が要りますので、その分は儲けていかないとどんどん資金を食い潰して後は倒産ということになります。しかし、ただ儲けるだけでいいのかというと、やはり公的な資金を注ぎ込んで設立した会社ですから、高知県に何らかの貢献をするということが必要なのです。

儲けながら貢献するというううまい話はあまり無いのでありまして、やはり儲けをとろうと思うと貢献はあまりできない。貢献しようと思うとやはり儲けはあまり取れない。最初は悩みに悩んだのですが、ある時ふっと、もう分けようと。儲けを取る仕事は儲けを取ろうと。これはもう一般の会社と同じように儲けてやっていこうじゃないかと。そのかわり半分は貢献する仕事をしようと。最近は２つの分類の元に仕事を分けてやっており、悩みだけは無くなったわけです。

貢献する仕事は今のところ土佐派の木造住宅、ソーダガツオの魚醤、よさこいグッズの開発販売など。それから伊勢丹の高知県物産店。物産店というのは県の農政課がどうしても産品の開発にやりたいということで、それではお世話しましょうと、ただしコミッションは取りませんという形でお世話しました。

それから西土佐村の無農薬野菜の開発。無農薬野菜の開発というのは去年の農政課の大き課題でした。実は残念ながら高知県の中でどこも無農薬野菜の認定マークを受ける候補者がなかったんです。無農薬野菜というのは、これから消費者の関心の高い商品です。まったく関心がないというのは農産県の高知として問題である。ひとつ商品計画機構がひと肌ぬいで西土佐村で開発しようと、そんな仕事をやっております。

儲ける仕事の方は色々やっておりまして、鰹のたたき、魚の干物、果物、土佐和紙の一貫張。これも開発を終わりまして、協力業者を通じて全国で売ることになっております。それから四万十のうどん、さんご、無農薬のソース、鹿の肉。こういった物を県外に持っていって売る。県外の百貨店、量販店にパイプがありますので、そこで売ろうというのが儲ける方の仕事です。ビジネスに関する話はあちこちから入ってきます。その中でモノになる話は意外と少ないものです。例えば今年は渇水で水が売れました。「四万十の水紀行」とか「吉野川の源流」という水です。しかし普段の時はなかなか難しいですね。

高知は本当に素材はいいんだけれど、どうも料理がもうひとつ。特に洋風料理はおいしいところがあると思わないのですけれど・・・。おいしい素材をおいしい料理にして提供するという料理文化を開発するというようなことをやったらどうだろうと考えています。高知の洋風料理はホテルが中心ですけれども。そういう所で「味の編集室」と言うようなのを作って、毎月やってみたらどうでしょうか。素材はいくらでも提供しますよという話もあります。

ながさわ　あきら
昭和 3年　芦屋市生まれ
昭和58年　(株)博多大丸　代表取締役社長
昭和62年　同社　常務締役、
　　引き続き同社　神戸店長事務官等
平成 3年　同社　代表取締役専務、
　　百貨店専業本部長事務官等
平成 5年　(株)高知県商品計画機構
　　代表取締役社長

高知の中にはいろんなビジネスの種がいっぱいあると思います。一次産品というとどうも黄昏の商品、特に最近は輸入品に押されてもう青息吐息。日本経済のお荷物だというイメージがあります。私はそうは思っていません。むしろこれから一番将来性があるのは一次産品ではないかと。輸入産品とのバッチングはありますけれど、いい味、いい鮮度を保持して流通を通じて消費者のもとへ届ければ輸入品との差別化はできます。そのためには、高度の技術が生産や物流に必要になってくるわけです。そういった意味では、一次産品の方にビジネスの種が沢山ありそうだと思います。したがって、高知というのは決して先が絶望ではなく、むしろ希望に溢れた地域であると言っているわけです。

今、土佐派の木造住宅というのを開発しています。高知県の建築設計監理協会の皆さんと一緒に高知県の木造住宅を県外で売っていこうということでやっています。最初は設監の皆さんから、ローコストの木造住宅のモデル住宅を造ったので商品計画機構で県外で売って貰えないかという話でした。なかなか面白い着想で、今までの高級木造住宅は節の無い木を使うのが条件であったが、我々は「節の美意識」を持っている。節のある木の方が本物らしいし強いしコストが安い。そんな考え方で造ったのが我々の設計した木造住宅だとおっしゃる。

それでは一度見に行きますということで、実際に建てたモデル住宅を見に行きました。しかし、やはりちょっとチープな感じはまぬがれない。これでは住友林業や三井建設などの大手の木造住宅と県外で競走は出来ない。どうしても高知から行って県外で建てると割高になるから経済的なローコスト住宅というのは高知から行って建てたのでは採算が合わない。県外で売るなら、もっと高級な注文住宅を売った方が良いのではないかと話しました。それに対して設

土佐一閑張の開発発表会　1994.06　東京六本木アクシス

監の先生方は、「それは面白い。われわれは木造住宅については自信がある。我々が造った住宅を法政大学の村松先生は＜土佐派の家＞と命名して下さっているので、この建築技術を売物にして、県外で売っていこう」と。そこで今、土佐派の家の話がすすんでおります。

もともと高知は蒸し暑いモンスーン地帯であり、昔から高温多湿に対する対策が高知の木造建築にはふんだんに素材や工法として生かされています。また台風に耐えうる骨太の家は現代的な感覚にマッチしています。高知の建築家の皆さんが設計された家を幾つか見せて頂きましたが、いずれも非常に素晴らしいと思いました。これは絶対に県外に出して誇れる文化ですね。この建築文化を輸出していけば、自ずから高知県の木だとか漆喰だとか和紙といった材料も売れていきます。まず建築文化を輸出しようというのが今回の土佐派の家の商品開発の考え方です。

そういったことで、いろいろと高知県特産の商品開発を毎日楽しくやっております。これからは、文化が大事だと思います。その意味で高知の文化を代表される皆さんとも何かご一緒にできればと思っております。どうか今後とも宜しくお願いします。

木の文化　木材や木を使ったモノ作りは、木の文化の一分野と捉えることで、木材偏重の枠を広げ、新たな需要創造や真価値を再構築することができる。高知県は木の文化県構想を提案している。

クジラとの新しい関係を求めて

高知では、ホエールウオッチングが行われ人気を集めている。
クジラとの新しいつき合い方としてのホエールウオッチング。今まで、こうした行為にふさわしい自然観を持ったクジラ商品がなく不思議であったが、ようやく登場しそうである。ホエルコブランドとしての考え方やデザイン、今後の展望を探ってみた。　編集部

講師：元吉勝美
アドランド株式会社　代表取締役社長

1988年8月16日
高知の沖合に＜クジラ＞がいるということを、単に一過性の見せ物で終らせてはいけない。
何か、もっと時代に合った創造的な取組みへと発展させたいと思う。

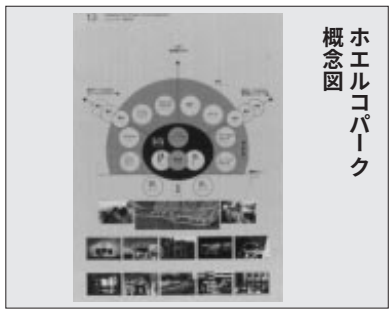
1990年3月
岩本久則著「土佐の鯨」企画出版。
これは、岩本氏の作家としての力をお借りして、まだ明確な姿形を持っていなかった日本のホエールウオッチング（WW）という行為に対して、意味や意義､楽しみ方といったWWの基準のようなものを提案したかった。

クジラの魅力は、その大きさに代表されるように物理的な面にあるのですが、文化的な側面もあり、むしろ今後はその価値の方がもっと評価されるべきではないか。

ホエルコ構想の商品には、葉書からホエルコパークまであり、テキスト、スーベニール、ライフスタイルの３つのステージがある。
今、その中からテキスト型グッズ類の制作に取組んでいます。

ホエルコ構想
コンセプトの背景

シンボルデザイン
コンセプト



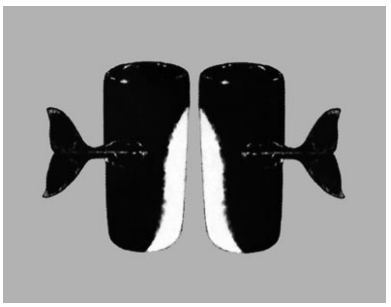
ホエルコパーク
概念図

ホエルコの概要
目　的：海域の自然観察、特にホエールウオッチングにおける人と海とクジラの新しい関係の中に海を感じ、海を考え、海を楽しみ、そこにヒューマンネットワークの輪を広げることにより、新しい海の文化と産業の発展に寄与することを目的とする。
名　称：WHALCO／ホエルコ
発　足：1990年2月17日
形　態：クジラをテーマとした遊びと学習の会（全国）
対　象：主旨に賛同の方
会　費：年間2000円
会員数：約300名
代　表：元吉勝美
事務局：〒780 高知市はりまや町2丁目13-10百栄ビル2F.

主な活動
・クジラやＷＷに関する研究及び普及提言活動。
・クジラやWW関係者との交流及びWWに関する活動。
・会員との交流及び情報の受発信活動。（会報Whalcoは年4回発行）
・上記活動をより楽しくするための商品の開発及び販売活動。

もとよし　かつみ
1938年　高知市生まれ
1984年　アドランド株式会社設立。
1986年　「ザ･高知」（読売新聞社誌）高知の新魅力の発掘、発想及びプロデュース。
1989年　夜須町壁画「まんがビーチ」企画及びプロデュース。 Art.：横山隆一氏。
1990年　高知市制100周年記念事業シンボルキャラクター「自由」デザインプロデュース著作監理。Art.：岡本太郎氏。
1992年　建設省物部川環境整備事業 「物部川こどもフィールドミュージアム構想」四電技術コンサルタント共同制作。
1993年　石元食品「新健康野菜加工食品･菜」企画およびデザインプロデュース。

日本初の本格的WWの書・土佐の鯨



ニタリカップ

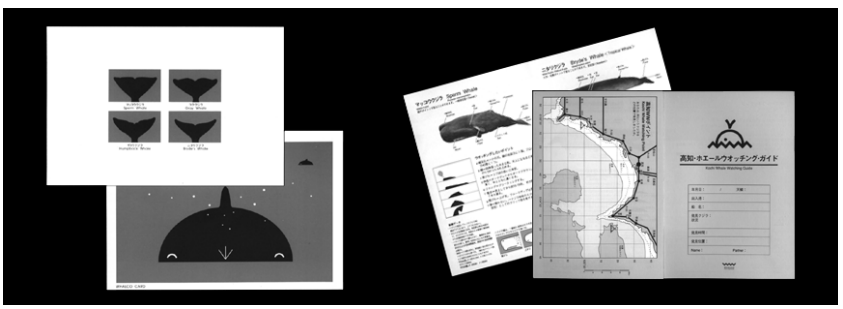
オルカボトル

WW図鑑Tシャツ

乾杯グラス

尾びれモニュメント

WW証明書



はがき／WWガイド

名称とブランドマーク

名称：WHALCO

マーク：ダイナミックウエーブ

WHALCO

A Type

WHALCO

B Type

商品のタイプ

テキスト型、スーベニール型、ライフスタイル型を設定。場合によっては、同一デザインの素材違い等にて標準と特別を設ける。

運営上の配慮

本計画は、商品を考え、つくり、売るという各段階を様々な人の参加協力によって行う構造です。

そのために――――――

a. 異質な専門家の連携が新しい特性となるような取組みとする。

b. 商品毎に製造者が異なるので、使用素材は＜より自然で安全なもの＞として共通性を持たせる。

c. ホエルコ商品の魅力は、WWが持つ良質の遊び性や学習性といった精神的要素にあり、WHALCOイメージの強化と蓄積が重要という認識の浸透。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

高知の沖合を悠然と泳ぐクジラ。

その姿に素直な気持ちで出会うことができたら誰もが心豊かな気持ちになることと思います。

そんな感じを秘めた商品をつくり、そして広げたいものです。

ホエルコ構想

黒潮グラフィティ1991 Ocean Ecology from Tosaのデザイン発表展示会にて、パネル発表。

クジラをテーマとして、発想の背景や考え方、開発の方向、範囲、イメージ等を体系づけた内容。

KIDPC Reports

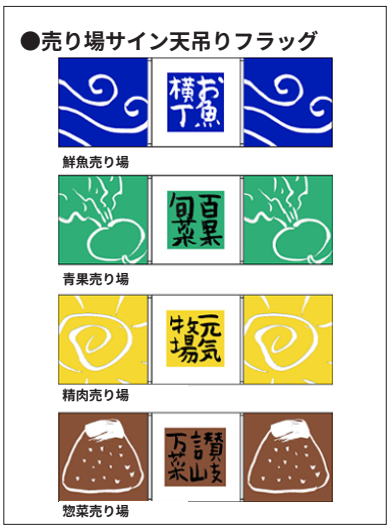
Kochi Industrial Design Promotion Council

消費環境の変化に対応したメッセージの在り方を探る

サニーマート伏石店サイン計画

(株) ポリセント　浦川敏明

アド・ゴーデザイン事務所　中島　悟



市場の停滞にともない企業の投資に対する考え方も建造物の素材や什器のコストの見直しなど当然の如く厳しくなっている。一方では、生活者の価値体系の変化に対応するメッセージの質が問われている。以前にも増して空間計画や色彩計画あるいはサイン計画などの果たす役割が重要になってきたという実感がある。その根底には生活者の反乱とでもいうべき自己実現欲求に伴う生活者の自己主張に如何に応えられるかがサービス業の命題になってきたという現実がある。イノベーターにあこがれ自己の価値観を決定する時代は終焉を告げ、生活者全員が自己の価値表現者となった事実を認識しなければデザインそのものが価値を持たない汚物となる時代である。例えば、色彩学にいわく「多色の時代」などはその典型ともいえる現象である。赤一色を押し付ける時代は平安の彼方へ消え去り、自己の色を主張する時代となった。

今回の計画はこんな時代を背景としてスタートした。

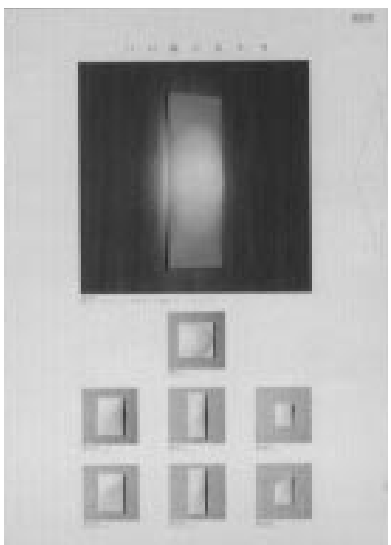
自己実現欲求の時代あるいは本音の時代といわれる今日、従来の企業が発信する情報をほぼ盲目的に生活者が受け取るというコミュニケーションの構造が変化し、むしろ生活者の本音を企業が受信し、その本音にストレートに情報を投げ返すというお互いに媚びへつらいのないコミュニケーション環境の創造へと企業の情報発信の本質がシフトしだした。つまりは生活者の本音には企業も本音で付き合うしかないのである。サニーマート伏石店の本音は四国一の鮮魚売場の創造と市場型環境の提案であった。その企業の本音をストレートに表現したらこうなった。サインの素材も布や木といった自然素材をできるだけ使用した。今までのシステムを放棄し、生活者とのコミュニケーションを優先させたホットなサイン計画であると自負している。

いの紙のあかり・TECSTCARTA シリーズ金賞受賞

加藤俊男　楠瀬浩二

窪田光章　片岡孝元

当会の会長加藤俊男氏（(有)イメージラボテクスト）デザインの照明器具、「いの紙のあかり・TECSTCARTA」が、長岡デザインフェア「信濃川テクノポリス国際デザインコンペティション'94」で金賞を受賞した。製品とともに出品した３枚のパネル制作スタッフは以下とおりです。／トータル・マネジメント・デザイナー：加藤俊男／グラッフィク・デザイナー：楠瀬浩二／フォトグラファー：窪田光章／印刷：カタオカ印刷／コピー：加藤俊男



わたしのデザインコンセプトは〈天地大戯場〉

(株)ノーマンド
西岡鶴夫

心の豊かさを求める時代といわれるけれど。では、その「心の豊かさ」とはなんだろう？
それはマチやムラの環境デザインや地域資源ともいえる＜お宝の発見＞新しい地域価値の開発といった、私が持ち前とする＜得意技からの発想＞をもう一度見直し、磨き、考えていこうではないかということです。
そこから見えてきたのが「天地大戯場」というコンセプト。そのことばのなかにわたしたちが見たのは、風が吹き、人は笑い、山は萌え、風は凪ぎ、河は流れるといった天と地のあいだで繰り返される日常の風景です。その日常を、いかに美しく嬉しくデザインしていくか。それがわたしたちの求める心の豊かさであり、希望であり、仕事なのです。

＜嬉しい＞を「発見」し「開発」し「デザイン」する

わたしのいう「嬉しい発見」とはマチやムラにまだまだ眠っている＜お宝＞や＜聖域＞を発見したり、そのお宝が持っている新しい価値を発掘すること。それは他の地域の人にとっても「嬉しい」や「驚き」に繋がります。その発見した＜お宝＞が、どんな地域の＜お国自慢＞となって地域を元気にしてくれるのか。それを考え、磨いていくのが「嬉しいの開発」です。そこにしかない、ここでしか味えない、他では真似ができないお国自慢であると思います。
海や山が喜ぶ大地のデザイン、人が喜ぶマチやムラのデザイン、知恵や熱意のデザイン、目に見えないものまでデザインしていくのが、私の「嬉しい」のデザインです。 それゆえの＜こだわり＞や＜情熱＞はマチやムラが元気になり、人の心を踊らせることができるのです。

もてなしの劇場都市「元気のある土佐」

土佐の＜お宝＞は、海や山であったり独特の風土気質や歴史であったりします。＜土佐人は人が人を酔わせる国なり＞と言うように、まず自分をもてなし人をもてなす正直さは、まさに土佐のもてなしの真髄といえます。山にいいこと、海にいいこと、人にいいこと、マチにいいこと。それぞれの地域で、そこでしか味えない「風土、風景、風味」を開発することです。
土佐の環境には、陽気な色が似合います。人と人とが、たがいに観客になったり、演技者になったり。天と地のあいだは人と人の舞台になり、元気のある劇場のような都市になるよう、ひとつ、ひとつ、考えてゆきたい私たちです。

Design News

平成６年度グッド・デザイン選定商品／施設

10月3日、通商産業省選定のグッド・デザイン商品及び施設が発表された。2,645点(844社)の応募商品の中から906点（389社）がＧマーク商品に選定された。

グッドデザイン大賞には堅牢で安全な車づくりで知られるスウェーデンのボルボ社が開発した普通乗用車「Volvo 840 Estate Series」に決定した。そのほか、部門賞、外国商品賞、福祉商品賞、景観賞など各賞を加えて91点が入賞した。本年度で38回目を迎えるＧマーク商品選定であるが、応募総数は前年比94点減少と昨年387点減少ほどではなかったが前年を下回った。

また、今年度から設けられた施設部門賞には(株)サンアクアトートーの水栓金具の組立て工場が受賞した。福岡県、北九州市、東陶機器（株）によってつくられた障害者雇用施設であるが、「企業と自治体が協力して障害者の雇用の場を福祉施設としてではなくあくまで自立した企業として創設し、ノーマライゼイション、バリアフリーという理念の実現を目指している点が高く評価された」と芦原太郎審査委員長が述べている。その他の選定施設では、（株）隈研吾建築都市設計事務所他のデザインによる高知県の＜椿原町地域交流施設＞や札幌の＜サッポロファクトリー＞山形県の＜ＪＲ赤湯駅＞など50点。

宮脇檀総合審査委員長は、「まだまだデザインの質を論じるレベルに至っていない中小企業とその商品分野がある。消費者にもデザインの要求度が薄い商品分野である」と、今後もＧマーク制度の必要性を強調している。

デザイン振興に関する調査研究 地域デザインセンター設立の策定―

民活法の改正によりデザインがその対象として明確化されたことにより、全国でデザインセンターの建設計画が進められている。しかし、その多くがハード面先行であるため、地域の独自性に立脚した機能を明確にするためには標準的モデルの策定が必要と考え、（財）日本産業デザイン振興会では、設立及び機能拡充計画の際に資料となる報告書をまとめた。

特に地域デザインセンターの第一の機能と考えられる「地域中小企業へのデザイン導入」の成功事例調査から、成功要因と人材特性を分析している。たとえば、「導入前の段階では、企業側がデザインに対する理解及び認識を高めておく必要がある。さらに、デザインに対する要請内容を明確にしておくことが重要」など。

信濃川テクノポリス 国際デザインコンペティション'94

10月21～23日、新潟県長岡市で開催の国際デザインフェア'94NAGAOKAのイベントのひとつであったコンペティションの入賞者の発表があった。応募総数615点（海外323点、40ヶ国）、入賞17点（海外9点）、入選57点(海外26点)と、信濃川テクノポリス地域の可能性を実証した成果となった。豊口協審査委員長は、「やがて訪れる高齢化社会に対して、どのような公共的諸施設の対応が必要なのか。民間ベースでは、市民として果たさなければならない責任と義務とは何かを問い正すものであった」と述べている。

グランプリは、鴨志田靖彦氏（ドレークデザイン）のスロープと階段とが融合したような設備の提案が受賞した。

事務局＝国際デザインフェア'９４NAGAOKA開催委員会（〒940新潟県長岡市幸町2-1-1　長岡市役所内 TEL0258-39-2246）

目次

巻頭GRAPHIC　元吉勝美　1

特集
第3回「土佐Hyper Meeting」
高知ブランドの全国発信
講師：長澤　昭　2

第4回「土佐Hyper Meeting」
クジラとの新しい関係を求めて
講師：元吉勝美　4

KIDPC Reports
浦川敏明／中島　悟
加藤俊男／楠瀬浩二／窪田光章／片岡孝元
西岡鶴男　6

デザインニュース　8

本誌はDTPソフトのQuarkXPressで制作しています。画像もMACで処理されダイレクトにフィルム出力し印刷されています。

編集後記

会員のみなさんの原稿とラフ画像は原則としてフロッピーでいただくということになっていました。しかし、今回、ほとんどのファイルが開かない状態でした。当り前と思われることが、まだまだ守られていないというのが実感です。従来印刷所に入稿していた時もいろいろな約束事があったはずです。デジタル化しても最低限のことを守らなければ、お互いに時間の浪費になります。次回からのトラブルを避けるため「入稿の手引」を作成するはめになってしまいました。（田中）

発行　高知県産業デザイン振興協議会
印刷　有限会社片岡印刷所
編集長　元吉勝美
編集委員　楠瀬浩二／田中幹男
片岡孝元／仲村　譲

高知県産業デザイン振興協議会

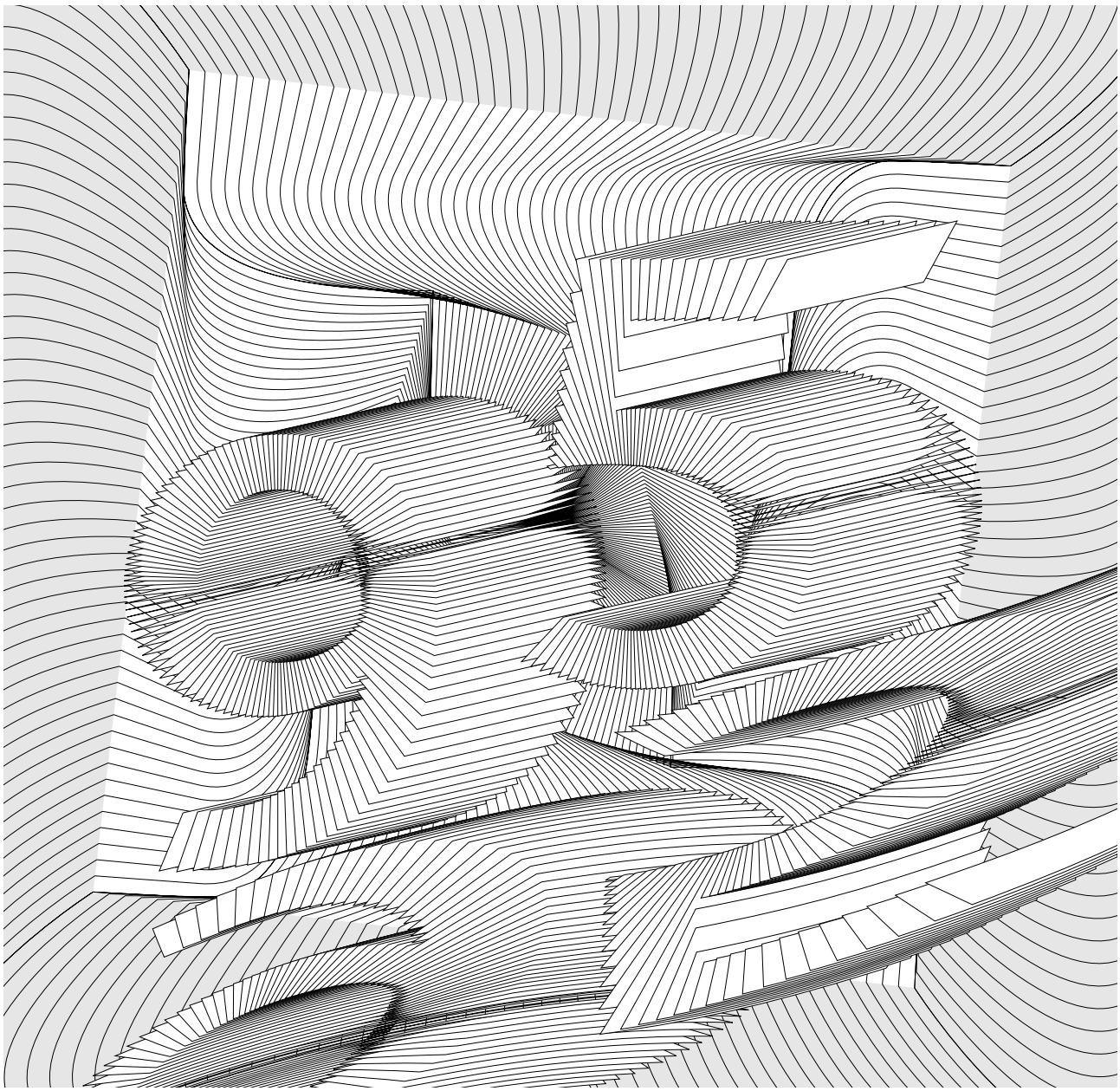
黒潮グラフィティ

1995.02.01 No.03

Kochi Industrial Design Promotion Council

特集　「土佐HyperMeeting」
　　第5回　講師：木村重来　高知市のコミュニティ計画
　　第6回　講師：田中幹男　編集のデジタル化

事務局：高知市布師田3992-3 〒781-51
高知県工業技術センター内
TEL0888-46-1111　FAX0888-45-9111



GRAPHIC　田中幹男

高知市のコミュニティ計画

文化や都市景観といった新たな時代ニーズへの対応は勿論のこと。
真の地方自治の定着を目指した住民参加システムを構築しようとする計画が高知市において進められている。
自由民権運動の伝統を継承・発展させようとする土佐人魂と呼べるものが根幹にあるようだ。　編集部

講師：木村　重来
高知市企画部地域計画室長

高知市のこれまでのまちづくりは、台風等自然災害との闘いであったと言っても過言ではない。浸水等の被害から、いかに市民の命と暮らしを守るかと言うことで、都市下水路を中心に防災対策を懸命に進めてきた。その結果、浸水対策は一定の目処がたち、現在では時間雨量７７ミリまでは対応できるまでになった。

また、昭和３０年代後半からの、本市への人口の集中に伴う都市施設の不足を解消するため、清掃施設や保育所、学校等の施設整備にも積極的に取り組んできた。

このように、都市の基礎的な条件整備が一定整った今日、今後の課題は、その遅れが強く指摘をされている都市の基盤整備を促進することと、文化や都市景観といった新たな時代ニーズへの対応、さらには真の地方自治の定着を目指したシステムづくり、言わば行政の質をいかに高めるかにあると言えよう。

本市が、現在、取り組みを進めているコミュニティ計画策定作業は、こうした現状を把握しつつ、本市の伝統的な所産である「市民自治」を継承・発展させ、ひいては我が国の憲法に定められた「地方自治の本旨」、つまり「団体自治」と「住民自治」の真の定着と拡充に向けた住民と行政の具体的でかつ、新たな実践であると考える。

1991年3月、高知市は21世紀にむけた都市像「自由と創造のふれあい都市・高知」を設定するとともに、具体的に実現するための課題と都市づくりの方向性を明らかにし、「高知市総合計画１９９０」を策定した。

その中で、地域住民の主体的な参加と創造により、それぞれの地域において土地利用のあり方や、生活環境の保全・整備の課題等を検討し、相互理解と連帯のもと、住民自治に基づく人間性豊かな心のふれあう地域社会の形成をめざしたコミュニティ計画策定を明らかにした。

同年12月から翌年の2月まで、市内23行政区ごとに地区懇談会を開催して今後の都市づくりの方向を示すと同時に、地域における具体的な課題について意見・要望を聞く作業を実施した。さらに日常各課に寄せられている地域ごとの課題等を集約し、市内を11に区分して、行政の側から捉えた目標や現況、課題、整備方針、事業計画等について「地区整備計画案」を作成した。そして、再度1993年４月から６月まで市内23行政区で地区懇談会を実施。「同計画案」に基づき地域ごとの整備の方向を示して一定の理解を得た。その後、第２次実施計画との調整、修正を行い、正式な地区整備計画を作成した。この整備計画は、今後コミュニティ計画策定作業をより効果的に進めるための住民・行政共有の資料として活用していくことになる。

また、柔軟で強力な執行体制と、そのための職員参加を具体的に促進する意味から、庁内の管理職を除く全職員を対象に公募を行い合計106名の「まちづくりパートナー」を編成、11地区それぞれの居住地を中心に担当することにした。同時に地域での具体的な活動に備え、約半年をかけ、市全体の都市計画事業をはじめとする諸事業・計画の研修や、担当地区の個性や課題の抽出作業を行ってきた。今後この「まちづくりパーナー」は、
(1)一住民として担当地区のまちづくりの話し合いへの参加　(2)全国的な

きむら　しげき
昭和21年　高知市生まれ
昭和39年　高知市役所
平成 3年　高知市企画課長
平成 5年　高知市企画部地域計画室長

事例や各種資料の収集、提供　(3) 行政との連絡・調整、など地域のまちづくりのパートナーとして活躍していくことになる。この他、地域での活動の参考資料として、市民の生活に視点をあて　(1)安全面(2)衛生面(3)利便性(4)快適性からの各種データ約60項目を図表化した「地区カルテ」を作成し活用していくことにした。

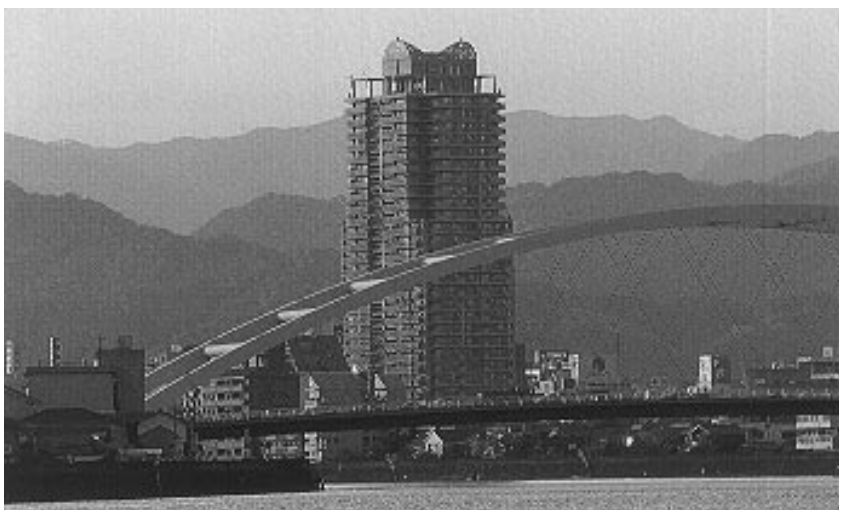
庁内における体制の整備や準備作業を進める一方で、地域の組織づくりを進める取り組みを実施してきた。具体的には、町内会・自治会等と調整理解を得て、地域毎に全戸に呼び掛けのチラシを配付し、幅広い層の参加による組織づくりを進めている。

現時点で、全市の約６割の地域で合計800名のみなさんの参加を得て組織づくりが完了し、「○○地区コミュニティ計画策定市民会議」として具体的なまちづくりについての活動が地域ごとに展開されている。なお、コミュニティの範囲については、種々の論議があるが、今までのところ、ほぼ小学校校区(37校区)程度のエリアとなっている。一日も早い全市の組織づくりをめざしていきたいと考えている。

コミュニティ計画策定にむけた具体的な活動については、それぞれの地域の市民会議での話し合いになるが、その基本としては次のような作業が必要となる。

まず、第一段階としては、地域の現状を知る作業。それぞれの地域の持つ個性や課題等を抽出することが必要と考えている。こうした作業をとおして会員間の連帯の醸成や、一人ひとりの想いや考えと、地域全体あるいは違った視点での考えとの比較により、その存在を認識し合うことがスタートとなると考える。なお、この段階でより幅広い意見を計画に反映するため、それぞれの地域に対してのアンケートの実施等についても検討をしていきたい。

つぎの段階では、こうして出された一人ひとりの地域に対する想いを整理するとともに、前述の地区整備計画、地区カルテ等を参考にしながら、地域個性の整備保全、課題の解決のための方策等についてお互いの意見を積極的に出し合い、検討を進めていくことが必要になる。当然、なかには相反する考え方が出てくることも想定されるが、互いに地区をより良くしていくためであり、単なる対立という構図に止まることなく、多少時間を要しても合意形成が可能となるよう努力していかなければならないと考える。



最後にはこうして検討なされた内容をまとめ、プランニングの作業へと入っていく。この際には事業化へのネックとなっているものは何か。それを解決するためには何をしなければならないか。さらには地域と行政との役割分担、重点項目の抽出等を行政との十分な調整を図りつつまとめあげていきたいと考えている。

以上のような考え方で1998年３月には、全市のコミュニティ計画策定をめざしたいと考えている。全国的にもあまり例のない取り組みであり、試行錯誤の繰り返しが予想される。しかし、参加された市民のみなさんの地域に対する情熱と行動力を見る時、実現の可能性を確信するものである。

勿論、まちづくりはそこに住む市民により永遠に営まれるものであり、今回の取り組みも一過程にすぎない。しかし、「住民自治とは」と言うことを視野に入れ、真の住民参加のシステムを構築していこうということからすれば、今回の取り組みは極めて意義深いものがあると考える。

専門家であるみなさんのご指導、ご協力を心からお願いしたい。

講師：田中幹男
サムタック　代表

編集のデジタル化

コンピュータの能力に着目し、マッキントッシュ（Macintosh－通称Mac）を導入したデザイン事務所は多い。しかし、その能力とソフトウエアを活かしきって仕事に利用しているデザイナーは少ないのではなかろうか。常に先端的なノウハウを身につけ、印刷所とタイアップした仕事をこなす田中氏には繊細なデザイナー気質が漂う。　　編集部

今年9月に創刊された本誌は、当初から全頁にわたってMacintoshを使って、編集デザインを行っている。当事務所でこうした編集デザインの仕事を全面的にMacで行うようになったのは、この数年のことに過ぎない。しかし当初は、Macを仕事に使おうとするだれもがくぐる試行錯誤の連続であった。

Mac（128k）がアメリカで登場したのは1984年1月、その翌年の秋にはEGWordを搭載した最初の日本語Mac（512k）が登場している。わたしが最初にMacに出会ったのはこの頃だった。今は当たり前のように思っていることだが、当時小さなモニター画面の隠れている部分にまで大きな紙面があることに驚かされてしまった。まだまだ日本語では使い物にならないMacだったとはいえ、今日のようなコンピュータ全盛時代を予感させるには充分な衝撃だった。

私はともかくコンピュータに慣れることが必要と考え、NECの98シリーズの最新最強機種であったVXを購入し、ソフトは「一太郎」だけで文字入力を開始したのである。本格的にMacの導入を検討し始めたのは90年、実際に導入に踏み切ったのは翌年の12月のことだった。というのも、そのころから「印刷」との連携が可能になりつつあったからだ。

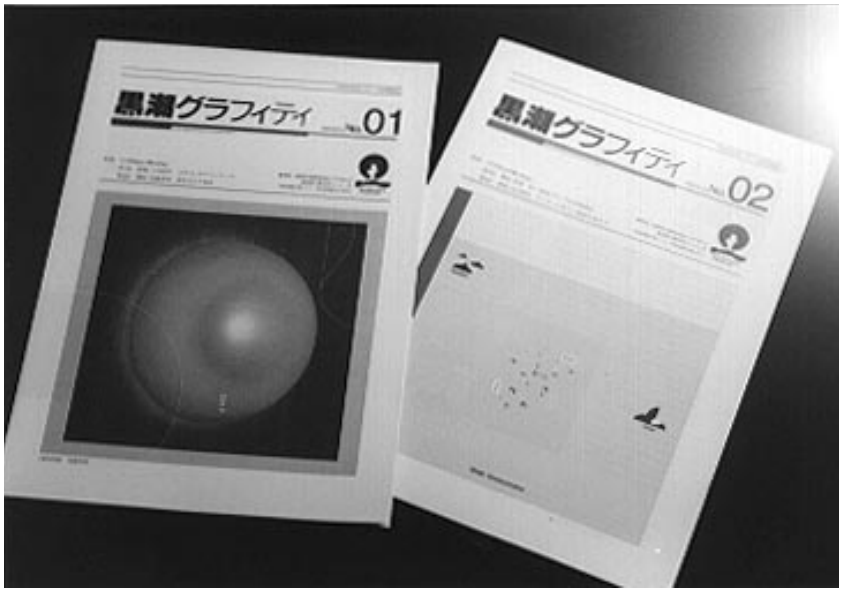
当時導入したシステムは現役で稼動中だが、その概要をひろいだすと本体–Macintosh IIci　Printer–QMS A4判　Display–21インチ（モノクロ）＆13インチ（カラー）　Scaner–シャープフラットヘッド（透過/反射）　MO–ヤノレオドライブ3.5インチ（128MB）

これにソフトウエアを数種付けて、550万円をリースで組んだ。当時としてはかなりの金額である。今日を確信していたから踏み切れたのだろう。しかし、導入直後から、高価なMacを抱えて苦難の日々がはじまった。マニュアルや参考書を片手に、ああでもない、こうでもない、結局うまくいかないことも多かった。
こんな試行錯誤を続けながら、一年半はペラ物をおもにデザインしてい

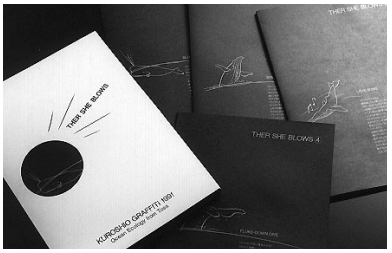
土佐山村PR誌／虫めがねで見る土佐山村

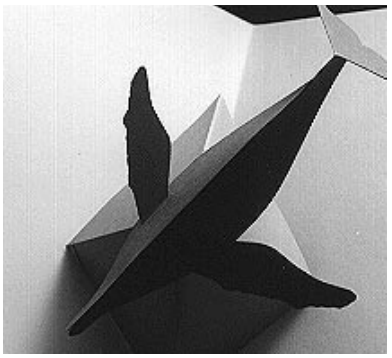
たなか　みきお
1938年　高知県生まれ
1984年　サムタック設立、現在にいたる。
1992年　高知県技術人材養成研修修了

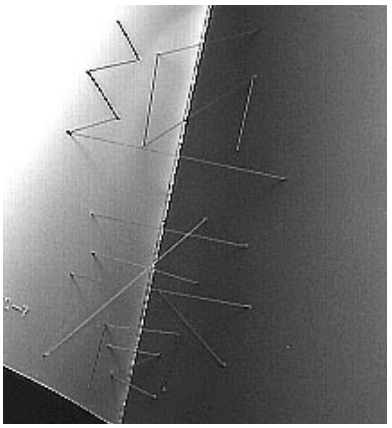
JAGDA　日本グラフィックデザイナー協会　会員
KIDPC　高知県デザイン振興協議会　会員



本誌







デザイン作業がデジタル化しても、ヒューマンな部分が残る3Dグラフィックに魅力を感じ、自主制作には積極的に取り入れている。

た。本格的にページレイアウトをはじめたのは93年の夏ごろからで、最初は土佐山村のＰＲ誌と小学生向けの「虫めがね‥」であった。

このふたつのデザインワークと編集作業ではIllustratorを使っている。それまでIllustratorを使い慣れていて、編集作業に適したDTPソフトがほこりをかぶっていたせいでもあったが、ページ物の編集には少々無理なところも多かった。表紙と数点の写真はラフ用としてスキャンして張り付けたが、ほとんどは当たりケイを入れて印画紙出力している。

その後の仕事でQuarkXPressの必要性を痛感し、あたふたと勉強を始めた。Macと同時に導入したDTPソフトは2年間眠っていたことになる。というのもQuarkXPressはどうにも難しく思えたからで、やはり必要に迫られないとなかなかできるものではない。

1994年の夏に創刊した当誌はQuarkXPressでの最初の仕事となった。印刷、製版などの分野においても、ようやくMacに対応できる素地ができつつある。高知県の印刷所のなかではいち早くMacを導入したカタオカ印刷との連携もスムースに行えた。当誌の編集は写真はラフ用（72dpi）としてスキャンし、最終的にはカタオカ印刷で高解像度のスマートスキャンで取り込んだデータと置換え、編集レイアウトデータとともにダイレクトにフィルム出力している。

ここまでくると、これまで写植版下にかかっていた費用や手間はすべて省かれ、外からのデータの互換入力さえスムースにできれば、かなりの省力化が図れるはず‥‥‥である。だが事はそれほど簡単ではない。これまで写植屋さんまかせであった入力や文字詰めなどの作業が増えてくる。それでも「写植のなくなる日」はすぐそこまできているように思える。むろんMacでの出力にも問題がないわけではない。例えば人名漢字などの外字やデータのフォーマット形式や通信システムの整備などである。こうした問題は、Macにかかわるすべての業界の素地が成熟していくことが先決であろうが、緒についたばかりのMacでのプリプレスへの認識を深めるためにも、お互いの情報交換の必要性を痛感している。

EGWord　ワープロソフト
DTP　デスクトップパブリッシング
Illustrator　ドロー系ソフト
QuarkXPress　ページレイアウトソフト

3D　Three Dimensional Graphics
空間、構造、仕掛けなどを使った
立体的なグラフィックデザイン

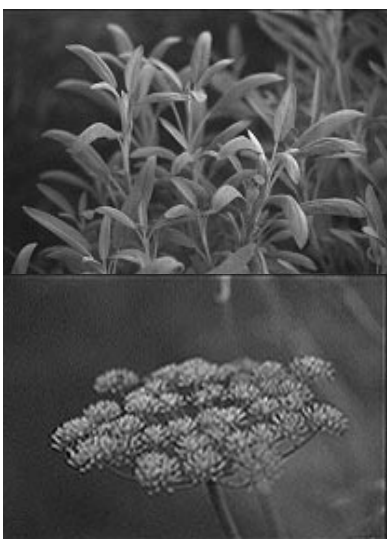
KIDPC Reports

Kochi Industrial Design Promotion Council

単調な生活環境から、少しだけ自主生活環境を創りだす方法として―― Herbs計画

(有)フォーマス
川添　寛

市場経済の変化と共に、消費者が生活者とか生活創造者とか呼ばれるようになって随分久しい。しかし、生活者と呼ばれるひとりでもある私やハーブを通じて知りえた仲間たちにとっては、生活をとりまく環境、すなわち生活材としてのモノやサービスが、かつての大量生産・大量消費の時代から確かに姿を変えてはいるものの、心の豊かさ、心の満足からするとどうも釈然としない。
姿かたちは変わっても、結局高度な技術によって品質管理され、あまりにも一定化がはかられたモノやサービスばかりが行儀良く整然とモザイク模様のように隙間もなく存在する。そんな生活環境からくる自分たちの欲求不満をはらすべく少しだけ自主生活環境を創りだす方法としてHerbs計画に取り組んでいます。



栽培事例　セイジとディルの花。セイジはソーセイジ、レバー、チーズ、ラム料理、イカ料理とディルはピクルス、ビネーガー、パン、クッキー、魚料理に大人の味を作り上げてくれます。

自主生活環境を創りだす方法

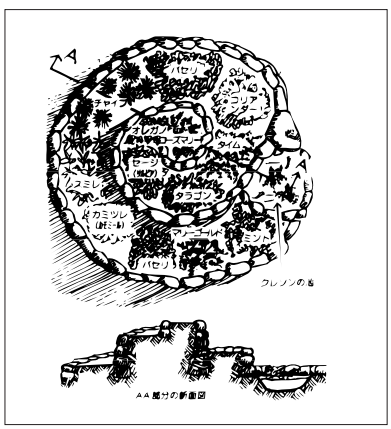
この計画はハーブの栽培からショップでのハーブ関連商品の販売までを行うなかで、各段階で積極的に自主参加をし、考え、行動し、実践していくことで自己の主張を具体化します。その際もっとも留意していることは自然のウェーブに調和し、生活していける、永続的なものを、自分たちの手でつくりだすことです。私の場合、ビル･モリソンのパーマカルチャーにおけるデザイン体系を参考にしている。実際の運営にあたっては、栽培加工部分と加工販売部分のフィールドに分け、名称をガーデン･マジョラムとポプリ香房とにして活動しています。こうした名称を考えたり、

ポプリ香房の看板。ハーブショップのディスプレーも含めて、コーディネーションは武藤南枝さん。

店内のコーナースナップ。調度類の一部は木星会の川村純史さんのデザイン。

マークやロゴタイプをどのようにするか、また商品の企画、パッケージングにいたるまで出来ると思われるところは、積極的に自分たちの手でやってしまう。そうすることで工業的でなく、研ぎ澄まされたプロフェッショナルな技でもなく、高純度でない混じりっけのあるモノづくり、生活環境づくりに取り組んでいます。

ガーデン･マジョラムのシンボルとロゴ。



庭先で出来るらせん状ハーブ園。一番下にはクレソンのための小さな池。

ハーブの利用は料理からスキン･ケアさらにアロマテラピーまで、香りを楽しみながら心も体も健康に。

高知機械工業団地のニックネームとシンボルマークを制定。

DESIGN STUDIO 301
守谷孝男

マインテック高知

高知機械工業団地のイメージアップと優秀な人材確保のためのニックネームのキーワードは、「心＝Mind（マインド）」と「高度な技術＝Technology（テクノロジー）」の融合です。
Mindは、
M：Machinery（機械）のM
in：Industrial（工業）のIn
d：Development（団地）のD
それらの頭文字を合成してMind＝心を表します。さらに、TechnologyのTecと組み合わせMintec＝マインテックという造語を作成し、「高知」をプラスして完成です。
これが、ニックネーム「マインテック高知」の制作プロセスです。

mintec高知
Kochi Machinery Industrial Development Cooperative Society

このシンボルマークのモチーフは、テクノロジーを支える「心」という文字です。
三つの円は、左からそれぞれ「協調・調和の心」「人にやさしい技術を育てる心」「一層の発展を目指す熱い心」を。中心のシャープな円弧は、「テクノロジー」を表現したものです。団地のダイナミックな飛躍が、この「心」に込められています。

MONTBLANC ルーフキャリア 総合カタログ

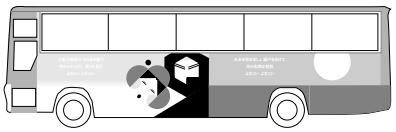
スタッフデザイン事務所
岡村　聰

MONTBLANC（モンブラン）はスウェーデンより土佐貿易（株）が直輸入、カー用品メーカー中発販売（名古屋）が全国販売するシステムルーフキャリアである。
国内で圧倒的なシェアを占める同じスウェーデン製THULEのファショナブルでカッコいいイメージに対し、後発ブランドの対抗戦略としてMONTBLANC製品の持つ道具としてのクォリティー、テイスト、製品づくりの思想的高さなどをアピール。「優れた道具は、シンプルで美しい」をコンセプトに、不必要な飾りを排除、単なる遊びのイメージ写真などは極力少なくし、商品の持つグレード感を全面に押し出す構成とした。
PHOTO：都築憲司
COPYWRITE：織田道生

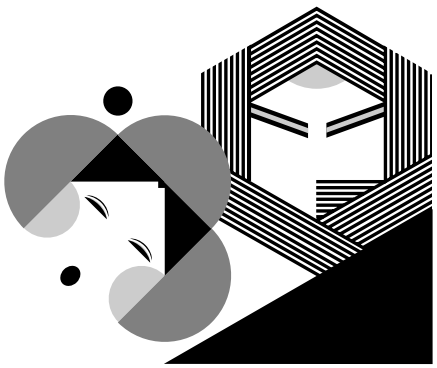
「車窓の文化展」ハイウェーバスボディーアート

（株）インクスポット
楠瀬浩二

'94年、福岡に於いて西鉄エージェンシー主催による高速バスボディーアートのデザイン展が開催された。
西鉄高速バス路線のはしる九州各県と高知、兵庫、大阪、京都のグラッフィクデザイナーが参加して、各地域の特色、あるいはシンボルを題材としてとらえ、B全判パネルで制作。



高知のシンボルは民謡「よさこい節」のなかで、言いつくされていると考え、「純信お馬」「月」「鯨」をモチーフに表現。例えば、純信とお馬の恋物語はゴシップの好きな現代人にも通じるストーリーであるし、月の名所の桂浜は自然豊かな高知の景観を代表している。太平洋で泳ぐ潮吹くクジラは、いまやホェールウォッチングで大人気である。
シンボルは、イメージや形が時代とともに変化しても、存在価値そのものは、昔も今も変わらないのである。



Design News

製造物責任法(PL法)
Product Liability
平成7年7月1日から施行

通称PL法は、製品事故の被害者保護の必要性と世界的な製品流通に対する製造業者などの責任に関する制度の国際的な流れとして昨年、第129国会において成立した。今後、製造物責任の問題を正しく理解し、適切な対応準備を図ることが企業の成長・発展の鍵とも言える。
その内容は、わずか6条と附則によるものであるが、その示唆するところは大きい。紙面の都合により、前半のみ転載する。条文の解釈や詳細については関係資料を参照下さい。

(目的)
第1条　この法律は、製造物の欠陥により人の生命、身体又は財産に係る被害が生じた場合における製造業者の損害賠償の責任について定めることにより、被害者の保護を図り、もって国民生活の安定向上と国民経済の健全な発展に寄与することを目的とする。
(定義)
第2条　この法律において「製造物」とは、製造又は加工された動産をいう。
2．この法律において「欠陥」とは、当該製造物の特性、その通常予見される使用形態、その製造業者等が当該製造物を引き渡した時期その他の当該製造物に係る事情を考慮して、当該製造物が通常有すべき安全性を欠いていることをいう。
3．この法律において「製造業者」とは、次のいずれかに該当する者をいう。
一．当該製造物を業として製造、加工又は輸入したもの（以下単に「製造業者」という。）
二．自ら当該製造物の製造業者として当該製造物にその氏名、商号、商標その他の表示（以下「氏名等の表示」という。）をした者又は当該製造物にその製造業者と誤認されるような氏名等の表示をした者
三．前号に掲げる者のほか、当該製造物の製造、加工、輸入又は販売に係る形態その他の事情からみて、当該製造物にその実質的な製造業者と認めることのできる氏名等の表示をした者
(製造物責任)
第3条　製造業者等は、その製造、加工、輸入又は前条第3項第2号若しくは第3号の氏名等の表示をした製造業物であって、その引き渡したものの欠陥により他人の生命、身体、又は財産を侵害したときは、これによって生じた損害を賠償する責めに任ずる。ただし、その損害が当該製造物についてのみ生じたときは、この限りではない。

JAGDA制作料金算定基準
第2回改丁版発行

(社)日本グラフィックデザイナー協会は、デザインの制作料金の考え方や計算方法などを示す「JAGDA制作料金算定基準」の第2回改丁版と「JAGDA制作料金早見表」をセットで販売している。
本書には、デザイン制作契約約款、制作料金概念規定はじめ、印刷媒体広告／エディトリアル／SP広告／パッケージ／CI・VIの5部門、71アイテムの料金表と各部門のシミュレーションが掲載されている。デザイナーとクライアント（発注依頼者）が協議するためのルールブックとしても活用できる。
セット価格＝8,000円
問合せ先＝(社)日本グラフィックデザイナー協会事務局（〒150東京都渋谷区神宮前2-27-14　JAGDAビル TEL03-3404-2557）

目次

巻頭GRAPHIC　田中幹男　1
特集
第5回「土佐Hyper Meeting」
高知市のコミュニティ計画
講師：木村重来　2
第6回「土佐Hyper Meeting」
編集のデジタル化
講師：田中幹男　4
KIDPC Reports
川添　寛／守谷孝男
岡村　聰／楠瀬浩二　6
デザインニュース　8

本誌はDTPソフトのQuarkXPressで制作しています。画像もMACで処理されダイレクトにフィルム出力し印刷されています。

編集後記

本誌は「会員原稿は、フロッピーで」が原則です。当然です。
時代はとっくに炊飯器である……等と言うのが恥ずかしいくらい炊飯器は炊飯道具として当然です。
今さら、ご飯はやっぱりマキで焚いて等というつもりはないが、デザインのデジタル化においてはまだまだ炊飯器の域に達していません。「だから、マキである。」ということは、料理をつくる奥さんの域にも達していない内容で仕事をしようとしている自分の姿に深く反省する必要がある。　（元吉）

発行　高知県産業デザイン振興協議会
印刷　有限会社片岡印刷所
編集長　元吉勝美
編集委員　楠瀬浩二／田中幹男
片岡孝元／仲村　譲

高知県産業デザイン振興協議会

黒潮グラフィティ

1997.10.15 No.04

Kochi Industrial Design Promotion Council

特集　「土佐HyperMeeting」

第16回　講師：窪田光章　プロカメラマンとデジタル時代

第18回　講師：守谷孝男　楽しくスポーツするために

事務局：高知市布師田3992-3 〒781-51
高知県工業技術センター内
TEL0888-46-1111　FAX0888-45-9111

Kochi Industrial Design Promotion Council

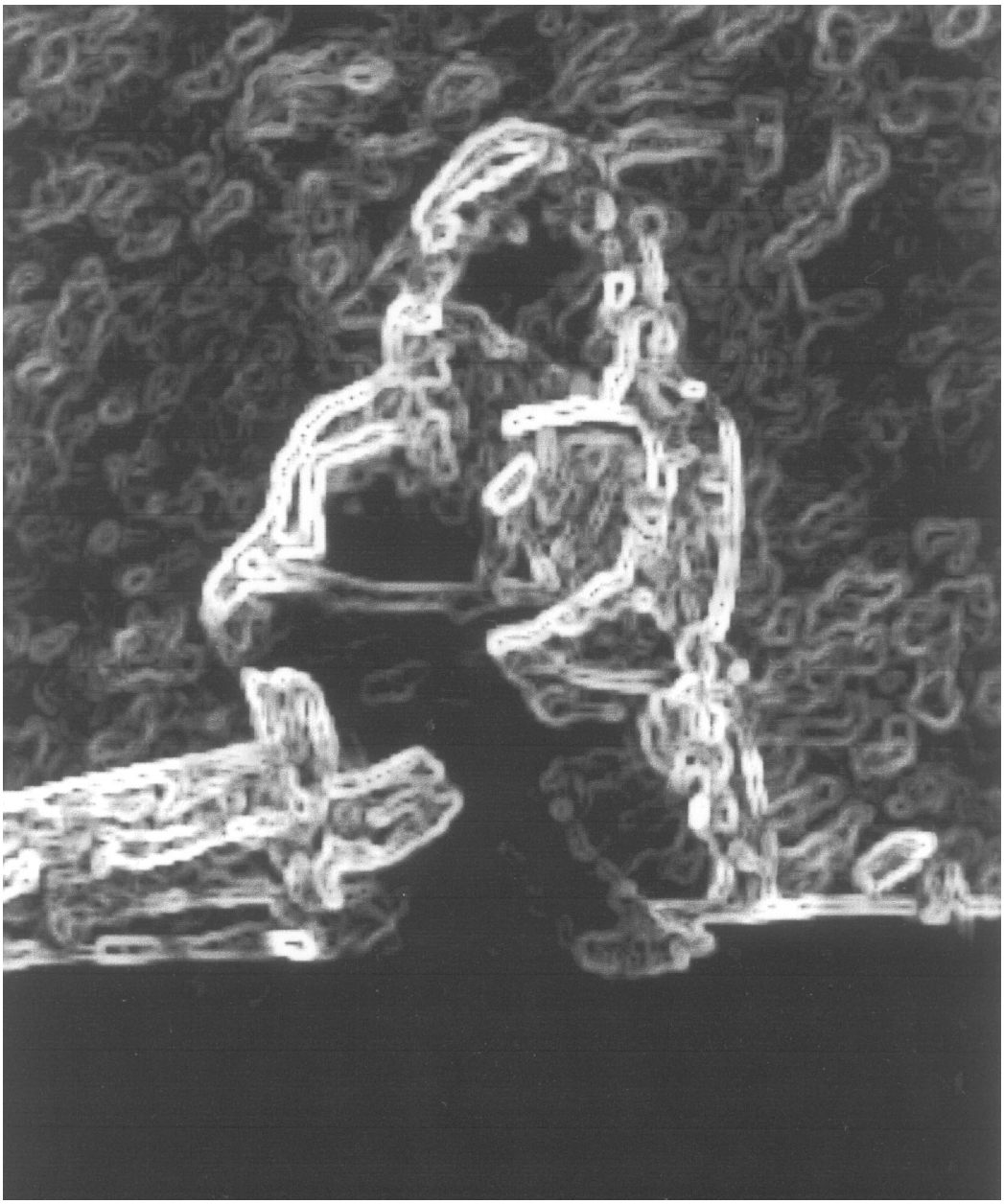


PHOTO　窪田光章

プロカメラマンとデジタル時代

講師：窪田光章
窪田写真事務所　代表

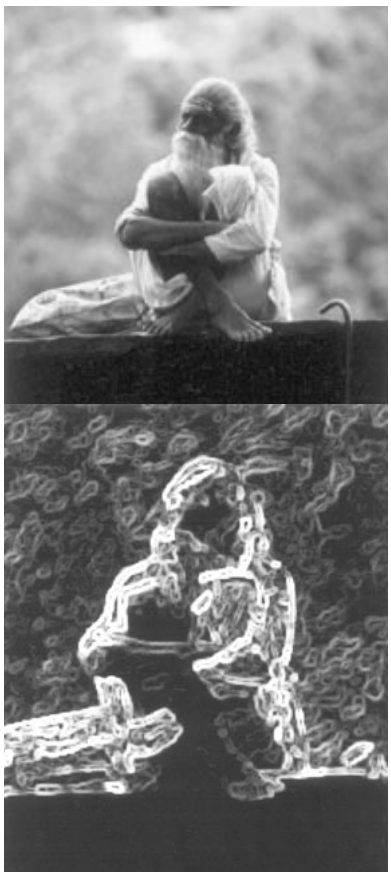
商業写真家の窪田氏は３次元CAD研修も受講した積極派。
しかし、デジタル技術の世界は、早く取組んだ人がより早く成功するとは限らないと言う。デジタル写真と適度な距離を保ち、冷静にエコロジー問題まで見据えて「デジタルで何をしたいのか」と問いかける。写真家にとってもデジタル技術は避けて通れない道、不安や問題はあるが展望もある。　編集部

今まさに、150年続いた銀塩写真に新たにデジタル写真が加わり写真の世界が大きく変わろうとしています。

私も1992年にMacintohを導入し、デジタルによる画像処理の研究をして参りました。その頃はポジフィルムやプリントをスキャナーで読み取りMacでレタッチするものでした。

パソコンのレベル、使用ソフトのレベル、それらを使う私の未熟さ、そこに大きなストレスを感ぜずにはいられませんでした。しかしながら、自分で暗室作業をしなくなって久しい私にとって、久しぶりに楽しい暗室作業、いや明室作業でした。

その中でデジタルの優位点また問題点を感じました。たとえばデジタル写真を「写真とは真実を写すもの」だと定義すると、それに修整を加えたものがはたして写真と呼べるでしょうか。確かに銀塩写真の表現にもいろんな特殊表現法があります。しかし、それは150年という長い歴史の中で出てきたものです。デジタル写真においては、パソコンの画像処理能力、使用ソフトの能力、またオペレーターの能力等で多少の差が有るにしても今までの銀塩写真の比ではありません。



P―1

また、フォトグラファー自身が画像処理しない場合、その成果物のデジタル写真はフォトグラファーの著作物なのかオペレーターの著作物なのかとか、コンピュターで写真を自由に画像処理できればフォトグラファーの培ってきた写真技術は不要になってしまうのではないかとか、それに加えパソコ周辺機器の充実により、ますますフォトグラファーにとり写真の世界が大きく変わり、うかうかしていると時代に取り残され、フォトグラファーそのものの存在が危うくなるのではないかという不安も感じます。

P―2

くぼた　みつあき
1946年　高知市生まれ
1967年　日本写真専門学校卒
1975年　窪田写真事務所設立、現在に至る

P-1　ヒンズー教の寺院でのカラープリントから、その時に感じた老人のイメージに画像処理してみました。

P-2　Mac導入初期の作品です。6×6ポジフィルム2点をドラムスキャナから取りこ0み画像処理したものです。簡単な合成とレタッチですが、大変時間がかかりうんざりしました。またカラーマネジメントに問題を感じました。

P—3

P—4

事実、簡単なチラシやあまり解像度を必要としない新聞原稿などでは、安価なデジタルカメラで撮影、パソコンで画像処理し印刷所に持ち込むまでになってきています。それらはなにもフォトグラファーの手によらなくても十分使用に耐えられるまでになってきています。さりとて我々フォトグラファーとしては、低解像度の安価なデジタルカメラやスキャナを仕事に使用する訳には参りません。どうしても銀塩写真に近い高解像度を求めます。

ここ数年、デジタルカメラメーカー数社のカメラをテストして参りましたが、いざ購入となるとまだまだ高価で、しかも改良の周期が早く購入時期の選択が問題です。銀塩用カメラならいつの時代の物でもそれなりの使用に耐えられます。

５年前、私がMac を導入したときはMac本体にMO（128MB)、CD-ROMドライブ、プリンタ、それに数本のソフトを付けて確か400万円近くもかかったものでした。その当時、私自身としては慎重に選択したつもりでした。しかし、ものの数ヵ月でたちまち古くなり、機種そのものも無くなり、当時100万円位いしたMacも現在では10万円もしないでしょう。

またデジタルの世界では、今までのように新しい世界に早く入り込んだ人がより早く成功するとも思えません。

なぜなら、導入した時点からソフトもハードも進化し、早く導入した人が苦心惨憺努力した技術が新しいソフトになればいとも簡単に出来ることがよくあります。

「何をしたいのか、何をするのか、何がいつ必要か」を明確にしてデジタル化を決めないと大変なことになります。

それに加えカラーマネージメントの問題、銀塩の場合は少なくともポジフィルムという共通の判断材料がありました。そんな簡単ことでも、カラーマッチング用にハードとソフトが必要になます。

それと画像処理をフォトグラファーがした場合のギャランテーをどこが負担するべきか。直接お客さんに商品を手渡す営業写真館は問題ないでしょうが、我々コマーシャルフォトグラファーにおいては、クライアントの要求度も高く銀塩と同等のクオリテーが求められます。それに応じるにはデジタル器材がまだまだ高価過ぎます。この不況の中、クライアントに転化も、フォトグラファーが吸収する訳にも参りません。

しかしながら、写真のデジタル化の波は早く大きく、今まさにそこまで迫ってきています。これまで個々で活躍し器材を所有していたフォトグラファーも共同で器材の導入やレタッチオペレーターの養成等をはかる時期ではないかと思われます。

何にも増してデジタル処理では現像を必要とせず、塩化銀が出ない点でエコロジーの面からも大切なことでしょう。

P-3　6×6ポジフィルムをフォトCD入力し画像処理してPICTROGRAPHY でプリントアウトしたものです。この方法が銀塩とそん色ない安定をみました。

P-4　DCS465デジタルカメラで撮影しPICTROGRAPHYでプリントアウトしたものです。カラーマネジメントにすこし問題を感じますがA3ぐらいなら問題なく使用できそうです。

楽しくスポーツするために

十年前のグラフィックデザイナーは、スポーツの後では手が震えてロットリングが使えず仕事にならなかったものである。デジタル化の恩恵によって、スポーツをもっと楽しむことが出来るようになった。
ストレッチやケガについての「常識のうそ」等、目からウロコが落ちる話で楽しませてくれる。　編集部

講師：守谷　孝男
デザインスタジオ　301

高知市教育委員会の主催による高知市スポーツ推進指導員養成教室を受講したのが平成7年の5月からでした。

養成教室の趣旨は、「社会体育推進の要である指導者の養成は、今日特に指導体制確立の重要な課題である。ここで実技・基礎理論を習得し、幅広い指導能力を有し、社会的にも高い評価を受けられる指導者の養成を図り、社会体育の普及充実を目指すことを目的とする。」である。

講習時間170時間、平成7年5月から平成8年3月まで毎週2時間の基礎理論の学習と実技、年6回の集中・合宿研修をはじめ、地区の体育会事業の企画運営や実技指導50時間等を行って、やっと修了するハードな集中養成教室である。

この教室を遅刻、欠席することなく皆勤賞で修了式を迎え、第8期生の高知市スポーツ推進指導員認定328番となりました。

養成教室のカリキュラムは次のようなものです。

社会体育概論、スポーツ心理学、スポーツ経営学、スポーツ生理学、スポーツ医学、スポーツ指導論、地域におけるスポーツ行政、スポーツ史等の基礎理論。そして、水泳、バレーボール、ソフトバレーボール、サッカー、バドミントン、バウンドテニス、綱引き、ターゲットバードゴルフ、ゲートボール、ペタンク、卓球、グラウンドゴルフ、テニス、カヌー、オリエンテーリング、エアロビクス、ロープワーク、救急処置と救急救助法、ウォーミングアップ・クーリングダウン（ストレッチング）また、特別講習としてカバディやコンピュータトレーニングマシンによるサーキットトレーニング等の実技と指導理論です。カリキュラムの一つ一つが新鮮で、有意義な講義で、学生時代の体育の授業で学んだ「常識？」が見事に崩壊しました。

以来、誰もが持っているであろう「間違いだらけの常識？」を修正してあげなければと、指導に励んでいる今日この頃です。

運動後の整理運動──後ろに引いた足のふくらはぎをストレッチできます。

健康とスポーツ

スポーツの語源はラテン語の「デスポルト=遊び」といった意味。現在でも生涯スポーツは「遊び」と考えられています。クリエーション（創造）の仕事から少しだけ時間をさいて行う、レ・クリエーション（再・創造）と考え、スポーツを健康的に楽しみましょう。出来れば1回2時間位のスポーツを週2回から3回、自分のペースで楽しめる生涯スポーツを見つけましょう。

もりたに　たかお
JAGDA 日本グラフィックデザイナー協会 会員
WHALCO [ホエルコ」会員

高知市スポーツ推進指導員
日本バレーボール協会公認ソフトバレーボール
リーダー（認定No.H45-00222）
高知県スポーツリーダーバンク登録指導員

秦体育会常任理事
秦体育会ソフトバレーボール部・監督
2002年高知国体推進リーダー　2002人／1

準備運動後動──簡単なボール遊びで楽しむ。

私は、ソフトバレーボールを生涯スポーツとしてとらえ、昨年、日本バレーボール協会公認ソフトバレーボールリーダーの講習を受け、認定されました。

ソフトバレーボールは、バレーボールよりボールが大きく、軽く、柔らかいためパスが簡単にしかも安全にできます。バドミントンコートの広さでネットの高さ2m、4人制ローテーションのためボールに触れる回数が多く、等しくプレー出来るチャンスがあります。性別、混合、年齢別、そして、体力・経験・技能などレベルに応じて基礎的なゲームから複雑な応用技術や各種作戦・戦術を駆使した高度なゲームまで、多様な楽しみ方が工夫できます。1988年、6人制ルールをベースに考案されたこのソフトバレーボールは驚異的な普及の広がりをみせ、現在、全国でのチーム数も10万を超えるといわれています。

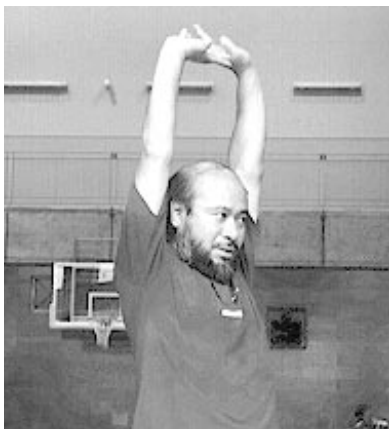
スポーツを通じて交流することは心身ともにリフレッシュされ、健康で心を豊かにする重要な手段です。健康で楽しくスポーツするためには、ケガの予防と筋肉痛を防ぐことが大切です。

日ごろスポーツをしていない人が、急に運動すると、翌日、あるいは二、三日後に遅発性の筋肉痛を起こします。筋肉の発達は、運動による筋肉組織の細部の部分的損傷からの筋繊維再生の過程にあります。この時、痛みを生じるのです。さらに、運動の代謝産物の乳酸がたまり、血液が酸性に傾くことも、筋肉の痛みに関係すると考えられています。

運動後のストレッチングによって筋温を高め血流を良くし充分な酸素を送ることで乳酸を除去することが出来ます。

ストレッチングとは、筋肉を伸ばす行為のことですが、やり方には二通りあります。反動や弾みをつけて行う動的ストレッチと反動や弾みをつけない静的ストレッチがあります。準備運動や整理運動の際に行うストレッチは必ず静的ストレッチで行います。動的ストレッチでは筋肉や関節に急な負担をかけ思わぬケガを招く恐れがあるからです。

ストレッチングの一番の効果は筋肉及び周辺の血液の循環を促進させることです。筋肉を伸ばした状態で静止させるということは、その筋肉の血流を一時的に悪くさせる行為なのです。15秒〜20秒静止後、筋肉の緊張が弛緩された時、血液は筋肉内へ多く流れ込もうとします。これによって筋温を高め、筋肉及び関節の可動域を増大させる効果を得るわけです。だから、ストレッチの際、反動をつけて行えば血流を一時的に悪くできないため効果は上がりません。よく、運動の前にラジオ体操をやっているのを見かけますが、運動前の儀式であって、準備運動にはなっておりません。ラジオ体操で準備運動を行ったと錯覚することも危険です。また、ストレッチは柔軟性も高められますが、柔軟体操ではありません。筋肉の伸び方には個人差があります。人のまねや指導者の見本通りではなく、自分自身の筋肉がじわじわと伸ばされていると感じたところで静止させれば良くて、痛みを感じるところまでは伸ばす必要はありません。張り切り過ぎて、ケガをしてしまってはどうしようもありません。



準備運動──両腕を頭の上に伸し組み合わせます。体の側面の筋肉を伸ばします。

準備運動では、さらに、神経回路の円滑化、精神的なバランスをとることもまた、脈拍数を上げることも大切です。(220 − 年令=最大脈拍数。その75%程度を保つ運動が最適な運動量)40才〜50才台では120〜135／分が目やすです。

以上、筋肉と運動のしくみを良く知ったうえで、楽しく健康で気持ちがリフレッシュする生涯スポーツをやりましょう。

ケガの救急処置(R･I･C･E)「ライス」を覚えておきましょう。
R=Rest=患部を動かさない、安静にする
I=Ice=患部を氷で冷やす
C=Compression=患部を圧迫する
E=Elevation=患部を心臓より高く上げる

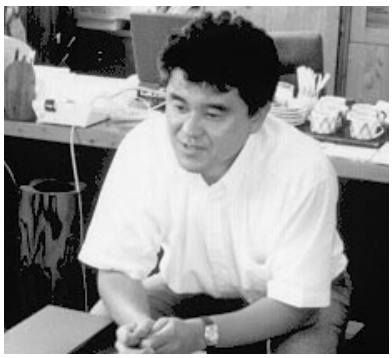
KIDPC Reports
Kochi Industrial Design Promotion Council

「土佐のモノ・コト・ココロ商品開発事業」

技術探訪
木材技術編―溝渕林産興業株式会社

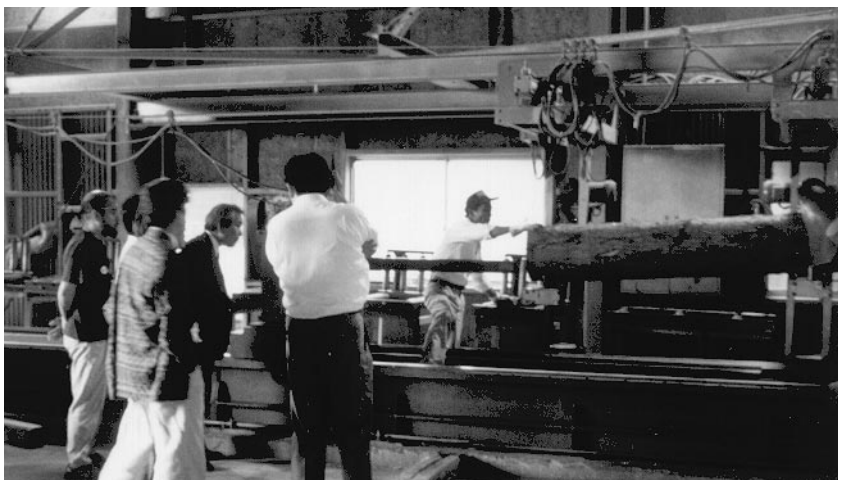
1987年12月22日、高知県在住の17名のデザイナーによって、高知県産業デザイン振興協議会は発足した。当協議会は、あらゆるデザイン活動をとうして、高知県の産業の発展と文化の向上に寄与するとともに、よりよい自然と産業と人の関係を作りだすことを目的としている。
地域総合デザイン開発事業「鰹プロジェクト」から９年、当協議会設立10年目の今年は、初心に帰って会員が新たな開発テーマを発見し、事業化の方策を検討することが課題となった。
３度の「黒潮グラフィティ事業」でデザイン啓蒙活動の時代は終わりを告げ、3号までの「黒潮グラフィティ発行事業」でデジタル編集印刷技術の試行に一先ず区切りがついたことと、継続している土佐HyperMeetingから得られた知識やネットワークを活かすデザイン開発の必要性が認識されたためでもある。

さて、全国どこにでも自然はある。地域産業だって、独自文化だって、あまりにも身近にありすぎるために見逃しがちな日常生活の中にあふれている。それに気付くか気付かないかはココロのありようの問題である。地域産業の活性化と言うとき、あまりにも目先の利益ばかり考えていないだろうか。あるいは、金銭価値に置き換えないとその価値を理解できないようになってはいないだろうか。うまい水や空気の価値を、おもわず笑い出してしまう楽しみの価値を、ただ金銭価値に置き換えないで受け入れる生活感覚をもっと重視してもいいのではないだろうか。
そうは言っても、とりあえず毎日の生活である。それならば、楽しい思いをしながら、ワクワクするようなモノを創ってみようではないか。それが回りまわって地域産業や地域文化の活性化に繋がれば幸いであると。そのためには、一度、土佐の足元の伝統技術や先端技術、稀少技術を確認して、そこに新しい価値をデザイン開発してみようと、『土佐のモノ・コト・ココロ商品デザイン開発事業』と名付け、デザイナー自身の勉強を目的とした技術探訪が始まった。それは、土佐から世界に通用するモノ・コト・ココロを開発してみようという意気込みの現れでもある。

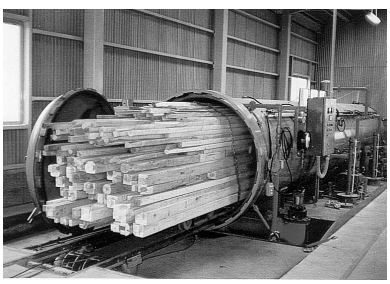


溝渕浩一　社長

第一回は、南国市の溝渕林産興業株式会社（溝渕浩一社長）。木材の丸棒加工技術と加圧注入による防腐・防蟻処理技術にすぐれ、ログハウスや木橋、木製遊具、道路擁護壁化粧パネルなど修景施設の製造施工販売を行っており、今後とも地域景観改善において期待される会社であった。



南国工場において、丸棒成型機の加工工程で社長から説明を受ける



木材の加圧注入処理工程。

太陽熱温水器
住宅設備機器販売会社の
コーポレートシンボル

DESIGN STUDIO 301

守谷孝男

JES日本環境システムという会社のコーポレートシンボル制作レポート

この会社は、太陽熱温水器や電気温水器、イオン整水器や床下換気扇など住宅設備機器販売会社です。
環境にやさしい「水」をキーワードに以下のシンボルを制作しました。

●コーポレートシンボル

JES
JAPAN ENVIRONMENTAL SYSTEM INC.

●社名

有限会社 日本環境システム
JAPAN ENVIRONMENTAL SYSTEM INC.

コーポレートシンボルカラー
C100%＋M60%～0%
タイプフェイスカラー
BL70%

●縮小タイプ

JES JES JES JES

横山隆一先生は
龍馬やピカソのような
ひとである

アドランド株式会社

元吉勝美

その昔、高知が土佐と呼ばれていた頃から定評のある土佐人気質も生活の都市化とともに少しづつ希薄になってきたようです。

YMC
横山隆一記念館設立委員会
Yokoyama-Ryuichi Museum Committee

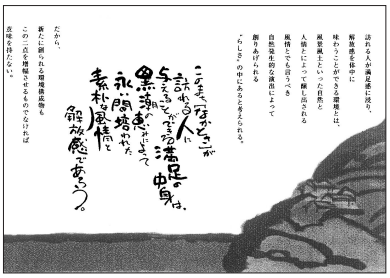
しかし、「漫画」の中にはしっかりと生きづいているといえます。
さて、横山隆一記念館（仮称）は、2001年（平成13）、高知市が九反田に計画中の複合文化施設の中に建設されます。
「横山隆一記念館」（仮称）への想いは、時代と共に成長していく記念館でありたいものです。
単に、漫画「フクちゃん」の作者の記念館というのではなく、高知の新しいシンボルとして、また日本の漫画のふるさととして、さらには世界のユーモアの交流拠点でありたい。
そうなることができれば、観光的な新名所にもなれるし、おみやげも売れるし、漫画学会も開けるし、街とともに賑わいの中で時代を越えて生き続けていく記念館となることができるのではないでしょうか。
横山隆一先生は、坂本龍馬やピカソのように年とともに輝いてくる人だと思います。その価値を早く地元で評価して、価値にふさわしい内容でありたいものです。
横山隆一記念館設立委員会 事務局長

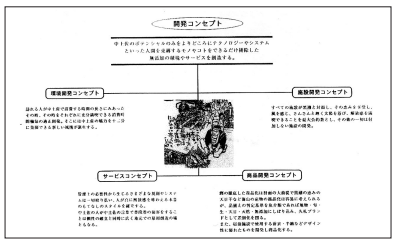
中土佐町
黒潮本陣
コンセプトワーク

株式会社アル

浦川敏明

中土佐町の素朴な風情と解放感を”無添加のもてなし”として、黒潮本陣の開発コンセプトに立案、展開しました。





プロデュース（株）ユーエスケー
ディレクション（株）アル［旧・（株）ポリセント］
空間デザイン（株）ノーマンド空間研究所
グラフィックデザイン　アドゴーデザイン事務所

Design News

北の風南の風クラフト展'97

10月12日～10月19日、旭川市において、高知の風クラフト協会と旭川工芸デザイン協会による交流展示会が開催された。

交流の始まりは、旭川市に家具の買い付けに行ったカーサシモダの水田社長が早見賢二氏の作品に注目したことから、93年春に南国市内で「北国のクラフト展」が始まり、94年から高知県在住作家との合同展となった。今回初めて旭川市開催となり、高知の作家が「南の風クラフト協会」を発足させ準備を進めてきた。

北の風16名、南の風35名による、木工、陶芸、金工、珊瑚、染織、ガラス、竹芸、和紙、七宝、漆芸、皮革などの作品が展示された。

また、12日には、旭川市内のホテルにおいて、橋本高知県知事や浜田南国市長のゲスト講演やパネルディスカッションによるクラフトフォーラム、会期中には高知作家のホームステイによる技術交流等が行われた。

会場　上川倉庫デザインギャラリー
　　北海道旭川市宮下通り

事務局＝北の風南の風クラフト展97実行委員会（〒070旭川市豊岡13条4丁目 文佳堂内 TEL 0166-34-7918）

鎌倉泰仙

平成９年度グッド・デザイン選定商品／施設

10月1日、通商産業省承認のグッド・デザイン商品及び施設の選定証授与式が行われた。2,524点(894社)の応募商品の中から842点（412社）がGマーク商品に選定された。

グッドデザイン大賞には、金沢市が大正末期から昭和初期に建造された６棟の紡績工場倉庫群を取得し、文化施設として再開発した「金沢市民芸術村」に決定した。多くの文化施設が発表の場であるのに対し、この施設は、練習、体験といった発表以前の創作、創造活動や人材育成活動に重点が置かれており、経済活動のみならず文化的価値の増大を図ろうとしている点や利用者本位の運営体制が高く評価された。

そのほか、金賞にはアップルコンピュータの「twentieth anniversary Macintosh」など16点、テーマ賞10点、外国商品賞、特別賞、ロングライフ賞など114点が入賞した。

川上元美総合審査委員長によると、「生産財、住宅部材、部品等のメーカーが目立ってきている。下請け的な開発から自主開発、製品化を行ってきたメーカーで、しかも外部デザイナーとの共同開発が増加している。」とGマーク制度の果たす役割と定義概念構築のためのフォーラムの場を設ける必要性を求めている。

日本グラフィックデザイナー協会

JAGDA中・四国会員デザイン展'97 開催のお知らせ

10月16日～26日／サンパークあじす中・四国の会員のポスター・パッケージ作品を一堂に展示。

高知県産業デザイン振興協議会の会員も3名参加します。（参加者―中島悟／守谷孝男／森沢博之／寺尾歌子／田中幹大）

会場　山口県吉敷郡阿知須町4825-1（TEL0836-65-0001）

会員名簿

加藤俊男　イメージラボ　テクスト
泉　順一　泉事務所
守谷孝男　デザインスタジオ301
元吉勝美　アドランド
田中幹大　サムタック
窪田光章　窪田写真事務所
狩野信児　カリノ美工
森山雄司　プラザデザイン事務所
浦川敏明　アル
岡村　聰　スタッフ・デザイン事務所
川添　寛　フォーマス
中島　悟　アド・ゴーデザイン事務所
片岡孝元　カタオカ印刷
酒井洋介　オフィス・ジャム
田中光男　ミツオデザイン・デベロップメント
池田あけみ　池田あけみ文案工房

顧問　坂本昌三郎
　(学) 高知学園専務理事

事務局　仲村　譲
　高知県工業技術センター

▼▼▼▼▼▼▼インターネットHP情報▼▼▼▼▼▼▼

日本産業デザイン振興会や国際デザイン交流協会はじめ国内の主要デザイン団体の活動情報を入手するには、下記のURLが役立ちます。

http : // www. jidpo.or. jp / japandesign /

また、日本デザイン学会は次のとおりです。

http : // wwwsoc . nacsis . ac. jp / jssd /

編集後記

「土佐のモノ・コト・ココロ商品開発調査事業」が6月から始まった。

商品開発するのは、依頼があって初めてその機会が生じるのだが、我々デザイナーは機会がない限り、現場でモノがどのように生産されているのか知らな過ぎた。

デザイナーは、もっと製品化されるためのいろいろな過程を見たり、話を伺ったりすることによって、これまでとは違った視野からモノ見つめ直すことが必要ではないかと痛感した。（田中）

発行　高知県産業デザイン振興協議会
印刷　有限会社片岡印刷所
編集長　元吉勝美
編集委員　田中幹大 片岡孝元 仲村　譲

黒潮グラフィティ

1998.02.10 No.05

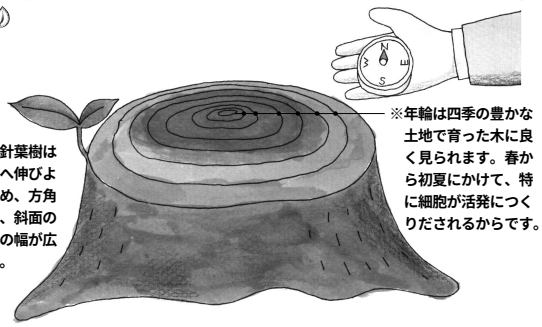
Kochi Industrial Design Promotion Council

特集　「土佐HyperMeeting」
　　第19回　講師：吉田穂積　環境デザイン考
　　第20回　講師：片岡孝元　PDFの概要と使用例

事務局：高知市布師田3992-3 〒781-5101
高知県工業技術センター内
TEL0888-46-1111　FAX0888-45-9111

Kochi Industrial Design Promotion Council

木の年輪を見て方角がわかりますか？



※斜面にある針葉樹は真っすぐ上へ伸びようとするため、方角に関係なく、斜面の下側で年輪の幅が広くなります。

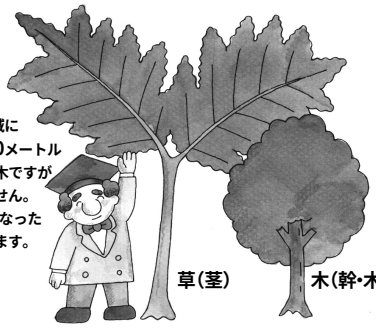
※年輪は四季の豊かな土地で育った木に良く見られます。春から初夏にかけて、特に細胞が活発につくりだされるからです。

A 方角は、わかりません。根から吸収された養分は細い管を伝わって上昇する時、また、葉で作られた糖が下降する時、木の外側をラセン状に移動します。だから、南北の差は出来ないのです。

地球上でいちばん大きな生き物は？

A 樹木です。アメリカ・カリフォルニア州のセコイアという木は、樹高が120メートルもあります。また、メキシコにあるメキシコラクウショウは、根元の周囲が48メートルもあります。

草も成長すれば「木」になれるの？



※木生シダと呼ばれる亜熱帯地域に生育する植物は、茎の高さが20メートルにも達します。一見、立派な樹木ですが解剖学的には「木」とはいえません。いうならば、とてつもなく高くなった「草」であるということがいえます。

A 草は草、木は木です。木の幹は、毎年成長をして太くなりますが草はだいたい一年で枯れ、年ごとに太くなることはありません。太く高く成長しても茎は茎です。草が木になることはありません。

神経のない「木」も痛みがわかる？

※植物には、「痛み」を伝えることができるものもあるようです。
やさしく、大切にしよう。

A 植物の組織、特に葉は昆虫や病原菌の感染など常に危険と向き合っています。傷害のシグナルを他の器官や組織に伝えて、いち早く防御体制を整えるシステムがあると考えられています。

GraphicとQ&Aプランニング　守谷孝男

講師：吉田　穂積
スカルプチャーハウス代表
彫刻家／環境デザイナー

環境デザイン考

今をパブリックアート淘汰の時代と捉える吉田穂積氏の視点の向こうには、都市型開発にとどまらず、土木建造物によって作られる景観や国造りレベルの環境デザインがある。デザイナーが計画段階から積極的に取り組み、質についても厳しいチェック機能を持ち、後生に誇れるものを残そうとする意欲が強く感じられた。　編集部

終戦後の復興から高度経済成長期にかけて、後回しにされていた生活環境も昭和46年（1971）環境庁の発足、昭和47年（1972）自然環境保全法の制定、昭和48年（1973）都市緑地保全法の制定と経済の成長安定と共に鉄道・道路網の整備、上下水道・都市ガス等生活環境の充実のみならず、都市環境の質的向上、潤いのある都市景観の向上を図り、公共的空間（広場／公園／緑道等）の整備、公共施設（公民館／公会堂／図書館／体育館／教育厚生施設等）の建設が、加速度的に進んだ。

昭和50年代に入って、所得水準が欧米諸国並みとなってからは、市民生活の重心が経済（物）から文化（ゆとり）へと移行してゆき、文化ホール・音楽ホール・美術館等の文化施設の建築が一つのブームとなる。又、高度経済成長の過程で起きた極度の中央集権化の見直しが叫ばれ、地方の復権と人間性の回復が謳われ「文化」と「地方」は時代のキーワードとなり、地方自治体は文化行政にかかわる事業計画を盛んに作成していく。事例として昭和53年（1978）神奈川県の「文化のための1%システム事業」、兵庫県の「生活文化をつくるための1%システム事業」、東京都の「文化デザイン事業」等が上げらる。

静岡・藤波「藤波住宅」（大林組）

静岡・藤波「藤波住宅」（大林組）

よしだ　ほづみ
1949年　福岡県に生まれる
1974年　東京造形大学彫刻家卒業
1979～93年　国土建設学院建設学部講師
1981～90年　文化女子大学彫刻研究室講師

＜日本美術家連盟会員＞
＜日本サイン学会会員＞
＜基礎造形学会会員＞
＜女子美術短期大学非常勤講師＞

宇都宮「豊郷台」

終戦後の復興から高度経済成長期にかけて、後回しにされていた生活環境も昭和46年(1971)環境庁の発足、昭和47年(1972)自然環境保全法の制定、昭和48年(1973)都市緑地保全法の制定と経済の成長安定と共に鉄道・道路網の整備、上下水道・都市ガス等生活環境の充実のみならず、都市環境の質的向上、潤いのある都市景観の向上を図り、公共的空間(広場／公園／緑道等)の整備、公共施設(公民館／公会堂／図書館／体育館／教育厚生施設等)の建設が、加速度的に進んだ。

昭和50年代に入って、所得水準が欧米諸国並みとなってからは、市民生活の重心が経済(物)から文化(ゆとり)へと移行してゆき、文化ホール・音楽ホール・美術館等の文化施設の建築が一つのブームとなる。又、高度経済成長の過程で起きた極度の中央集権化の見直しが叫ばれ、地方の復権と人間性の回復が謳われ「文化」と「地方」は時代のキーワードとなり、地方自治体は文化行政にかかわる事業計画を盛んに作成していく。事例として昭和53年(1978)神奈川県の「文化のための1%システム事業」、兵庫県の「生活文化をつくるための1%システム事業」、東京都の「文化デザイン事業」等が上げらる。

これらの事業を通して、公共の建物や公園・通り等に数多くのモニュメントが設置され、公園や通りに置かれるストリートファニチャーや外路燈や案内表示などもデザインクォリティの高いものとなっていった。

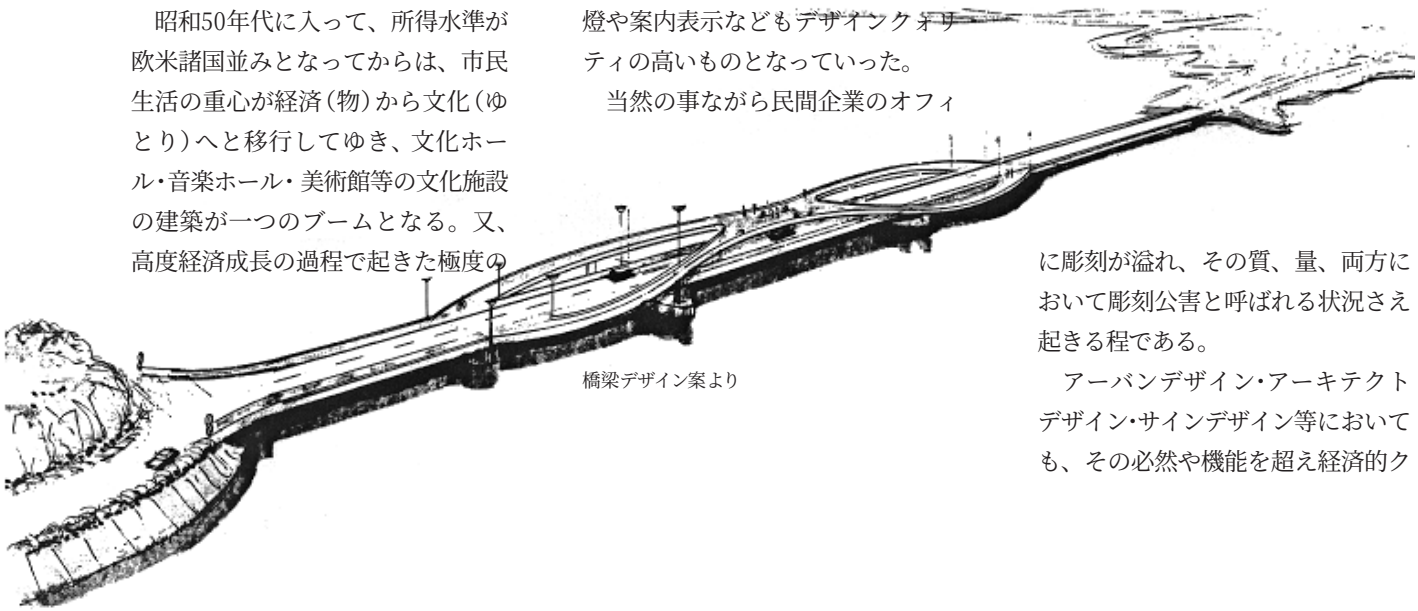
当然の事ながら民間企業のオフィスビルやマンションの建設からニュータウンや新都市開発にいたるまで、あらゆる開発事業においても同様にパブリックアートや環境デザインは切り離せないものとなっていった。

急激に膨張し始めた経済と共に環境デザイン(アーバンデザイン・ランドスケープデザイン・アーキテクトデザイン・サインデザイン等)へのニーズは大都市部にとどまらず、地方都市から市町村部に至るまで拡大してゆき多くのデザイナーやこれまで社会経済とは縁遠かったアーティスト達にまで仕事をもたらした。

又これらのデザイナーやアーティスト達と行政、企業を結ぶコーディネート会社の設立も相次いだ。

パブリックアートにおいては、
昭和35年(1960)宇部市に始まり、
昭和43年(1968)神戸市、
昭和48年(1973)長野市、
昭和51年(1976)八王子市、
昭和52年(1977)仙台市……と数え上げればきりがない程市町村レベルまでの「彫刻のある街づくり」が10年20年単位で続き、所によっては町中に彫刻が溢れ、その質、量、両方において彫刻公害と呼ばれる状況さえ起きる程である。

アーバンデザイン・アーキテクトデザイン・サインデザイン等においても、その必然や機能を超え経済的ク



橋梁デザイン案より

講師：片岡　孝元
(有)カタオカ印刷所

PDFの概要と使用例

高知県のデザイン業界、印刷業界のリーダー的存在である。業界に先駆けてデジタル化をこころみ、指導、相談にのる片岡さんの的確なアドバイスはデザイナーにとっても、心強い味方である。高性能印刷を追及する一方で、オンデマンド印刷にもいち早く取り組み実践している。業界を問わずデジタルデータの利用を模索する片岡さんの、今後がますます期待される。　　編集部

私がアクロバット（PDF）と出会ったのが1995年の秋ぐらいだったと思います。当時私の会社では1988年から始めたマッキントッシュコンピュータによる印刷のデジタル化が1994年に導入した機器により完成の域に達しており、今まで印刷で制作されたデジタルデータをもっと他のメディアに利用できないものかと考えていた時期でした。

従来は印刷のデジタルデータは印刷しか使用できず、インターネットやCD-ROM等のコンテンツを制作するには全部作りなおさなければならない状態でした。何か良いやり方はないかと色々な雑誌を読んだり、デジタルの講習会や研究会にも参加していましたがどれも印刷のデジタルデータをそのまま使えるものはありませんでした。

ある時雑誌でPDFを知り、調べていくと私達印刷業界・デザイン業界では世界のスタンダードとなっているアドビ社のイラストレータで制作したレイアウト・文字（後に日本語は不完全と知りましたが）がそのままで電子ファイル化でき、さらに圧縮そしてページとページをつないでゆくリンクまでできることを知り、これは絶対日本でも標準化すると、ひとり興奮したものでした。この日から私のPDF布教（いばら）の道が始まった訳です。

当時アクロバットはまだ英語版しかなく、日本語が使えない、マニュアルはアドビに聞いてもわからない等かなり苦労の連続でした。

1996年から小学校の地図教材の仕事をお手伝いさせていただく中で、高知市の地図の上にボタンを付け、動画やビデオ映像や拡大画面につないでゆければおもしろいですよ、と提案させていただいたのが次に紹介させていただく住居表示台帳の電子ファイル化です。

当時はまだ全国でもPDFで制作したデータがほとんど無く、色々試行錯誤しながら97年春に最初のファイルを納入できたことは、本当に幸運だったと思っております。特に東京のMMI（PDF制作会社）を始めユニットの広田さんの著書にはずいぶんと参考にさせていただき有り難く思っております。

ではここで当社の制作しましたPDFの冊子の概要と高知市役所様で採用いただきました実用例をご紹介させていただきます。（すべてPDFで制作）

Adobe Acrobatとは

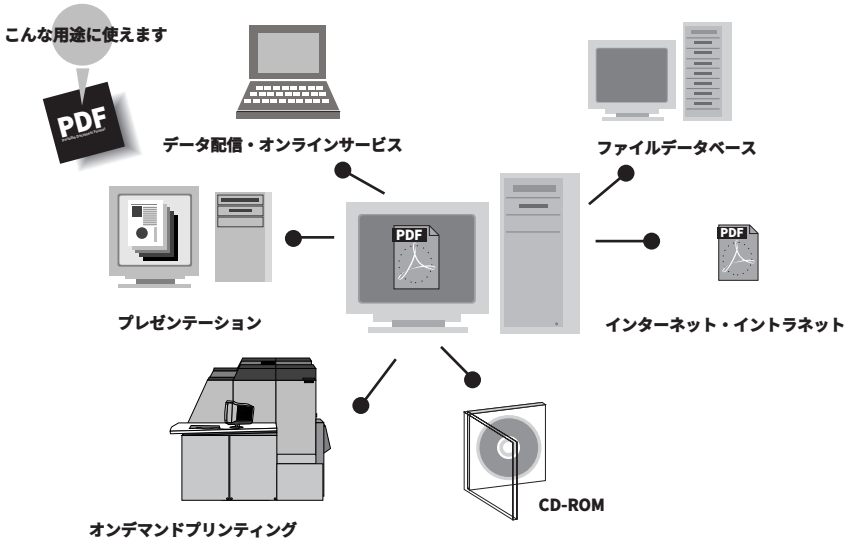
PDF(Portable Document Format)ファイル
アドビシステムズが提唱し一般に
　公開されたファイルフォーマット
Post Script技術を基本にしたフォーマット
クロスプラットフォームのファイル形式
HTMLとともにインターネットの標準ファイル
高圧縮率：約1/10〜1/40

だからこんなに便利です。

PDFファイルは機種やOSを選びません。
（Windows/Macintosh/Unixに対応）
紙と同じく、誰でも、どこでも、いつでも同じイメージで見られます。リンクボタンやビデオを組み込み、紙ではできないマルチメディア機能を実現します。
全世界無料配布のReaderで画面表示や印刷ができます。
画面表示も美しく、拡大縮小が画面でできます。
印刷のイメージがそのままファイルになっているのでプリントアウトはオリジナルと変わらない美しさです。
電子ファイルだから、配布・コピーが簡単、再利用が可能で劣化がありません。
文字検索ができます。

かたおか　たかもと
1952年　　高知県生まれ
高知県産業デザイン振興協議会　会員
高知県印刷工業組合　副理事長

「日本語PDF+Acrobat入門」（株）ユニット　広田健一郎著
企画制作 スペック　定価2,000円



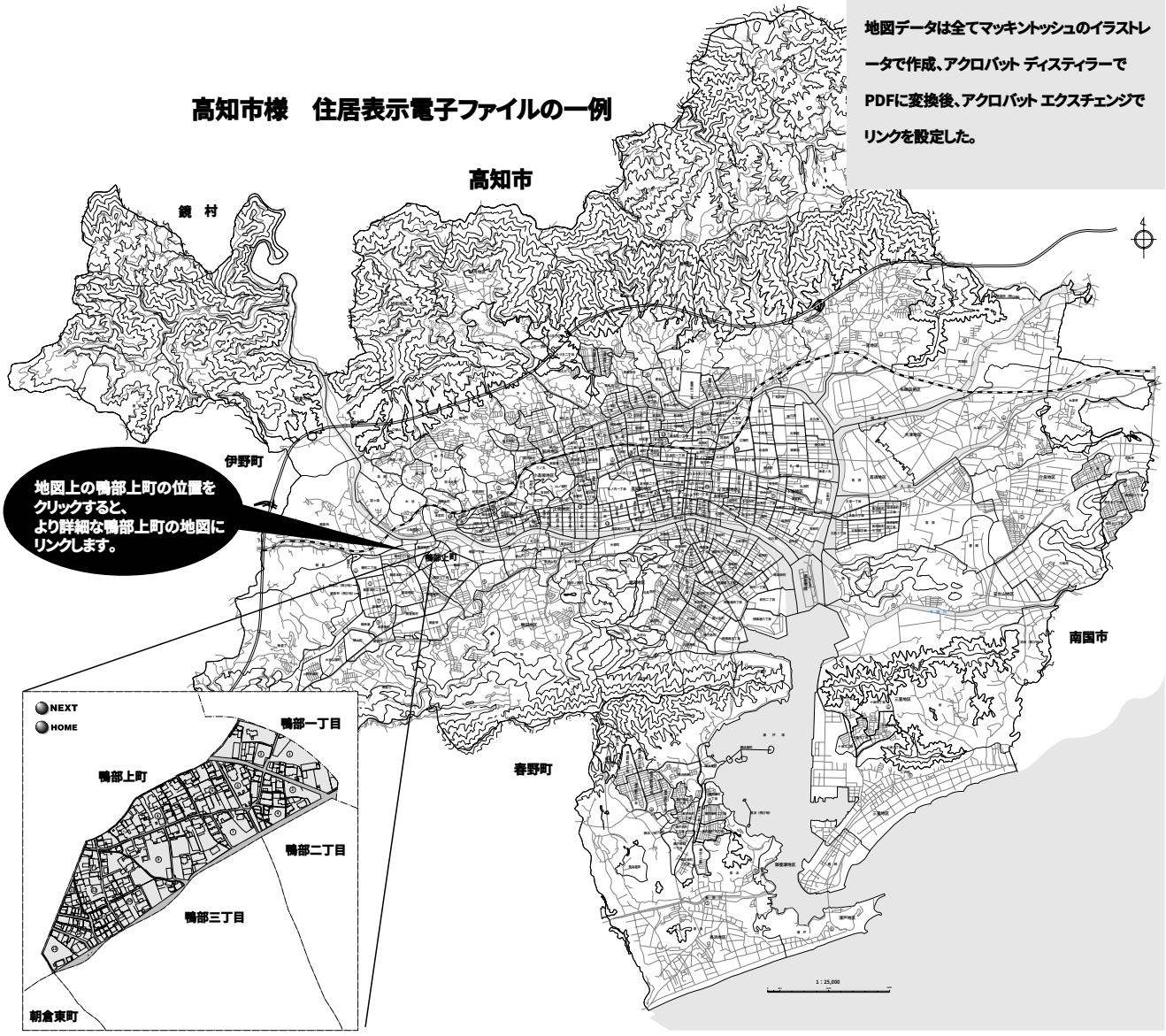
こんなメリットがあります

PDF

資料の印刷・配布コストの削減
制作・配布・流通に関する生産性向上
お客様に対するサービスレベル向上
タイムリーな情報発信、配布が可能

高知市様　住居表示電子ファイルの一例

地図データは全てマッキントッシュのイラストレータで作成、アクロバット ディスティラーでPDFに変換後、アクロバット エクスチェンジでリンクを設定した。

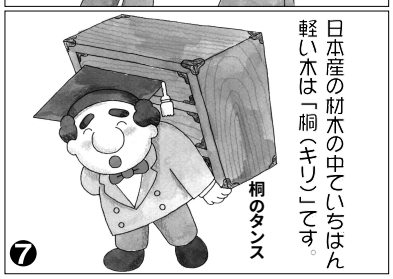


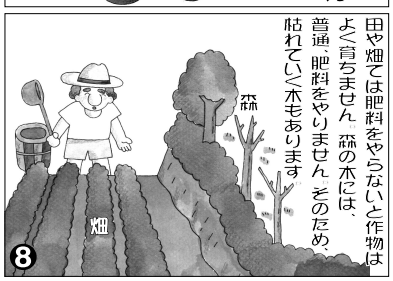
こうちテクノピア
ニッポン高度紙工業(株)
出展企画

DESIGN　STUDIO　301
守谷孝男

自然や森林が大切であることは誰もが知っています。自然や森林がなぜそれほどに大切であるのか深く考えたことがあったでしょうか。

平成9年10月24日より3日間、ぢばさんセンターで開催された、こうちテクノピア97に出展した、ニッポン高度紙工業（株）のテーマは「自然から学ぼう！自然学習館=森林編」。森林のメカニズムや役割、森と友達になる方法や森の守り方、楽しみ方などを面白く、解りやすく、学んでいただけるブースを考えました。
その中から、おもしろ○×クイズ紙芝居・森林編の一部を紹介します。
○×で解答して、楽しんでください。





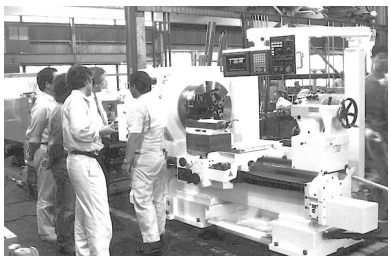
解答
1=×高知県のシンボルの木はヤナセスギです。やまももの木は徳島県のシンボルの木で、高知県では県の花に制定されています。
2=×平成元年からもうけられました。それまでは「天皇誕生日」でした。
3=○「光合成の昼寝」と呼ばれています。日中、光が強くなると葉の水分がより多く蒸発します。これを未然に防ぐように気孔を閉じ気味にします。
4=×作り話。ve･neerという英語があります。
5=×クマと出合ったら、まず静かに落ち着いて立ち止まることが肝心です。クマが近づいてくるようならば荷物や上着をクマとの間に置きクマの注意をそらしてから安全な距離まで退避しましょう。
6=○風によって幹の先や枝が折れ、木を弱らせます。木が高くなるには強い根が必要ですが限界があり、風によって倒されます。
7=○軽い木は桐です。ちなみに、日本でいちばん重い木は「ウバメガシ」です。「桐」はその3分の1の軽さです。
8=×枯れ葉や枯れ枝が季節によって落ちて、虫や微生物によって分解され養分となって再び木の根に吸収されていく「養分循環」が行なわれています。だから肥料をやらなくても木は育ちます。

「土佐のモノ・コト・ココロ
商品開発事業」

技術探訪
鋳造技術編―川竹合金鋳造所
工作機械編―ブルーライン工業

昨年６月から、高知県内の先端技術や伝統技術、稀少技術を再確認して、そこに新しいデザイン価値開発を試みようと、『土佐のモノ・コト・ココロ商品デザイン開発事業』と名付け、デザイナー自身の勉強を目的とした技術探訪を開始した。
第２回は、消失模型鋳造法について、関西大学の山本康雄研究員による技術解説を受けた後、すでに高知市内で８年以上の製造実績のある川竹合金鋳造所（川竹節志社長）を訪ね、高精度・高品位鋳造を目指しての抱負をお聞きした。デザイナーとの交流により、複雑なバルブやパイプとは違った景観鋳物の開発も期待できる。

第３回は、高知県工作機械工業協同組合の中核をなす株式会社ブルーライン工業（真辺正春社長）。旋盤専門メーカーとして創立以来、現在は米60%・東南アジア10%、国内30%の出荷比率。ＮＣと普通旋盤の中間ともいえる高機能旋盤「かんたん君」や630mmの大口径ＣＮＣ旋盤など、マシン性能と安全性や操作性への取り組みについて伺った。

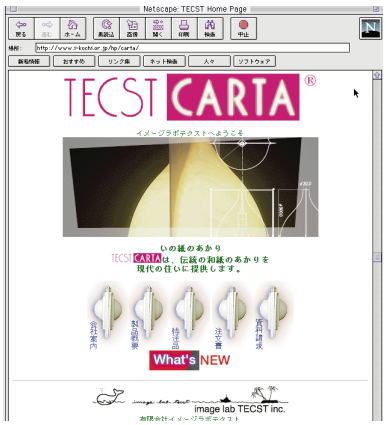


KIDPC Reports

Kochi Industrial Design Promotion Council

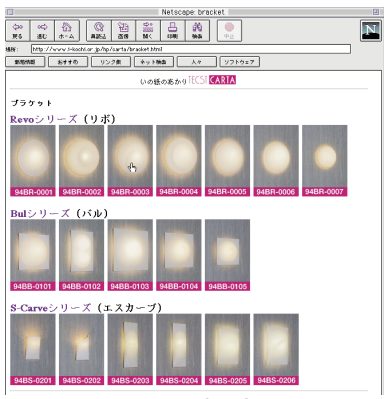
インターネット活用の現状

イメージラボ テクスト
加藤俊男



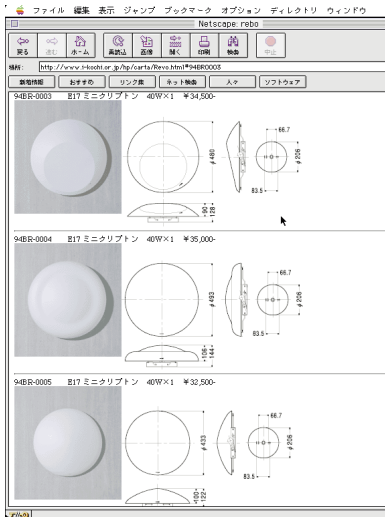
front page

製品概要目次



製品概要／bracket

個々の製品の画像イメージを配置し、ディテールを詳しく知りたい要望に応えるためのpageを別途設け、各製品の画像レベルでそれぞれのディテール・インフォメーションにリンクさせた。



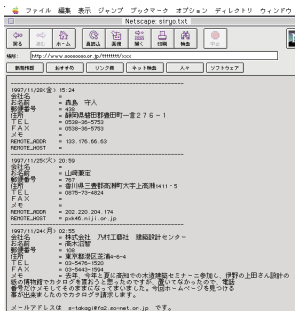
ディテール・インフォメーション
形状、定格、価格等を案内。

資料請求フォーム

注文書フォーム

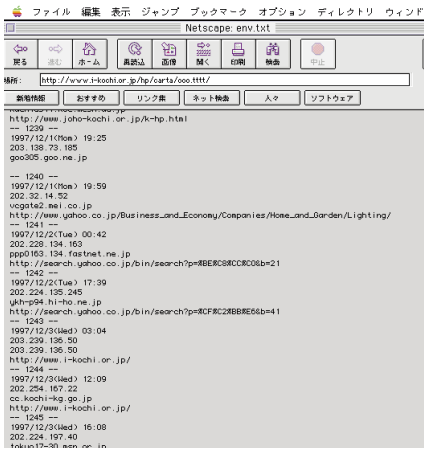
左上の資料請求用紙に氏名、住所等のデータを明記し、請求内容を当社に送信。
右上の注文書も同様に、記載内容を満たし当社に送信。

資料請求、注文状況の管理



資料請求画面

資料請求や注文の受信状況を把握するために、毎日、午前午後、各1回はアクセスしている。
資料請求の受信内容は、最新データを先頭に配置するレイアウトにして管理の容易さを図った。
データは当社構内ネットワーク上FileServerの問い合わせ管理DataBaseに取り込み、配送用ラベルを打ち出し等、日常の管理レベルに加工。なお、昨年初からのネットによる資料請求件数は36件であった。その他の媒体を介しての資料請求総数が800件であり、約1割がネットからの資料請求であった。
また、ネットからの資料請求は個人請求が多く、設計事務所等の実務レベルで活用されるのはまだまだこれからのようである。



log

上は当社HPにアクセスしてきた経路等のlog情報を確認、管理する画面。
昨年正月に立ち上げたHPであるが、12月初旬で1,246件のアクセス件数であり、100件/月の割合でアクセスを受けたことになる。
多い少ないは別にして、HP立ち上げに際し、当社のアドレスをいかにインフォーメーションするかを問題とした。
そのために名刺への刷り込みと郵送物や商品の雑誌広告のクレジットに併記徹底を義務づけた。
分析ではYAHOO経路のアクセスが多く、YAHOOへの登録はお薦めである。

Design News

高知県知的所有権アドバイザー制度のお知らせ

高知県では、平成９年10月より「知的所有権アドバイザー制度」を実施している。

現在、県内外の弁理士など３名の特許情報に関する専門家がアドバイザーに認定されており、主として県内企業の特許に関する相談に対応してくれるが、実用新案や意匠・商標を含めた工業所有権全般を対象とした相談が可能。

相談希望者は、工業振興課へ電話連絡の後、相談の日時・場所の通知を受け、２時間以内を目安として無料で相談を受けることができる。

（12月は９件実施）

また、必要性によっては企業内での現地アドバイスや特許などに関する社内研修も引き受けてくれる。

申込先：商工労働部工業振興課

TEL0888-23-9750

土佐刃物の伝統的クラフトデザイン高度化事業

高知県土佐刃物連合協同組合（西山武理事長）では、平成９年８月より国のデザイン高度化事業を活用して新商品開発を進めている。

開発の発端は「文化のみえるまちづくりプラン」に提案された百敲刃物・縁切包丁などであった。しかし、デザイン契約を結んだ（株）オープンハウス代表でインダストリアルデザイナーの益田文和氏と土佐山田町の地元生産者による２回のワークショップを経て、「土佐打ち刃物の新たなブランドデザイン開発案」などが提案された。すでに、2月26日から東京で開催される全国伝統的工芸品まつりへの成果品の展示求評を目指して最終調整段階に入っている。

高知国体ガイドブックの制作

2002年（平成14年）高知国体（第57回国民体育大会）の開催まであと４年余りとなり、国体準備局では指名コンペ方式により規定書体およびガイドブックの制作を高知市内のデザイン事務所、（有）イーストクリエイツ（高橋和夫社長）に委託した。一般公募のシンボルマークが２月２日に正式決定した後、マスコットなどとともに使用方法が公開されることになっている。

あなたの意見を商品開発に!! Design InterNet Factory

高知県工業技術センターでは、現在デザインインターネット開発推進協議会を組織して、デザイン開発にインターネットを利用する公開実験を行っている。

これは、電子技術者とは違った観点で平成11年3月末までに、公開形式で一般ユーザーや様々な立場の人達に提案や意見を募集して、試作・求評・商品開発を行ない企業化をすすめようとするもの。また、その実現のためのステージであるデザインインターネットファクトリーの開発と普及が本質的開発目標の一つとなっている。

具体的成果物としては、高知の地域イメージ資産（四万十川など）と素材、歴史、技術、人材を生かした「土佐の宴」を全国のホームパーティに広げる器具やシステム開発を想定している。ただし、素材や技術は高知県内に限定せず、広く国内外に求め展開していくことになっている。

詳しくは、下記URLを参照下さい。

http://www.kochi-kg.go.jp/DIN/DIN-001.html

会員名簿

加藤俊男　イメージラボ　テクスト
泉　順一　泉事務所
守谷孝男　デザインスタジオ301
元吉勝美　アドランド
田中幹大　サムタック
窪田光章　窪田写真事務所
狩野信児　カリノ美工
森山雄司　プラザデザイン事務所
浦川敏明　アル
岡村　聰　スタッフ・デザイン事務所
川添　寛　フォーマス
中島　悟　アド・ゴーデザイン事務所
片岡孝元　カタオカ印刷
酒井洋介　オフィス・ジャム
田中光男　田中光男事務所
池田あけみ　池田あけみ文案工房

顧問　坂本昌三郎
(学) 高知学園専務理事

事務局　仲村　譲
高知県工業技術センター

▼▼▼▼▼▼▼インターネットＨＰ情報▼▼▼▼▼▼▼

日本産業デザイン振興会や国際デザイン交流協会はじめ国内の主要デザイン団体の活動情報を入手するには、下記のURLが役立ちます。

http : // www. jidpo.or. j p / japandesign /

また、日本デザイン学会は次のとおりです。

http : // wwwsoc . nacsis . ac. j p / jssd /

編集後記

第一線で活躍している人の仕事には、ジャンルを越えて人を引き付けるものがある。

依頼事も多く、その全てを受けるわけにもいかず、相手を傷つけず断ったり日延べをしたりしなければならないこともあるだろう。

その内容は十人十色である。

そこには、論理的というよりも人間的なカンとかコツ、技や匠といったものを支えていたであろう心が現れる。

仕事の心と言い訳の心、同じココロであるはずなのに、いろいろ違いがあり教えられることが多い。（元吉）

発行　高知県産業デザイン振興協議会
印刷　有限会社片岡印刷所
編集長　元吉勝美
編集委員　田中幹大　片岡孝元　仲村　譲

高知県産業デザイン振興協議会　会員名簿　1998年8月28日現在

会長	加藤俊男	(有)イメージラボテクスト	0888-97-0316	0888-97-0317
理事	泉　順一	泉事務所	0888-73-1515	0888-23-0085
理事	田中幹男	サムタック	0888-45-7103	0888-45-7122
理事	守谷孝男	デザインスタジオ301	0888-24-9164	0888-24-9164
理事	元吉勝美	アドランド(株)	0888-82-1223	0888-82-1240
監事	窪田光章	窪田写真事務所	0888-43-8069	0888-50-0224
	狩野信児	カリノ美工	0888-45-2404	0888-46-2346
	森山雄司	(株)プラザデザイン事務所	0888-24-6133	0888-24-8653
	浦川俊明	アル	0888-22-2666	0888-24-2687
	岡村　總	スタッフ・デザイン事務所	0888-75-4303	0888-75-4338
	川添　寛	(有)フォーマス	0888-66-4440	0888-66-6143
	中島　悟	アド・ゴーデザイン事務所	0888-25-2329	0888-24-4190
	片岡孝元	(有)カタオカ印刷	0888-45-2211	0888-45-2214
	酒井洋介	オフィス・ジャム	0888-72-0271	0888-23-1201
	田中光男	田中光男デザイン事務所	0888-40-8339	0888-40-8339
	池田あけみ	池田あけみ文案工房	0888-72-7588	0888-72-7588

顧問	坂本昌三郎	(学校法人)高知学園専務理事	0888-40-1121	088840-1223
事務	仲村　譲	高知県工業技術センター	0888-46-1111	0888-45-9111